
正しい魔導の使い方(仮)

羽田トモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい魔導の使い方（仮）

【Nコード】

N 6 4 5 3 W

【作者名】

羽田トモ

【あらすじ】

世界には魔導という力が存在する。それは人類に与えられた古よりの力。いつ現れるやもしれぬ『魔物』に対抗する力。

しかしその『魔物』という存在は記録上には存在しない。誰も見たものもないければ、文献もない。ましてや魔物の化石なんてものもない。

ただ残っているのはかつて人は魔物と戦争をしたという伝承とその戦争の遺物——魔導。

揮えない正義は悪へと転じ、その力はしばしば悪用される——魔触心牆——嫌われ者の魔導士。魔物が現れない現代。魔導士は畏怖される存在へとなった。

私立鷹光学園に通う魔導士——脇坂正道は魔導は正義のための力と信じている。

仮のあらすじです。中途半端ですみません。

練習用の小説です。とりあえず公開してみようと思いました。ゆつくりですが連載できたらと思います。拙作ですが宜しく願います。

“ ”で囲まれているのはルビで・・・振る部分だと思ってくださいませ。携帯表示のことを考慮してそうしております。ちなみにサブタイトルも仮です。

血と魔物

『魔に触れる者、心に牆^{かき}を立てよ』

牆とは垣根のことである。これは魔導士と接する際は一線を越えてはならないという意味の古いことわざで、現代では「損をする」という意味でしばしば用いられる。

要するに、魔導士は昔から嫌われていた。

いつか現れるかもしれぬ「魔物」。それに対抗する力が魔導であり、それを使役する魔導士なのだが——「平和な現代に無益な力を持った危険人物」——それがここ、日本での魔導士に対する一般的な認識である。

だが、魔導士すべてが“危険人物”かというそれは誤りである。むしろ危険人物は少数。魔導士の戦争投入、魔導を神の力と崇める過激派のテロ、日常における魔導を使った事件。最近だと三年前に起きた中東での戦争に魔導士が投入されたという噂。

これらの事象、魔導の誤った使い方が「魔力」を持たない人間に恐怖を与え、魔導士を危険視させている。そのため隠者のように正体を隠しこの世界を生きる魔導士も多い。

そもそも魔導とはなにか。詳しいことは不明である。

文献は何一つとして残っておらず、残っているのは数千年前に人と魔物による戦争が「消えた大陸」でおきたという伝承と「地水火風」四属性の魔導の使い方ぐらいなものであった。

魔導や魔物について研究する者もいるが、魔導士は魔導が使えるというだけで他の人間と“ある一点を除いては”血液も、皮膚も細胞も何ら変わりはなく、こと魔物に至っては大陸そのものが消失してしまっているの“魔物の化石”なんてものもなく、さらに何も

分かっていない。重箱の隅をつついても何も出てこないような状況に「魔導士こそが魔物の正体だ」などという研究者まで出た。

しかし、その意見には賛同する者も多い。

美泉市^{みいずみ} 第二埠頭 某倉庫。

立ち込めた冷たい夜気が男の嗩声に震える。

「だ、誰だてめえはッ！」

緊迫した声に周囲の男たちも立ち上がる。その数約二十。

「……！」

闖入者^{ちん}——漆黒のコートを纏った巨軀の男。齢は三十代後半から五十代。金髪のオールバック。跳ね上げ式の丸いサングラスが頑丈そうな骨格に不釣り合いな男……相手の特徴を完全に把握する前に全員が闖入者の両手に持たれた“もの”を見て息を呑んだ。それは赤黒く、まるで熟れたザクロのようで——

「これ、君たちのお友達だろ？」

低い声が響く。闇に沈んだ海を背に、男は重々しいブーツの靴音を鳴らして歩みを進め、その無骨な両手に持ったものを男たちに軽々と掲げて見せた。赤黒いそれが照明に照らされて林檎飴のように怪しく光る。それを見て男たちの誰かが確認するように声を上げた。
「……ユウタと……タイキ……か？」

男の両手に持たれていたのは頭部を血に染めた男たち——ソーサリーギャング「ブラザーフッド」通称「ブラッド」——のメンバー二人。この倉庫はブラッドのアジトのようである。

闖入者はその二人を床に投げ、

「あー、どっちがどつちかな？」

丸太のような腕を組み、もはや血で顔の造作も判然としない二人を見比べた。倒れている二人は微かに呻いている、虫の息ではあるが死んではいないようだった。男は独りでに語りだす。

「いやね、私が街を歩いてるとだね急に路地に引つ張り込まれてね。そこでこの子たちが「色眼^{しきがん}」を見せびらかして、血……いや、ブラッドがどうかいってお金を要求してきたから……」

「ッ！ それでやったのかッ！」

殺気立った男たちのなかから左眼が黄金色に輝く少年が飛び出す。それは魔力を持たない人間との唯一の特異点「色眼」をさらす魔導士。

「おいおい、話は最後まで……」

「黙れッ！ 『^{アースソード}土刀』ッ！」

瞬間。少年の手には木刀のようなものが顕現し、しかと握られていた。ただ木刀のようなだけで刃は鋭い。

少年は男に振りかぶる。男は巖のような巨軀、“見失いさえしなければ”どこにでもその剣撃を当てられる気がした。しかし——
「え？」

見失った。

勢い良く地面に叩きつけたせいで^{アースソード}土刀が砕け散り、土の欠片が飛散する。

「——魔導を使うまでもない」

冷たい重い声。後方、振り向く間もなく少年の身体は積み荷の壁に吹き飛ばされた。鈍い衝突音を上げて少年が崩れ落ちる。男の動きは人間を超越していた。少なくともここにいる人間には男の動きが見てとれなかった。

あまりの実力の差、本物の戦闘力に男たちは凍りつく。

「では、話の続きだ」

男は突き出していた右腕を静かに戻し、サングラスを押し上げた。
「リーダーは？ …… いるんだろう？ なんでもこの街では名の通った犯罪集団だそうじゃないか。そのリーダーに是非お会いしたくてね」

「だからここまで来たってのか」

高く積まれた中身不明のコンテナの上から黒いパーカーの男が飛び降りる。左眼は先刻の少年と同じ黄金色——特化属性は「地」——
——闖入者の男とは違い、無理やり染めたような金色の短髪に耳を埋めつくさんばかりのピアス。顔立ちは整っているが眼つきはナイフのよう。その男は臆することなく歩を進め自分より頭一つ大きい男の顔を見上げる。

「君が…… テルキ・アサマ君か。名前はそこの二人に訊いておいた」

「逆だ。浅間照樹だ。外人がなんの用だ。まさかとは思うが俺らを潰しに来たか？」

「外人ねえ。私は日系アメリカ人だよ。親日家の…… でもまあ外人か」

男はいつて、押し殺したように笑う。

白い肌になつた金髪。まるで軍人のような格好をした男は外人にしか見えない。浅間は男が流暢な日本語を話す理由を秘かに納得しながら怪訝そうに声をあげた。

「おい」

「おつと、そんな怖い顔するなよ。ここに來た理由はね、お金を“払いに” 來たんだ」

「はあ？」

「そこで真つ赤になつてる子たちの要求だよ。誰も拒絶なんてしてない。払うからリーダーの所へ案内を頼んだら襲つて來てね。正当防衛だよ」

「どういう……？」

（なんだコイツ…… 街でいきなり絡んで來たやつ潰して、アジト

まで乗り込むか普通？　しかも金払うだと？　なに考えてやがる）
——判然としない浅間をよそに、男は両手を広げブラッドのメンバー全員に聞こえるように声を上げた。まるで舞台俳優のように朗々と。

「ブラッドは今日、この時を持って私が“オーナー”だ！　この組織を買い取らせていただく。金で動くのだろう？　君たちは。ならばこの私がブラッドというエンジンに金という名のオイルを注いでやろうではないか！　その代わり、私の為に働いてもらうがね」

突然の買収宣言に張り詰めていた空気がざわつく。男が入ってからまだ十分も経っていない。それなのにこの男は組織のトップに立つ気でいる。

「ああ、あと一つておくが……刃向かう者は——殺す」

殺す——男の口から出たこの二文字は重く、冷たく、そして鋭い。その一言で聞いたものを恐怖で蹂躪する響きだった。

規格外。常識ではない所でこの男は生きている——逆らえない。

この倉庫にいるブラッドのメンバー全員がこの男に“殺される自信”があった。

「だが心配はいらない。君たちの仕事内容はそれほど変わらんさ。むしろ烏合の衆に目的、指針が出来るんだ、結束出来ていいじゃないか。なあ？　テルキ・アサマ」

この場の空気を支配してしまった男は笑みを張り付けて浅間を見る。この男が現れるまで場を支配していたブラッドのリーダーは小刻みに震えながら——笑っていた。

「ククク……アーツハツハツ！　なにいい出すかと思えば……おもしれえ！　どうせまともに生きてけねえとこまで堕ちた身だ。なにをするかは知らんが、その話乗ってやるぞ、おっさん」
「そういつてくれると思っていたよ」

どこか酷薄な笑みを浮かべた男の分厚い手が伸び、交わされる握手。仲間三人を叩きのめし、組織を丸ごと呑み込んだ謎の男に拍手が送られる。それは絶対的な死を逃れるための服従の音色。その音は手を叩いたものの自らを穿つ発砲音のように乾いて響いた。

「おっさん、名前は？」

「おっと、私としたことが、自己紹介がまだだった」

いつて男はサングラスをそつと外す。照樹とはまた違う重く鋭い眼光。左眼の鮮血のような赤が魔導士であることを示す。特化属性は「火」――

「私はグレン・F・タカサキ。魔導……いや、――『魔物』……かな」

「かつ、金が……」

市内中心部、美泉駅を中心に八方へ延びる大通りの一つ、「学園通り」。

片側三車線の車道には通勤に急ぐ車の群れ、歩道には同じ方向へ足並みをそろえる学生服姿の男女、街路に植樹された一年中咲く桜の花弁が風に舞い、林立する近代的なビルに切り取られた初夏の青空に季節外れの彩りを添える。

涼やかな風が吹き、鳥が鳴き、花弁が舞う。それはとてもさわやかな朝で、空を舞う花弁のようにこれから始まる一日に思わずステップを踏んでしまたくなるほどだった。

しかし、額に冷や汗をかき——左眼を宝石のように赤く輝かせる少年——脇坂正道の目には自らの財布の虚空しか映っていないかった。「あのクソ親父め……昼飯代を使い込んだのはお前だから追加はせんだと？ 息子が学校という閉鎖的空間で餓死してもいいのか……」正道は眉根を寄せて零距离で財布を覗き込みながら父親に対する呪詛をもがとつばやく。つばやくといっても正道の聴覚はヘッドホンから流れる大音量の歪んだ音楽に支配されているのでその声は前方の人間が振り返るほど大きい。

しかし悪いのは正道であって、それを理解していないわけではない正道はコンビニ「スプリングマート」で昼食を買う同じ学生服姿を見てため息を盛大に吐いた。ガラスに黒いギターケースと整っているが少し無邪気さのある正道の顔が映る。その顔は心なしかやつれている。

自業自得。そんな顔になるのも限られた昼食代を趣味のギターに

つぎ込んだ正道が悪いのである。

ちなみに正道の背にあるべたとシールの貼られたギターケースには入るべきものは入っていない。入っているのは教科書やノートである。つまりそのギターケースは鞆代わりに使用されているのだった。

「くうー、こうなったら駅前で魔導芸でもするか？ ……いや、許可ないし、バレたらやばい。停学もんだ」

魔導を使用した商売は例え大道芸であつても許可がいる。違反すれば懲役、もしくは結構な罰金をとられてしまう。他にも魔導士に対する法律はいろいろ厳しい。

（そうなったら昼飯どころか晩飯も危うい……てか親父なら「臭い飯でも食つて来い」とかいうんじゃなかるつか……ひい）

正道は浮かんだ妄想をぶるぶると首をふって掻き消し、ガラスを鏡に茶色に染めたミディウムヘアをセットし直すとスプリングマート脇の路地を折れた。路地裏をジグザグに進んだ方が近道なのだ。遅れるほどの時間ではないが正道にとってはもはや路地裏は通学路となっている。

「しかしどうするか。五、六限目は体育。しかもバレーボール……栄養も補給せずに戦が出来るものか！ ……しかたない、今日は真美の弁当だな」

唯一の得意科目である体育に全力を出せないのは甚だ本意である。ここは幼なじみである真美の弁当に手を出すしか道はないと正道は決めた。おそらく真美は文句をいっどころか喜んで弁当をさし出すだろう。

高校生活が始まって間もないが正道はその「友情」にかこつけて弁当を分けてもらったことが結構ある。

一応申し訳なさそうにするが真美の弁当は美味しいので昼食の有無にかかわらず正道は真美の弁当を食べたいと思っている。

「む？」

路地裏を進むとスプリングマートの水色の路地裏のごみ箱が蠢いていた。それを見て正道は歩みを止めた。一匹の三毛猫のごみ箱を漁り、今日の朝食にありつこうとしていた。

「……」

しばし逡巡——ごみ箱↓コンビニの↓廃棄の弁当にパンその他もろもろエトセトラ。正道の手がなにかを求めるようにわなわなと動きだす。

「って、いかんいかん。おのれミケ助、俺を底辺に引きずり込むつもりだったか、この悪魔の手先め」

正道は独りつぶやいて三毛猫に指をさす。悪魔の手先でもなんでもない三毛猫（しかも勝手に名付けられた）は不思議そうに首を傾げ、正道を見ている。

正道はしばらくミケ助と見つめあったあと不意に瞳を輝かせた。

それはとても邪悪な光——

「お前オスっぽい顔してるな……ぐふ、聞いたことがあるぞ。三毛猫のオスは高く売れるとッ——」

正道はいつて「一攫千金！」と叫びミケ助に飛びかかった。ミケ助は危険を察知していたのか、毛を逆立て、正道の手が届くより速く身を翻し路地を駆ける。

「あつ、待てッ」

追う正道、逃げるミケ助。俊敏な猫の走りをぴったり追尾する正道。その表情は余裕に満ちている。どうやら遊んでいるようである。ミケ助はそんな正道の表情を見てぎよつとする。

こつちを窺ったミケ助の隙について正道は手を伸ばす。

手がミケ助のしっぽに触れるか否か——

ミケ助の身体は黒い一閃によってビルの壁に吹き飛ばされた。

「！」

正道は立ち止り視線を上げる。そこに立っていた動物虐待の犯人——黒いパーカーに黒いカーゴパンツの若い二人組。長身痩躯と短身肥満の縦にも横にも凸凹コンビ。深々とかぶられたフードの闇に長身は青、短身は緑の光が一点ずつ邪悪に灯っている。

魔導士——特化した属性は水と風。しかもこの格好……正道は、いや、この街に住む者なら知っている。自分たちをソーサラー（魔導士）ギャングと呼ぶ犯罪集団「ブラザーフッド」、通称「ブラッド」。黒ずくめの恰好はブラッドの“仕事着”。

しかし、闇の住人であるはずのブラッドがこんな時間からなにを？ 正道は怪訝に思いながら足が折れたのか上手く動けなくなっているミケ助を抱きかかえその二人組と正面から対峙した。ヘッドホンも外し、首にかける。漏れ聞こえる音楽がノイズとなり正道の心を乱す。

ブラッドと出くわしたら逃げるのがセオリーだがそうはいかない。正道にとってこのブラッドという集団は一番腹立たしい存在なのである。

『魔導は正義のためにある』

この信念を胸に正道は生きている。だから正道は魔導士の証である色眼は隠していない。

色眼を隠していないのは目の前のブラッドのメンバーや一部の不良と同じであるが、威圧のそれとは一線を画している。

魔導は世のため人のため。たとえ魔物と呼ばれる存在が現れないとしても魔導という力は正しく使えるはず——だから許せない。

欲望のために平然と力を使う者たちが。

父親に教えられたその精神はいつしか正道のなかで独自に育まれていた。

「悪い、お前の猫だったか？」

嘲るような低音が響く。長身の男が鉾のようなピアスが刺さった口元をにやにやさせながらミケ助を蹴った右脚をぶらつかせた。その表情に謝罪の感情は見とれない。むしろ愉悦に歪んでいるといった印象を受ける。目元はフードの闇で窺い知れないが、嘲りの色が浮かんでいることを容易に想像させる。

「猫、猫、にやにやにや」

短身の男はその後ろで独り言のようにつぶやいている。その声には起伏がなく不気味。音質は道化のような高音。つぶやきが発せられるたびフードから溢れそうな頬の肉が揺れる。フードの闇から延びる鼻梁は大きく丸く、時折ひくひくと蠢いている。

「お前、“タカタカ”の生徒だろ？」

「鷹、鷹、ぴーひよろろー……鳶？」

私立鷹光学園高校——鷹光の“鷹”と高校の“高”をとって通称タカタカ。

鷹をモチーフにした校章のついた濃紺のブレザー上下。見れば分かることを訊いてくるのは余裕からか。このあたりに鷹光学園以外に高校はない。学園通りの名の由来は歴史があり、建造物としても有名な鷹光学園そのものにあるのだ。

「タカタカは魔導士が多いのは有名だが、隠していないやつは初めてみた」

「炎、炎、あっちうち」

長身の男は青く輝く自分の色眼を指さす。短身の男は正道の色眼を一瞥してつぶやいた。

鷹光学園は理事長が魔導士ということもあってか魔導士への門扉も広く、魔導士の生徒が多い。その生徒のほとんどがカラーコンタクトなどで魔導士の証、生まれもつての自らの得意な属性——特化属性が色となって現れる色眼を隠している。隠してしまえば魔導士なのか普通の人間なのか判別がつかない。

色眼を隠さなければ不良に間違われたり、無闇に畏怖の対象になる。自分が魔導士であることを誇示するのは損することばかりなのだ。今の正道のように。

「てか……なんか喋れや」

「発言を許可します！」

短身の男の方は相変わらずだが、長身の男が殺気立つ。その声は怒気を孕み、表情は笑っていない。今にも“発導”しそうだ。

「……金なら、この通り」

ブラッドにとってカツアゲは歩く“ついで”にするようなものと誰かがいつていた。やはり目的は金か？ そう思っただけで正道は何も出てこない財布を片手で振った。

しかし、どうも違ったようで長身の男はその哀切な風情漂う財布を見て鼻で笑った。

「金なら間にあってる。お前みたいなやつは財布なんてあてにしねえよ」

「マナー、マナー、マナーあってるー、くふふふふ」

「黙れ」

「黙る、黙る、しーん……ぶっ」

「うつせえッ！」

騒がしい二人組を見ながら正道は黙考する。目的は金じゃない？ ではないんだ……不穏な空気に正道はミケ助を抱いていない方の左手に集中した。いつでも発導できるように咳払いも一つ。

魔導の使用——発導には「属性鍵語^{けんご}」がいる。正道が咳払いしたのはその属性鍵語が裏返ったりしないようにするためである。

“正義の魔導士”がいざというときに声が裏返っているなど格好悪い。正道は二人を睨みつける。その視線に長身の男の顔が再び愉悦に歪む。

「なにその目？ まさかやる気？ ブラッドを相手に？ しかも二人」

「二人、二人、二倍、二倍！」

諸手を挙げてピースサインをしながら短身の男が楽しそうに小躍りを始める。その足取りは軽快そのもので飛び跳ねる毬のように見える。

「ククク、いやあ、“確かに”タカタカにはおもしろいやつがいるみたいだなア。色眼さらして、反抗的。果たしてそいつはよほどの自信家か……それともただの阿呆か。確かめさせてもらっぞッ！」

「阿呆、阿呆、俺？ 天才！」

歪な二人組は同時に地面を蹴り左右に分かれる。そしてほぼ同時に両手を突き出し発導——

「水蛇^{すいだ}！」
「ウィントフィスト
風拳！」

二人の手のひらがそれぞれの属性色に淡く輝く。水は青に風は緑に。

瞬間、狭い裏路地を蛇を模した水流が轟音とともに走り、空間を蹂躪する。そこに薄緑の空気を纏う道幅いっぱい巨大な拳がその蛇を貫き、正道を襲う。

「って貫いてどうする！」

「あは。ごめんごめん」

暴れた水流と風の拳のせいで裏路地のごみ箱やごみ、自転車などは大通りの方へ吹き飛び、裏路地は舞うガラスやごみで荒涼とした景色に様変わりした。その景色に正道の姿はない。

「あら？ あら？」

「ちつ、やりすぎだ。マリオ。死んでたらどうする」

短身の男の名前はマリオというらしい。

発導したときガキの姿は見えなかった、大通りまで吹き飛んだか？ —— そう思っ て長身の男は歩き出す。

大通りの方からは悲鳴のようなものも聞こえてくる。どうやら路地裏から飛んできた諸々のもので少しパニックが起きているらしいかった。

「バカが。あんなんじゃすぐポリが来ちまう…… さつさと“回収”するぞ」

歯噛みして長身の男は進む。が、マリオからの返事がない。

「聞いてんのかマリオ……？」

不審に思っ た長身の男が振り返るとそこには……。

「さっきの属性鍵語ってドイツ語？」

「そう、そう、ぐーてんもるげん！」

正道とマリオがどこか楽しげに会話をしていた。

「な、なにやってんだこらあ！」

焦燥を帯びた長身の男の怒声にマリオははっと目を丸くした。どてどと腹を揺らし、長身の男のもとへ駆けてゆく。

正道より頭一つ小さいマリオの目は大きく、意外と純粋な目をしてた。マリオが見上げる形だったのでマリオの顔とフードの隙間からタトゥーの入った禿頭が見えた。

「ごめんよハリオー」

「獲物がいるときは名前を呼ぶな。決まりだろうが。……ちっ、お前どこにいた？」

ハリオーと呼ばれた男は憎々しげに正道に問いかけた。正道は二人の後方に回り込んだとしか思えない所に立っていた。左腕にはミケ助がしっかりと抱かれている。

制服や髪型、無駄に存在感のあるギターケースに乱れはない。

「属性鍵語がドイツ語か…… かつこいいな」

正道はハリオーの問いかけを無視する形でつぶやく。

属性鍵語は基本的にその使用の容易さから英語が多い。しかしどこの国の言葉でもその意味さえ自分が“理解していれば”魔導は発導できる。鍵語さえ発声できれば前後につく言葉はイメージに準ずる。

剣を思い浮かべれば剣に。盾を思い浮かべれば盾に。地の属性が得意な魔導士は精巧な人形を生み出すこともできる。そのため魔導は自分の意識を具現化できる力ともいえる。

「おい、質問に」

「答えないと分からないのーお？」

正道は半眼になって口到手を当ててプププと笑う。

「な……なめやがって」

ハリオの歯噛みする音が正道の耳にも届く。怒りに震える両手は青く光り、暴発寸前。このまま発導されると大通りの方に被害が出るかもしれない。正道は二人組の頭上をこっそりと見上げ、“仕掛け”を確認した。

この二人は警察が来る前に逃げるだろう。しかしそんなことは許さない。逃がしてなるものか——その仕掛けを発導させるために正道は口を湿らす。

そして、丁度いいタイミングでパトカーのサイレンが近づいてきた。あれだけ派手にやれば通報も早い。

魔導士に対応する警官はM D A (M a g i c D e f e n s e A r m o r) と呼ばれる特殊な装備をしていて魔導が効きにくい。だからブラッドのような魔導をむやみに振り回す“小物”の犯罪者にとっては極力関わりたくない厄介な存在なのだ。

「ハリオ、おまわり、おまわり」

「だぁッ分かつてるよッ！　あと名前呼ぶな！」

マリオが不安そうにハリオのズボンを引っ張る。

二人は見るからに焦りだした。

「ハリオさん」

「ああ？」

「さっきの質問の応え」

正道は今にも逃げだしそうなハリオの名前を呼んで、頭上を指さす。ハリオは名前を呼ばれてなにかいいかけたが素直に上を向いた。マリオもつられて上を見る。

「なんだ、ありゃ？」

そこにはマンホール大の燃えるような赤い円盤が四つ、等間隔に

並んで浮かんでいた。

「さっきの発導はあれを足場にして避けたってわけ」

「どうやって……」

ハリオは苦々しく頭上を睨む。円盤は頭上高く、魔導の力でも借りない限り常人の跳躍力では届かない位置に浮かんでいる。

魔導の発導は一度に一つの属性に限られている。二つ同時に発導する魔導士はいまだ確認されていない。すなわち、正道があつた円盤に乗るには過程としてもう一つの発導が必要不可欠だった。

このガキ、あの一瞬で二つ発導を——ハリオは再び齒噛みする。

（浅間の話を小耳に挟んで通学路を偵察に来た。来てみたら上手いことに“ターゲット”らしき色眼を隠さない魔導士がいた。そいつは誘ってもいないのにこのこと裏路地に入ってきたやつだ。まさに飛んで火にいるなんてやら……ここぞとばかりに接触したらそいつはただの阿呆ではなく自信家、いや、まともな魔導士だった——これじゃ俺が阿呆の自信家じゃねえか。くそう、調子こいた！ 最悪だ）

魔導士には“敵”がない。魔物などもはやファンタジーの世界の生き物になっている。それゆえ、使い方は分かっているも自らに眠る魔力を行使しない者が大半で、戦える魔導士は少なかった。

その敵がいらないおかげで魔導士も普通の人間も分け隔てなくカモにしてきたブラッドのメンバーはお互いの魔導をぶつけ合うような戦いには慣れていない。

唯一、「ホワイトナイト」と呼ばれている謎のヒーローがブラッドの邪魔をするくらいで、敵がいなのはブラッドも同じなのだ。

一筋縄ではいかない相手。おまけに迫る警察。ハリオは困惑していた。

（なにもんだこいつ……ホワイトナイトみたいに自分を正義のヒー

ローとか思いこんでる狂人か？ それとも俺らが関わっちゃいけない相手か……あのグレンとかいうおっさんみたいに……ああもうどうでもいい。色々やべえ)

ハリオは考えるのをやめた。正道のことは黙っておけばいい。“先走った”ことがバレればどうなるか分からないし、今は逃げないといけない。固執して捕まるなどただのバカだ。

「まあいい、お前ブラッドを敵に回すことになるぞ。次会うときは……」

「会わない」

「ひゃ？」

息継ぎのタイミングで遮られたのでハリオの捨て台詞はおかしな息の音に変わった。正道は飄々と左手を挙げる。その手は淡い赤を帯びていた。

発導！？——ハリオは身がまえる。突如肩に衝撃。予期せぬ衝撃にハリオが息を呑んだ。

「ハリオ、ハリオ、上、上！」

衝撃の正体——マリオが上を向きながら跳ねるようにしてハリオを叩いていた。

「驚かせんな、今そこどころじゃ……」

いいつも視界に捉えた円盤の一つが燃え上がっている。見まわすと他の円盤も同様に燃え上がっていた。それはまるで火の玉のよう路地裏を照らす。

(なんじゃ？ てか、なんでまだあの円盤浮いてんだ???)

一瞬の思考停止。ハリオはその火の玉に見惚れるようにして立ちすくんだ。

すると後ろでばたたと去っていく足音が鳴った。

「あッ！ マリオ！」

マリオがハリオを置いて走り出していた。

「ハリオさんってバカだね。マリオさんのほうがよっぽど賢い」
ハリオを置いて逃げるマリオ、丸い背中が揺れる。バカといわれこの期に及んで怒りをあらわにするハリオ。口から泡が飛んだ。目の前の光景がゆっくりと見える。それほど正道は集中していた。

「逃がすかよ——『フレイムジェイル炎弦の牢獄』！」
仕掛け——発導。

「なッ！」
「わわッ！」

発導と同時にハリオとマリオの上に浮かんでいた火の玉が弾け、尾を引きながら放射状に拡散する。引いた尾は消えず、燃え盛ったまま二人の退路を断っていく。

炎の弦をパンパンに孕んだ火の玉がすべて弾けると正道の前には細かい網目の燃える箱ができていた。もちろんそのなかにはハリオとマリオ、ブラッドのメンバー二人が入っている。

それは魔導学（学問を形成できるほどの資料がないので名前だけが）でいう、地雷型魔導の応用だったのだが、そんな名称は正道は知らない。

正道は自然に自分のイメージのまま魔力を扱える、稀有な高校生魔導士だった。

ちなみに、正道の使う魔導の名前には正道の好きな洋楽へヴィーメタルやハードロックの邦題をイメージしている。少しクサイとも思っていたが、正道は魔導の名前を考えれば考えるほどわくわくした。

「あっち！ あっち！ ……やばいよハリオー」
「く、くそつたれがッ！」

網目から二人が熱さに踊っているのが見える。いよいよサイレン

の音も近くなった。警官が流れ込んでくるのも時間の問題だろう。

「ふう……成功。あ、決めゼリフ、決めゼリフ……」

正道は思い出したようにつぶやくと“温めておいた”セリフを決めるため背筋を伸ばし、びつと指をさした。

「正義の炎がこの身にたぎり、悪を倒せと血が歌う！ 美泉の悪はこの俺がロックしてやるぜ！ 正義完了！」
ジャスティスコンプリート

路地裏に響き渡る正義の声——正道は悦に浸りながら突き出した右手の人差し指と小指を立ててメロイックサインを決めている。ヘヴィーメタルなどでよく見られるこのポーズには悪運や邪気を払う意味もあるので採用した。

決まった……ロックには打ち負かすとかそういう意味もあつて、また閉じ込めるとかそつちの“LOCK”の意味でも使えるんだなふふふ——ネットと辞書で調べた知識を自分のものにして正道は心のなかで笑う。

それにしても反応がない。濃密な沈黙。

「……」

「……悪くない、悪くない」

「フォローすんなバカ」

炎の牢獄からは熱気とともに憐憫の空気が流れだしていた。ハリオとマリオの無表情に正道はポーズを解除して首を傾げる。

「……あれ？ ダメ？ ダメかあ。かつこいいと思ったんだけど……んー、まあいいか。やべ、学校遅れる！ 失礼！」

予期せぬ時間の圧迫に正道はびしつと敬礼をして、ミケ助を抱いて路地裏を駆けた。無遅刻無欠席が取り柄の遅刻はまずい。あとは警察におまかせである。

後ろから「覚えてろよ！」などありきたりな台詞が飛んできたが

無視した。というか興奮で正道の耳には自らの鼓動が響いていて、あまり聞こえていなかった。ヘッドホンからの音楽も耳に入らない。ガチガチと鳴る口を開けて正道は叫ぶ。

「ブラッドこえーっ！ 心臓はえー！ BPM200はいつてる！ まさにハートビート！ ブラッドこえー！」

——実は恐かった。

もちろん興奮もあった。だが背中では冷や汗で濡れていた。発導し
てからは少し落ち着いたが、不安もあった。

立ち止まるとおそらく震える膝を振り上げて正道は地面を蹴る。
左腕に抱かれたミケ助が揺れてニヤーと鳴いた。

自分の魔導は通用したし、ミケ助も無事だ。“初めての悪党退治”
は正道が思っていた以上に上手くいった。魔導はやはり正義で、
そして正義は勝つのだ。

「遅刻だ」

「きゃんッ」

短い悲鳴が響いた鷹光学園高校1 - 1組の教室。

鷹の像がついた豪華な門をくぐり、ミケ助をとりあえず保健室に預け、階段を駆けあがり教室に滑り込むと正道の目の前にはゴリラが屹立していた。

いや、正確にいうとゴリラのような担任教師の森 沙希である。生徒間ではもれなくゴリサキと呼ばれる。短髪、体育教師らしくつねにジャージ姿。180センチはあろうかというがっちりとした体躯に人類の進化を感じさせる進化論顔。その顔から視線を下げれば豊満な胸が二つ、筆舌に尽くしがたいアンバランスさを演出している。

そう、森は性別上女性である。このうえ魔導士であるなら俺なんか足元にもおよばねえ！　　と正道は思っていたがそれはどうやら杞憂だった。

今はショートホームルームの時間。運がよければ出欠をとっている可能性もあったのだが……残念ながらすでに名簿は閉じられ、閉じられた名簿は正道の頭に振り下ろされた。ぱこつと軽快な音が弾ける。

「い、いやー、先生。今日も素敵なお顔で。3Dテレビもびっくりの迫力でんなあ」

正道はダメもとで関西人顔負けの手揉みをしながら森に媚びてみ

る。イントネーションもそれらしく。

「お前それ褒めてんのか」

森は正道を見下ろしながら、一度耳にただけでは性別の判別ができない声を発する。どうも遅刻は免れないようだ判断した正道は半ばあきらめ、ウケをとる方向に思考を切り替えた。

「そりやもう。同じ霊長類として誇りです。人語を巧みに操り、教員免許まで取得した奇跡のメスゴリ、らッ！」

再び名簿が正道の頭に降り下ろされ、教室に笑い声が咲く。窓からは温かな陽光が差し込み笑顔の花を照らしている。今日も学園には平和な時が流れていた。

「へへへ」

正道はおどけて頭をかく。笑顔。笑顔。笑顔。正道はこの平和な雰囲気が好きだ。

その気になれば大勢の人を傷つけることができる魔導士。それは時として魔力をもたない人間にもいえることだが、それはなんらかの兵器があつてのこと。“持っていないのに持っている”、“徒手空拳”という言葉があてはまらない魔導士はその存在を誇示するだけで畏怖される。

それでも正道は信念のもと、色眼を隠すことはしない。そんな正道をこの学園は受け入れてくれる。

魔物がいない現代、魔導士が魔物だなどといわれることもある。しかしそれは違つと正道は思っている。魔導士は魔物なんかじゃない“人”だ。悪いのはブラッドのような魔導を正しく使えない力に溺れた魔導士。そういう存在が魔導士差別を生んでいる。

そう、ブラッドのような。

結局、闇の住人が朝から動く明確な理由は分からなかった。あの二人は今頃逮捕されているはず。しかし、明日からは警戒をしなけ

ればいけない。

正道はハリオのいった通り“ブラッドを敵に回した”かもしれないのだ。

「で、脇坂。遅れた理由はなんだ？ 一応聞いといてやる」

「え？ あー、ええーとっ……」

森は名簿を開き何やら記入している。まだ遅刻のチェックはしていないらしい。まだチャンスはあるとその様子を見ながら正道は理由をいい淀む。

「登校中にブラッドの二人組に襲われて、戦ってました」——なんていえるわけがなかった。警察沙汰になる。しかも攻撃性の魔導ではないものの発導してしまった。これは校則違反になる可能性がある。

『私立鷹光学園高等学校校則 第十七条 校内、登下校中の魔導の使用について。 本校の魔導士である生徒はいかなる場合においても魔導で人を傷つけてはならない。やむを得ず発導する場合は周囲の安全を確認し——』

どの学校にでもある基本的な校則であるが、やむを得ずという状況で周囲の安全にまで目がいくだろうか。もちろん、他人を巻き込むのはよくないので正しいとは思うが。

今朝のことはそのやむを得ずの状況に含まれる（しかも、周囲の安全まで確保）と思われるが、面倒になるのは見に見えているのでわざわざ進んで伝えることはない。

「なんだ？ ……怪しいな」

森の純粋な黒目がちのつぶらな瞳が正道に接近する。瞳までゴリラにそっくり！ とか思いながら正道はのけぞる。顔だけが飛び出してくるような異様な迫力に吞まれそうになり、気づけば腰骨が鳴るほど正道の身体は反っていた。

このままだと無遅刻無欠席の称号と俺の腰が！ 正道は冷や汗を滲ませて口を開いた。

「ね、猫を助けていました！」

一番大きな理由が抜け落ちているが嘘ではない。保健室に証拠だつてある。

森が怪訝そうに何かいおうと口を開けたと同時にチャイムが鳴り響いた。

「……まあいい。今回は初めてつてことで見逃してやる。お前から無遅刻と体育をとつたらなにも残らんからな。……授業中寝るなよ。寝たら顔を挟んでやるからな」

なんだかひどいことをいって森は豊満な胸を寄せる。チャイムによつてざわつきだした教室が一瞬凍る。

なにを勘違いしているのか森はこの行動をたまにとる。教職員としてあるまじき行為かもしれないが、この学園の教職員は“アク”が強いのでこの程度は許容範囲である。が、不快なのは確か。あれは「欲求不満の怖さを生徒に教えるための行動だ」と誰かがいつていた。納得である。

森は恥ずかしかつたのか少し頬を紅潮させ去っていった。正道は思わず叫び出しそうになったが耐えた。世の中にはいいことと悪いことがあるように、いい人悪い人がある。森の発言はどちらも後者だった。

「吐きそ……」

よろけながら正道は窓際の自分の席に着く。

窓の外には美泉の林立するビル街が広がっている。ギラギラと陽光を跳ね返し屹立するその姿はさながらモノリスのようだ。

正道はぼーっと外を眺めながら今朝の路地裏での出来事を思い返す。

ハリオとマリオ——ためらいもなく発導してきた水と風の魔導士。目的のためなら手段を選ばないのだろう。やはりブラッドはこの街の平和を脅かす危険分子だ。今後、報復や復讐で対峙することがあるかもしれない。

その時は迷わず——戦う。

路地裏と魔物

——時は遡る。

「何やってるの君たち」

学園通り、スプリングマート脇の路地裏。重く低い声がサイレンと喧騒のなか響く。その声にはどこか嘲笑のようなものも聞いて取れる。

ハリオとマリオは炎を消火し、炎の牢獄から抜け出すところだった。その声はハリオとマリオ背後、抜け出した牢獄の反対側から聞こえる。

その聞き覚えのある声にマリオは震え、ハリオは冷や汗をかきながら鉛玉のような重い息を呑んだ。

なんで、あの男がここにいるッ！ ハリオは真っ白になりそうな頭をなんとか止めて状況を整理した。

まず、景色が変わっている。やけに暗く、正面から漏れているはずの大通りの光が“見えない”。

路地はハリオの数メートル先で折れ曲がり、大通りへとつながっている。そこから漏れる光がない。ぶれる焦点で見上げる空は青い。この路地裏だけが谷底のように暗いのだ。

ハリオは自分がまるでケーキかなにかの箱のなかに入っている気分になった。しかし口のなかは苦くて酸っぱい。この状況に甘美なものは一切なかった。

視界の隅、ビルとビルの間はこの現象の理由が見えた。

そこにはなぜか壁が建っていて、陽光と人の出入りを許さない。その向こうからサイレンと怒号が聞こえる。警官がここに誰一人入ってきていないということはおそらく反対側も同様に塞がっている。こんなことをやってのけるのはハリオが知る限り一人しかいなかった。

よりによって二人で登場かよッ——やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、ポリよりやべえ！！……あのガキのせいでッ！いくら心のなかで叫んでも状況は変わらない。覚悟を決めてこれからどういう展開になるか怯えながらハリオはゆっくりと踵を返す。形を失った炎の牢獄が消え、視界を遮るものがなくなる。そこには案の定、“オーナー”のグレンとブラッドのリーダー、浅間照樹が立っていた。

グレンはいつもの漆黒のコートに軍用のパンツにブーツ。それにトレードマークな丸い跳ね上げ式サングラス。手にはスプリングマートの袋を提げ、口にはロリポップが咥えられている。グレンから貰ったのか浅間もロリポップを咥えガリガリとやっている。格好はハリオたちと同じ黒づくめの仕事着である。

「こ、こんなところで奇遇っすね」

ハリオは極力自然な笑みを心掛けたが、自分でも口角がひきつっているのが分かる。

「そうだね。朝食の買い物にきたらなんか騒がしかったんでね。ちょっと覗いてみたら君たちがいて驚いたよ」

グレンはそんなハリオに笑みをこぼしながらいたって冷静に応えるが浅間はイライラとした様子でロリポップを噛み砕き、残った棒を地面に突き刺さらんばかりに吐きだした。そしてすっぱりと被られたフードの奥から睨みつける。それは黄金色の狂気。

完全に怒ってる！——隣でマリオの震えが増す。買い物だと？

タイミングがよすぎる。どこかで見てたんじゃ……となると、やはり。一人のガキにいいようにやられて警察沙汰にまでなった一部始終……いいわけできねえ！ 浅間は直情径行で冷酷なのは知ってるがグレンとかいうこの男「逆らったら殺す」とか、自分のことを“魔物”とか真顔でいつてのけた本物の狂人だ、なにされるか分かったもんじゃねえ。消されるのは勘弁だ！

そんなハリオの思いとは裏腹にグレンはどこか楽しそうな表情を浮かべる。浅間の鬼のような形相は変わらないが。

“あの子”がテルキのいつてた子かな？

「多分な。で……ハリオッ！」

「ひッ」

グレンへの返答もおざなりに浅間はハリオに向かって叫ぶ。震えて浅間の顔も見えないハリオはまともに会話できそうにない。それにハリオがマリオを巻き込んでいるのは分かっている。

「な、なんだよ」

浅間はリーダーだがハリオとマリオの方が一つ年上の二十歳なので敬語は使わない。かといって年下の浅間が二人に対して敬語を使うかといったらそうではない。付き合いが長いのもあるが、浅間は“誰に対しても”敬語は使わない。

「この世界には敬えるやつがいねえ」——浅間はそう考えている。

「勝手に何やってる。指示したか？ しかも負けて！ おまわりまですぐそこだ！」

浅間はハリオに詰め寄り胸倉を掴んで壁に押し当てた。顎に浅間の無骨な指輪がめり込み、フードがめくれハリオの黒い長髪が流れる。

「や、やっぱり見てたのか……た、たまたまだよ……」

「たまたまだあ？ お前らが盗み聞きしてたのは知ってたんだよ！

指示が出るまでに抜け駆けしておっさんに金でも貰う気だったんだろが」

「げっ……し、知ってたのかッ」

ハリオは昨日の深夜のことを思い出す――

第二埠頭 某倉庫

ハリオとマリオはグレンが指示した“とある”仕事を終え、アジトである倉庫に戻った。朝も近い時間帯だったためか倉庫には他のメンバーの姿は見受けられなかった。倉庫内には夜気が充満していて肌寒く、ハリオは身震いした。

「……帰るか」

「帰る、カエル？ ゲロゲーロ……」

二人とも眠そうにつぶやいてハリオとマリオは帰ろうとした。誰もいないのなら夜まで誰も来ない倉庫にいても仕方ない。

「――」

「ん？」

倉庫の奥の方で声がした。その声が浅間の声なのはすぐに分かった。ハリオは静謐な倉庫に微かに響く音に不思議と耳を澄ませてしまふ。

「やっぱりタカタカか――」

タカタカ？ 鷹光学園のことか。確かそんな通称だったな……高校時代は隣町に生活基盤があつたハリオは鷹光学園ことは魔導士が多いくらいしか知らない。そもそもともに高校もいっていないのでその辺に関しては疎い。

「おもしろいやつねえ――へえ」

何の話だ？ おもしろいやつ？ 浅間がいうおもしろいは普通のおもしろいとは意味が違うはずだ。となると――

「狙って――」

……やはり魔導士の話か。狙うてことは仕事の話だな——ここからハリオは自らの浅はかな思考に没し、浅間の話は耳には入ってこなかった。

タカタカの生徒ってことは今から学園通りを見張ってればいい、それでそのおもしろいやつ？ おもしろそうなやつ？ まあなんでもいいが。タカタカの生徒でそんな感じの魔導士がいれば仕事をするまでだ。朝だし、他のやつらにバレることもないだろう、あとは適当に話しを合わせてグレンから報酬を貰えばいい……。

リーダーの指示の元動く？ ブラッドの決まり？ そんなもん知らねえ。どこぞの外人に一瞬で呑み込まれた組織に決まりもなんもないだろ。結果がすべてだ。

「おいマリオ」

「んー？」

「仕事だ。金が貰えるぞ」

「おお。マネー、マネー」

ハリオとマリオは意気揚々と倉庫を去っていく、その後ろの浅間とグレンの視線にも気づかずに。

——全部、まるごと、すべて知られてたッ！ 自らのマヌケっぷりを説明されて恥ずかしさと恐怖でハリオの顔がなんともいえない色になる。浅間の怒りのこもったナイフのような視線が痛い。物理的に顎と壁にこすりつけられてる頭も痛い。

「まあまあ、いいじゃないか。二人のおかげであの子が強いのは分かった。“強い魔導士と戦いたい”と頼んだのはわがままな私だしハリオもマリオもこんなことになるとは思ってなかったんだろっ、なあ？ マリオ」

マリオは震えながらぶんぶん短い首を振って頷く。それを見た浅間はハリオを壁に叩きつけるようにして解放した。

マリオが心配そうにハリオに駆け寄る。

「けっ、俺は勝手に動いたこいつらが気に食わねえだけだ。その場でぶっ殺してもよかったんだが……」

「仲間を」殺しちゃいけないよ。今日はそんな仲間想いの私の提案だね。君たちには泳いでもらった。フフ、いい泳ぎだったよ」

——しかも利用されてたッ！　なにが「ちよっと覗いてみたら」だ！

「ハリオ、別に俺はお前の口でも喉でも舌でも切り裂いて“喋れなくしてから”おまわりに渡してもいいんだぞ」

容易に想像できる光景にハリオが身震いした時、浅間が造り出した壁の向こうから重機の音と掘削音が響きだした。

日本では警察や政治家のなかに魔導士はいない。海外では暴徒鎮圧や特殊任務のためにSWATのような魔導士部隊を置くところもあるが日本では未だ採用されていない。それゆえ、魔導士の放った炎は消火器で、土の壁は重機で対応せざるを得ない。

魔導士は採用試験や選挙に立候補はできるが魔導士というだけで通らないのが現状である。魔導士側に立つ為政者がいないことも魔導士の肩身を狭くしている要因であった。

「上から逃げるぞ。罰はそれからだ。『土の階段』」
アースステア

浅間が発導し、ビルに沿って茶色の土でできた階段が地上から延びる。浅間は罰という言葉にうなだれたハリオとマリオを引きずるようにしてその階段を昇っていく。

「おい、おっさん。何してる？　逃げねえのか？　あの壁ももう維持できねえぞ」

階段を中段まで昇った浅間がついて来ていないグレンに呼びかけた。魔力でできた壁は階段を作り出したことで脆弱になっており、

重機など使わなくてもいずれ崩れる程度の強度しかない。そうして
いる今にも通りからの声が鮮明になってきている。同時に二つの発
導を維持するのは至難の業なのだ。

「私は家に帰るよ。君たちとは方向が違うからね」

いつて、グレンは美泉の名前の由来でもある泉の方角を示す。そ
こは近代的な美泉の街のなかには似合わないほどの自然豊かな別荘
地。グレンはそこに別荘を持っていた。

「……そうか。まあ気をつけるんだな。お前がいなきゃ財布を無く
したも同然だからな」

「ハハハハ、御心配どうも」

ビルの屋上に消えた三人に手を振って、グレンは“独り”で対話
する。

『なかなかいい魔力だったナ』

——それはグレンのなかに響く内なる声。変声機でも使ったかの
ような甲高い声はこの世の者ではない響きをしている。その声はど
こか陽気で。

「魔導士として是非とも戦いたいね」

『それには賛成しねえナア、俺は自分の敵になる可能性があつたか
ら確認のため魔力を追ったんだぜ？ できればもうお目にかかりた
くないネ。今お前に死なれちゃ俺まで消えちまウ』

声の主は嘆息する。顔は見えないが、怪訝そうに腕組でもしてい
る光景が浮かぶ。

「臆病だな君は。もしかして鳥チキンの姿でもしているのかい？」
『な、なにフーッ！』

「ジョークさ。私は“ただ人を殺すのに”飽きてしまったのだよ。私は戦いのなかで“人を殺したい”。命を奪うからにはこちらの命も提示しなければいけないと思うのだよ。違うかね？」

グレンは自らの衝動を抑えつけるかのように拳を握り締めた。

「ハッ、酔狂だネエ。ここは戦場じゃないんだぜ？　まあその願いは叶えてやるサ。だがちょっとマテ、もう少し俺の力になるんだ。そうすれば俺も外に出て、強大な魔力もお前のものになル……そうすれば——」

「楽しみだなあ。私が“戦場”に帰る時、あの子が私の眼前に立っている気がするよ。私と同じ炎の魔導士……楽しみだ」

「おい、聞けヨ」

グレンは響く声を無視して地面を蹴った。グレンは跳弾のように壁と壁を蹴り跳ねていく。人間を超越した身体能力はその声の主によってもたらされたものだった。壁を飛び跳ねる漆黒の影はまさに魔物という言葉がふさわしい。

「俺も楽しみダヨ……」

——沈み込むようなその声はグレンには届かない。

壁が崩れ、路地裏に警官が雪崩れ込む。そこには荒涼とした景色があるだけで人影はなかった。

昼休みを告げる鐘が鳴り、正道は目覚めた。

目覚めて、寝てしまっていたことに気づく。魔力を使うことは疲労が溜まるのだ。

しかし、瞳を開けても視界がやけに暗く頭の両サイドがむにむにと柔らかい。机に突っ伏しているので暗いのは分からなくてもないが、頭の違和感は謎である。

気持ちいい。マシユマロのなかで寝てる気分だなあ……寝たことないけど。これは夢だな——と正道が思い至った時、頭上から聞きたれた声がした。

「やっとお目覚めか」

「ッ！ やあああああああ！」

まさかッ！——『寝たら顔面を挟んでやる』——数時間前の情景がなぜかピンクな効果音とともに浮かぶ。正道はこもった叫び声をあげて顔を上げようとするもがちり挟まれていて自由が効かない。しかも腕を下にしていたせいで引き離すこともままならない。

「ふえんふえい！ ほれわへふはらふえす！（先生！ それはセクハラです！）」

というかただのハラスメントです！ てか、なんちゅう力！

「私は有言実行する女だ。脇坂が朝からずつと寝てると聞いてな。それになにがセクハラだ。滅多にない経験だろうが。素直に喜べ」

「ふはうほころがないふあらっふえ！（使うところがないからって

！……」

「何かあったか？」

「ぶはあッ！ はあ……いえ……はあ……何も」

森の魔手ならぬ魔乳から解放された正道は酸欠気味で赤くなった顔を上げた。ちらちらと星が明滅する視界で見ると森の慄然とした顔も紅潮していた。……違う意味だが。

生徒を何だと思っているんだ！ 呑み込んだ言葉と入れ替わりに胃液がせり上がってきて目が潤む。

「ふん。泣くほど嬉しいか？ ふふふ。脇坂、次は体育だな。遅れるなよ？ 遅れたら……」

「そつ、そんなことは断じて！ むしろ五分前行動で！」

正道が焦って手を振ると、森は再び寄せかけていた胸を戻して満足げに去っていった。

教室に残っている生徒から憐憫の視線が注がれるなか、正道は再び机に突っ伏した。

「悪夢だ、ナイトメアだ。夢は起きて見るもんじゃないだろ……バクよ、あの悪夢を食らいたまえ……できれば存在ごと」

「災難だったね。脇坂君」

突っ伏しながらぶつぶつと森に対する呪詛を吐いていた正道に哀憫の情を帯びた線の細い声がかかる。

「最悪の目覚めだぞ斗夜君よ。君も一度体験したまえ。ってお前は優等生だからそんなチャンスないか」

「あれはチャンスとはいわないよ……」

隣の席でスプリングマートの袋からパンを取り出し齧っている小動物のようなおとなしい男子生徒は苦笑した。

——^{さえじまじや}冴嶋斗夜。品行方正で素行もよく、成績も優秀。運動神経も抜群で、テニス部の一年生エースと聞く。優しそうな顔立ちで、身長も正道と同じ170センチくらいと見た目も正道が思うに悪くはない。ただどうも全体的に線が細く、おどおどしているのが男らしくない。

正道を見る斗夜の両目は黒く、それが自然のものなのか、色眼を隠していることなのか正道は知らない。

鷹光学園のどの生徒が魔導士なのか。それを把握しているのは一部の教職員だけである。これは魔導士に対する差別的な発言などを未然に防ぐためであり、生徒間で誰が魔導士であるのかを知るには自己申告か正道のように色眼を隠さないことくらいである。

「あれ？ どしたの、それ」

正道は斗夜の額に絆創膏が貼つてあるのに気づいて自分の額を指さした。斗夜は栗色の前髪を持ち上げて額を見せる。額の丁度真ん中に絆創膏が一枚。

「マンガみたいな怪我の仕方だな」

「へへへ。ちよつとね……ぶつかつたというか、“飛んできた”というか……」

斗夜は前髪を直しながら判然としない理由をつぶやいてはにかんだ。

「よく分からんぞ。まあ、犬も歩けばなんとやらだし、猿も木からなんとやらだからな。うむ、気をつけるべし！」

「そこ省略しなくても……でも、うん、気をつけるよ。……脇坂君もね」

「俺？ 俺は大丈夫だよ、犬でも猿でもないし」

^{かか} 呵々と笑う正道を斗夜は苦笑を浮かべ見ている。その視線は時折盗み見るように正道の赤く輝く色眼に送られていた。まるで見てはいけないものを見るように。

「……嫌いか？ 魔導士」
「えっ？」

前触れもなく切り替わった話題に斗夜の身体が小さく跳ねる。色眼を見ていたことがバレた恥ずかしさと後ろめたさに斗夜はうつむいてしまう。

魔触心牆——嫌われ者の魔導士。

鷹光学園は魔導士に門戸の広い学園である。だからといって魔導士への偏見が消えるかといえばそれは違う。

同じ空間のなかで時間を共有するにつれて魔導士も普通の人間と変わらないことに気づいてゆく生徒が大半であるが、やはり垣根を取り払えずにどこか一步引いて接していたり、または露骨に嫌がる生徒さえもいる。

正道はそんな環境のなかで魔導士を自ら誇示しているが、持ち前の明るさでその垣根を乗り越えていた。

「いや、そうじゃなくって……嫌いとかそういうんじゃないって……
……脇坂君のその目って、なんていうかその、まっすぐっていうか……
……その、綺麗で……」

斗夜はうつむいたまま頬を紅潮させ、もじもじと消え入りそうな声でつぶやく。そのまま滔々と正道の色眼の素晴らしさについてつぶやいていくが一向に反応がないので顔を上げると、正道は半眼で眉根を寄せ、口はへの字。見るからにひいていた。

「ハッ!？」

「お前そっちの“組合”のお方だったのか……」

「違う違う違う! てか組合って何! そんなの加盟してない!」

「そんなムキになんなよ冗談だって! 否定しすぎると余計怪しい

ぞ、サエジマデラックス」

「変なあだ名つけないで！　うう……」

斗夜は頬をさらに紅潮させて再びうつむいた。正道は「可愛いやつめ」と斗夜の膝をつつき、表情をただす。

「俺は不良でもブラッドでもないからなー、」色眼が邪悪に輝く……とか嫌だし。正義の魔導士を目指す者としては嬉しいよ」

正道、満面の笑み。斗夜は少し恥ずかしくなる。

「正義の……」

斗夜は紅潮したままの顔を上げ、正道を見つめた。斗夜の黒の濃い瞳には正道の宝石のような色眼が映っている。

「そ、ホワイトナイトみたいに」

知る人ぞ知る、美泉のヒーロー、白騎士ホワイトナイト。

名前の通り、白いコスチュームに身を包み悪を倒す魔導士。その正体は不明で、活動も深夜限定、相手にするのは主にブラッド。現場から即座に立ち去ることから目撃されることも滅多にない。ゆえに、“知る人ぞ知る”なのだが、正道の父いわく、「俺が高校のときにはいたな」とのことなので、歴史はあるらしい。ただホワイトナイトはしばらく姿を隠していたようで再びその存在が噂されだしたのはここ一、二年の話である。

目撃したことはないが、正道はそんな正義のために魔導を使うホワイトナイトに憧れている。

斗夜はホワイトナイトの名前が出ると、なぜか急に表情を曇らせた。憧れるように正道を見ていた表情は名残もない。斗夜は引き結んだ口を開けて重々しく声を落とす。

「……あれは――」

斗夜が口を開き、何か言葉を出そうとしたのと同時にその音は鳴り響き、斗夜の小さな声を呑み込んだ。

それはたとえるなら獣の唸り声、いや咆哮。

しかし、この街、この学園にそのような咆哮を上げる動物はいないわけで……。

「悪い、斗夜。腹減った」

それは正道の獣の咆哮のような腹の音だった。

正道には本日昼食はない。ここで人の食事を見ながら悠長に話している場合ではなかった。

「真美のどこいってくるわ！ 次体育だし、下手すりゃまた挟まれる！」

正道は悲壮な顔でいうや否や、教室を飛び出し、真美がいつも昼食を採っている食堂方面へ猛然と走っていった。

走り去る正道の背中を見送って、斗夜は独り正道に掻き消された言葉の続きを紡ぐ。

「……正義なんかじゃないよ」

カレー、ハンバーガー、ラーメン、カツ丼……食堂に入ると様々ないい匂いが正道を襲った。腹の獣が早く獲物をと鳴く。

鷹光学園の食堂は校舎とは別のところに建っている。食券システムの厨房、カウンターが建物の真ん中にあり、その上は天井まで吹き抜けの二階建て構造。その吹き抜けを囲むように長テーブルとイスが一階、二階と設置されている。二階にはテラス席もあり、天気がいい日はそこも賑わう。真美もそこで友人と昼食を採っているはずだ。

「腹減ったあ……」

正道は唸る腹を押さえてよろよろと二階への階段を昇る。一步步近づいてくるいい匂いに一歩踏み出すごとに腹が鳴るという怪奇現象まで起きた。

「朝の“運動”のせいだ。ハリオとマリオめえ」

朝のブラッド二人組を思い浮かべる。上手く退治できたことを再び実感して正道はふふんとにやけた。空腹で悲痛な顔に乗る不気味な笑み、そしてぼそぼそと唸っているようなうわごとがプラスして昼食中の生徒たちが箸を、スプーンを、パンをちぎる手を止める。

そうこうしているうちに怪しい正道はテラスについた。陽光が暖かに差し込むテラスはビル街とは反対側に位置し、柵の向こうに目をやれば別荘地の森林が広がり、遠方には海まで見える。テラスには各テーブルを仕切るように様々な花の花壇が設置され、さながら自然の中に浮かぶ空中庭園といった趣きである。

「食い終わってなきゃいいが」

絶望的なことが頭をよぎりながらも正道はキョロキョロと自らの腹を救ってくれるであろう救世主^{まみ}を捜す。

「いた！ げっ……」

真美はバラの花が咲く花壇の近くの席にいた。しかし、真美と一緒に座っている二人の女子を見て正道は踏まれた蛙のような声を上げた。その二人の女子は正道の姿を目ざとく見つけたようで、正道のもとへ駆けてくる。本日、昼食への道のりはなかなか厳しいようである。

「正道ー！」

「正道」

女子の一人の方は当たり前のようににはしゃいで堂々と。もう一人の方は機械のように静かに淡々と正道の腕に腕を絡めてくる。

一人は赤い巻き髪ロングヘアー、胸の谷間が見えるようにギリギリまで開かれたシャツに何かが見えそうなほど短いスカート。もう一人は黒いショートヘアー、小ぶりの胸をきつちりと制服に包み隠し、もう一人とは対照的。しかし、二人は性格や髪形や体型は違えど顔は見分けがつかないほど同じ。

朱川^{あかがわ} 凜^{りん}と朱川 蘭^{らん} 同じ二重の大きな目、同じ形の鼻、同じ形のぷっくりとした唇。つまり二人は双子。

この双子（特に凜）には入学当初から露骨な好意を寄せられている。しかし最初に声をかけてきたのは凜ではなく蘭だった。

入学式の日、蘭はどこか冷たい怜悯な声で正道に「『凜はあなたのその不良っぽい色眼と少年のやんちゃさを残した顔立ちに一目惚れしました？、よって、私の彼氏とします？』……と、姉様がいつています」と絵文字も含めて伝令した。

驚いた正道がその姉とやらを捜すと、同じ顔をした派手な女子が正道に向かって投げキッスをしていた。

蘭は「あれが姉様です」といい、「ということなので、私もあなたのことが好きということになります」とわけの分からぬことをつけ加え去っていった。

その翌日から二人は正道を見るたびアプローチをかけてくる。凜は情熱的に、蘭は無気力に。

健全な男子として入学式の日いきなり美少女二人に告白されるという奇跡に「バラ色の学園生活の始まりだ!」と喜ぶべき事象だったのかも知れないが、正道は冷静と情熱の間に揺れることなく姉妹の異様さにひいてしまった。悪いやつでは決してないのだが……。

今思えば蘭が告白代理をしたのはもしダメだった場合凜が傷つかないためであり、蘭が「私もあなたのことが好き」といったのは正道が凜と蘭、どちらに転んでもいいように凜が指示したことだったのだろう。これは凜の『私のものは私のもの。蘭のものも私のもの』というどこぞのガキ大将的思想から来るものであると推測できる。姉妹は謎の主従関係で結ばれていた。

「なにになにー、凜を探しに来てくれたのお? 嬉しい!」

双子の姉である凜は赤い巻き髪を揺らして勘違いを叫ぶ。濃い香水の臭いが顔を覆い、腕に凜の早熟した胸が当たる。というか故意に当てている。

「嬉しい」

反対側では蘭が無表情で起伏のない感情を発している。凜と同じく上目遣いではあるが、その目は虚空を見ている気がする。もう慣れているが、蘭の本当の感情がどこにあるのか分からない。

「な、なんでお前らいんの?」

この二人が真美と昼食をとにもするのは珍しかった。真美は正道と同じクラスだが、姉妹は2組であるし、真美は普段は同じクラス

の人畜無害な女子生徒と昼食を採っているはずだった。

「んふふふ。魔導士の勘ってやつう？」

凜は自分の左目を指さす。凜と蘭、二人は魔導士だった。

とはいえ、二人とも目はコンタクトレンズでもはめているのか、黒い。凜が正道に言い寄るときに「同じ魔導士として」とたまにいうので分かった。凜が魔導士なら姉妹である蘭も必然的に魔導士ということになる。

「魔導士にそんな機能はないぞ」

凜は「真美のところにいれば正道が現れる」と予想しただけだろう——正道はそう結論づけた。

凜と蘭が真美と友達なのもそういう打算的な観点からかもしれない。

腹が唸り、正道は真美の方を見る。真美はこちらに背を向ける形で座っていたが、今は振り返り正道に苦笑を見せている。

「真美に用？」

蘭が正道の視線を追って問う。

「そうそう。お前らには用はないの」

「むー……そんなあつ、私を捨てるのね……（ほら、蘭も）」

むすつとした次の瞬間におよよと泣き崩れる凜。指示を受け同じく崩れる蘭。注がれる周りの生徒の視線。

「ちよっ！ やめろよ！ 捨てるも何も俺の所有物じゃねえ！」

「きやつ！ 女の子をもの扱いなんて……」

「ひどい」

「勘弁してくれ」

嘘丸出しの寸劇に正道が嘆いていると呼び出しのチャイムが響いた。そして朗々たる声ヴァルキリーが食堂全体に響く。その声は強く、玲瓏で戦場を指揮する戦女神をイメージさせる。

『生徒指導部の名において、あまばねれいあ天羽黎亜が命ずる！ 1年2組の朱川

凜！ 貴様の不貞行為をただす！ 即刻生徒指導室へ召喚されたい！
以上！』

——生徒指導部。複数人の教職員からなるこの学園の秩序と風紀をただす更生組織。

所属している教職員の数は公表されていないので不明であるが、指導を行うのは決まって二、三人の教職員である。なかでも天羽の登場回数が一番多い。

受け持つ教科が選択教科の情報処理なので暇な時間が多いのだ。授業中もファンタジーなネットゲームに興じているらしく（さきほどの発言もそのネットゲームの影響を受けているものと推測される）、裏では“美しき廃人”や“給料泥棒”と呼ばれることもしばしば。

「げっ、コスプ黎亜！」

凜が飛び上がった顔を歪める。

コスプ黎亜とは天羽のあだ名である。これまたネットゲームの影響か、天羽は教師あるまじき格好をしている。

魔法陣がプリントされたマントや入手経路の見当もつかない胸当てや籠手、指導室に幅の広い両刃の剣が立てかけてあったとの噂もある。それらの“装備”は変動するが、左眼に装備したアイパッチは不動のものとなっている。柄や色は変わるが、外しはしない。おそらくその下には何色かに輝く色眼が隠されている。

当の天羽はつくづくしてついたような“コスプ黎亜”というあだ名を嫌っている。

天羽いわく、「これは私の普段着だ！」とのことである。

「お前何したんだ……不貞行為ってその……」

「セッ——ふぐっ」

「ちが——うッ！」

凜が叫んでいいかけた蘭の口を塞ぐ。

「蘭！ あんたは昨日私が何してたか知ってるでしょ！ 『チルド』に遊びにいっただけじゃない！ 何もやましいことなんかしてないわよ！」

『チルドレン・オブ・ナイト』——通称「チルド」。“夜の子供たち”という名を持つクラブだ。

それは美泉駅から東に延びる美泉坂通りみせんざかに存在している。そこは“美泉市イチの歓楽街”と呼ばれる区画で、飲食店や風俗店、カラオケや映画館といった様々な娯楽施設がひしめき、夜だろうが朝だろうがおかまいなしに光源を放っている。

チルドは美泉坂の数あるクラブのなかでも人気がある。価格が安く、キャパシティーも二千人と大きいので入店規制も緩く、入りやすい。

しかし、違法薬物の売買や、ブラッドのメンバーや他の“危ない人たち”の出入りも噂もあるため注意が必要であった。そもそも未成年は入店できない。

凜は顔を真っ赤にして怒りをばらまくが、学園の生徒がクラブなどという夜の施設に向かうこと自体校則違反である。

「何堂々といってたんだお前。てかよく入れたな」

「ふん。そんなもの私の色気でなんとでもなるわよ。でも……なんでバレたの」

「私が“売った”」

……

……

……

「……は？」

蘭は聞き流してしまいそうなほどさらっと起伏のない声で自供した。

凜の表情が身内の犯行に固まる。そして烈火のごとく怒りだした。地団太を踏むたび胸が揺れ、スカートが危ないところまでめくれる。とてつもなく目のやり場に困る。

「う、売ったって！ あんた！ 何でそんなことするのよっ！」

「……だって、姉様にはあまり危ないことしてもらいたくない。これ、約束したはず。昨日だって私の目を盗んで勝手に出ていったから。……罪には罰を」

蘭の怜悯な目が細められ、重く輝く。正道は蘭の周辺の空気が冷えたように感じた。同時に蘭の特化属性は「水」ではないかと推測を立てる。無表情で氷の刃を放つ蘭の姿が容易に想像できた。

「ひっ！」

凜は蘭に首根っこを掴まれて引きずられていく。蘭の細い身体はどこにそんな膂力があるのか。

「ま、正道ー！」

凜は手を伸ばしうるんだ瞳で訴えかける。しかし足を振り回して暴れているせいで正道は凜の見てはいけなないものを見てしまい反射的に顔をそむけた。

「はうあ！ ま、正道いいいいい！」

「では、さようなら正道」

「お、おう」

蘭は正道に背を向けたまま姉を引きずっていく。こうして奇妙な主従関係の姉妹は去っていき、正道には空腹にプラスして疲弊と虚無感が募った。

頭に残像のように焼きつくのは凜のピンク色のパンツ。足をばたばたさせていたせいでサブリミナル効果のようなものが生まれていたのだ。

「ピンクかよ……」

つぶやいて、正道は歩を進めた。

思わずにやけた口元を押さえながら。

「ああ、煌めく鮮麗な黒髪、生きとし生ける者を癒す優艶な黒瞳。
その均整のとれた唇から紡がれる言の葉は福音となり世界を包み込む。おお、人の姿を借り我の前に降臨せし女神よ……」

「も、もういいよ……は、恥ずかしい。それにそんな体勢でそんなこといっても説得力ない」

真美は机に突っ伏したままごによいっている正道を見ながら嘆息した。冗談とは分かっているけど、真美の顔は赤く染まってしまった。

しかし、正道が真美を女神に例えて述べた口上は真美の容姿を捉えたもので、あながち嘘ではない。

来栖真美。正道と同じ1ー1組のクラスメイトであり、正道とは幼なじみである。正道の父と真美の父が親友だということで幼いころからたびたび顔を会わしてきたが、真美の父の仕事の関係で同じ学校になるのは高校になって初めてだった。

おとなしい性格に整った顔立ち、凜のように主張しないがスタイルもいい。男子生徒の間でも秘かに人気があるらしいが、入学早々親しく話す正道が彼氏と思われるようである。いい寄る生徒はいない。ただ、そのことに関して正道は「ただの幼なじみ」と否定している。実際彼女ではない。

真美は普通の人間である。真美の父は魔導士であるがなぜか真美には魔力がない。こういった前例はないが、真美を出産と同時に亡くなった魔導士の母が関係しているのだと真美の父は考えているらしい。

真美の母は命を賭して『真美を人間にしてくれた』と。

この話を正道は真美から聞いていたのでそのことに關してはなるべく触れないようにしている。それは母の死について真美が負い目に感じているからだ——真美の泣き顔は見たくない。

「うつ……女神よ、私の腹を満たしたまえ」

「やっぱりそれか。そんなことだろうと思ってたけどね」

「へへへ、さすが真美様。バレてたか」

正道は悪戯つぽい笑みを浮かべ顔を上げた。その目にはなぜか恥ずかしそうにしている真美と花壇のバラが映る。

「なに照れてんだ」

「て、照れてなんか……はいっ」

真美は赤らめた顔を振って自分の弁当を差し出した。

昼休みも終わりに近付いているにもかかわらず、その弁当には色とりどりのおかずが半分以上残されていた。

それを見た正道が真美の顔を覗き込む。

突然接近する正道の大きな目、そして色眼、鼻梁の整った鼻、薄い唇……息を呑んだ真美の顔色がどんどん花壇のバラ色に近づいていく。

「お前体調悪いの？ 大丈夫か？」

「ただだ、大丈夫！」

「じゃあ、なんでそんな残してんだ」

「……まさちゃん朝スプリングマートの袋持ってたから……授業中も寝てたし。まさちゃん“見た目の割には”まじめだから寝るとかあんまりないじゃない？ だから、その……心配で」

付け足した正道を氣遣う声は消え入りそうなほど小さく、正道の耳には届かない。

「見た目の割にはってなんだよ……俺は大丈夫だよ、朝ちよつと運動しただけだ。ん？ てことは俺のために残しておいたってこと？」
真美は小さくこくりと頷く。顔は今にも発火しそうなほどに赤い。肌が白い分余計に目立つ。正道はそれを体調からくるものだと思うたがどうやら違っらしかった。

「まじ女神！ じゃあ遠慮なく！」

安心して弁当を受け取った正道は真美の箸を使い弁当を平らげていく。

正道の幸せそうな顔を見ながら思う――

（これって間接キス……だよな）

たまにこういうことがあったので真美は箸を二膳用意していた。しかし、箸を差し出すのも正道と昼食を共にするのを“狙っていた”ようでは出せずにいた。正道も同じ箸を使うことを気にする態度も見さない。

（なんとも思っていないってことかな）

「ん？」

頬を膨らました正道が思案げな真美を見て目で訴えかける。

「うつん、なんでもない。味、大丈夫？」

「ふあいこー」

正道は聴き取れない「最高」を親指とともに突き出す。

正道が真美の弁当を貰うのはただ幼なじみという理由だけではなかった。腹を満たすだけなら凜にでもいえば食券くらいは買ってもらえるはずである。

しかし正道にとっては食堂の味より真美の弁当の方が格段に美味かった。“美味いから求める”。ただそれだけだった。だからできれば毎日食べたいと正道は思っているのだった。

「まさちゃん、今日はご飯買い忘れたの？ あ、食券も買っていないから財布忘れたとか？」

「……」

「？」

「ろ、ロツクな出費を」

正道は箸を咥えながら財布を広げてひっくり返す。そこに重力が働くものはなにも入っていないかった。

「嘘……まだ月始めだよ！？」

「うむ。小遣いも昼飯代も我が音になるため供養された。なむなむ」
「我慢できないのね」

「うむ。しかしやがて輪廻のサイクルに乗り再び我のもとに……はっ！」

正道が合掌したまま口から米を散らす。

「ど、どうしたの」

「今思っただけで、明日からの飯どうすんの俺！」

「……」

今日一日の昼食のことだけを考えていた正道は次の小遣いの支給までほぼ一月あることや、貯金が底についていることなどにも考えていなかった。

「ぶ、武士は食わねど高楊枝……って武士じゃねえし！」

凜に頼むと“なにか”を要求されそうだし、蘭に頼んでも凜が出てくる！ 斗夜に貰うのはなんか悪いし……。正道は“真美の箸を”齧りながら髪の毛を混ぜる。

学園生活が始まってまだ間もないので、いくら正道といえど図々しく「昼飯恵んで！」などといえる間柄の生徒は少ない。陽気な正道でもそこら辺は一応気を使っている。

（ああ、齧ってる齧られてる！ ……）

真美は齧られている自分の箸を見てどこか変態的なことを心で叫

んだ。

「どないしまんねん」

まるで借金取りに追われている関西人の風情で嘆息する正道に真美が救いの手を差し伸べる。

「まさちゃん、お金ないならバイトしない？」

それは少し前から頼まれていたことだったが、真美はなかなかタイミングが取れずにいた。

「んあ？ バイト？ この俺が？」

正道は指を使って強制的に左眼を開く。

魔導士であることを誇示する者がそのまま仕事に就くことは難しい。ましてや高校生のアルバイトは接客業がメインなので色眼を晒す正道を雇うところはほぼない。

鷹光学園は社会を知る一環としてアルバイトは許可されているのでアルバイトすること自体に問題はない。それに軽音楽部がなかったため部活に入っていない正道には時間もある。

——でも、魔導士である自分を雇うところなどどこにある？ 色眼を隠せばどこかあるだろうが。色眼を隠す気などない。そういう仕事なら断るか……てか、真美バイトしてたのか。だから部活にも？ 聞いてなかった。

真美も部活には入っていない。それを正道は真美の運動音痴が原因だと決めかかっていたがどうやら違ったようだ。入るなら文化系の部活もある。

（やっぱり綺麗……）

真美は返事もせず、開かれた正道の燃えるような色眼に魅入っていた。

「おーい？」

「えっ？ あっ、そう、バイト。大丈夫。パパの仕事だから」

「おっちゃんの？」

真美の父は仕事を辞め、真美の高校進学を機に地元である美泉に帰って来ている。

「うん。今手伝ってるの」

その手伝い。なるほど。正道のなかで合点がいった。

「おっちゃんってなにやってんの？」

正道はいいながら綺麗に食べ終わった弁当を真美に返す。

魔導士である真美の父に対して正道は幾許か奇人変人のイメージを持っている。風貌、性格、趣味。そのどれをとっても真美の父は一般、平均から外れているのだった。あの父親から真美の姿は想像するのは難しい。

正道は真美の父としばらく会っていない。父とは会っているようだったが、その父からも真美の父がなにをしているか聞かされていなかった。

「うーん？ 便利屋？ っていつでもまだこれからなんだけどね」

「怪しい」

「えっ」

「怪しすぎる」

正道は眉間にしわを刻みつけ真美に顔を近づける。

「あう……」

「あのおっちゃんが主の仕事なんて怪しいに決まってる。しかも便利屋？ 危ない匂いしかしねえよ。第一、なんで手伝ってるお前がハッキリ分かってねえんだよ」

「う……それは……まだ、従業員が誰も……」

「マジか」

真美は小さい顎を引くように頷く。

「お前とおっちゃんだけって、それただの来栖家じゃねえか！ 家族経営というかただの家族！ 募集しろよ募集。“美泉ワーク”と

かで。てかしてんのか？」

「いや、うちのパパ、シャイだから、知ってる人間がいつて……」
「四十過ぎた大人のセリフか、それ」

正道が嘆息していると、真美が手を合わせ頭を下げた。上目遣いの大きな瞳が潤み、ドキリとする。魔導士として生まれるはずだった真美の魔力はこの瞳に吸い込まれてしまったのだと正道は思う。

「まさちゃんお願いっ！」

「う、うーん」

「パパの力になりたいの……。明日からまさちゃんの分もお弁当作ってくるから！」

「よし乗った」

即決。話を端聞きしていた顔も知らない生徒が吹き出すほどの速度で正道は即決した。突如提示された真美の弁当と潤んだ瞳に正道の思考は切り替わったのだった。

男手ひとつで育ててくれた父の力になりたいという理由も聞き流せない。

「いいの？」

「もち。給料貰えておまけに昼食の確保もできるとなれば断ることもないだろ。バイトは条件が大事だ（やったことないけど）。幸い、部活も入ってないし時間もある。ギター触る時間は減るが、新たな仲間を手に入れるためには致し方ない。ぐふふ」

正道はふんぞり返ってにやつく——（そうだ、いいことばかりじゃないか。なにをやらされるか分かんが、気兼ねなく喋れるおっちゃん相手ならまだいい。真美の昼飯もゲットだし、新しいギターも買えるじゃんか！ “特訓”は高校までだったから時間できた

し。おお、楽しみになってきたぞ……ぐふふ)

「じゃあ契約」

「は？ えっ？」

顔を戻すとテーブルの上には一枚の紙が広げられていた。そのピ
ンクの紙には――

『僕と契約して従業員になってよ！』の文字と典型的な魔法の杖を
持ったいわゆる魔法少女が一人。裏返しても記載されているのはそ
れだけだった。

「……あのロリオタめ」

それは真美の父の趣味が反映されたものだった。正道はその“契
約書”を見つめ、真美に聞こえないようにつぶやく。そして歳がい
もない趣味全開のふざけた契約書突き出して真美の顔を見る。

「これが正式書類かよ。これで契約ってヤバ過ぎだろ……第一、お
前なあ……うっ」

潤んだ力強い黒瞳が正道を貫く。

「や、やめろよその目。だれも契約しないっていつてねえだろ」

「やった」

「くう……やつぱり不安だ」

正道は真美からボールペンを受け取って名前を書いていく。書き
終わったところで昼休みの終わりを告げる鐘が鳴り、それを合図に
周りが騒がしくなった。

正道と真美も自然と立ち上がり、教室へと歩いていく。

「ありがとね」

「まあ、不安だらけだが」

「まさちゃんなら大丈夫だよ。あ、今日帰りにいこう？ 事務所。
美泉坂の方にあるから」

「あいあい、りょーかい。あ、俺体操服更衣室にあるから」

正道は体育館の方を指さす。正道は忘れないように体操服は更衣室に置いているのだった。忘れれば体育教師の森から何をされるかわからない。

「じゃ！」

「うん」

二人は分かれて歩いていく。

その様子を柱の陰から覗く人影に気づかずに――

「……脇坂、正道」

——美泉坂通り某ビル前。

「ここ？」

「うん」

真美の弁当で体育を無事に乗り切った正道は、真美に連れられ普段あまり来ることのない美泉坂通りへとやって来ていた。

ここは美泉坂通りのなかでも飲み屋が密集している地域。真美の父が経営する“便利屋”とやらもこのスナックや怪しげな事務所が入居しているこのビルにあるらしい。

美泉坂通りは学園から少し距離があるので時刻はすでに十七時をまわっている。そのため周辺のビルには猥雑な光が灯り始め、酔客を造り、誘う準備を始めている。それは目の前のビルもしかり。

通りを往来する人々は夕方ということもあって少ないが、この地域の向こう側には映画館やボーリング場やクラブなどがある地域なのでそちらに向かう若者の姿も見受けられる。車道を必要以上に重低音を響かせた車が走り去り、正道が顔をしかめる。

「あぶなくねーのかこんなところ。帰るの夜だろ」

「大丈夫。パパと一緒に帰ってるから。いざとなったらパパが守ってくれるよ」

「ああ……そうだった、おっちゃんなら喜んで発導するだろな。“趣味”と実益を兼ねて」

「心配、してくれてありがとね」

訝しげな眼をしている正道に真美がもじもじと小声でいう。

「ん？ そりゃ心配くらいするぞ。幼なじみなんだし」

「幼なじみ……か、そうだよな。うん。いこう」

「？ おう」

真美は黒髪とチェックのスカートを揺らして階段を昇っていく。御丁寧にも真美は自分の尻に学園の指定鞆を当てていた。その鞆の向こうを想像しながら正道は真美の小さな表情の変化に気づくことなく真美の後ろをについていった。その途中、正道は足を止め後ろを振り返る。――視線を感じた。

夕日に染まり始めた美泉坂通り、陰影のついた街路樹、往来する車に人間。そこには特にこちらを注視する人影はなかった。

「……気のせいかな」

正道は真美を追う。

正道が入ったビルの反対側。電柱の影で闇が蠢く。

「……脇坂、正道」

その声は怨嗟の響きを持って。

真美の足音は高らかに、脇目もふらず階段を上がっていく。スナックがひしめく階を越え、事務所らしき扉もいくつか見た。それでも真美の足は止まらない。

「真美、どこまで昇んだよーって、マジかよ」

「マジマジ」

真美は振り向きもせず、屋上へと繋がる扉を開け外へ飛び出していく。

そこは鈍色の柵で囲まれた四角い空間。物干し竿。貯水タンク。並んだ室外機。周辺に見えるビル群は窓々に光を湛え屹立している。その屋上世界のなかに夕日に照らされた異物が一棟。

「じ、事務所ってあれかよ」

白く塗られた壁面でマイク片手に躍動する緑色の髪の少女。その隣にはデフォルメされたドラゴンに跨る魔法少女。その隣には必要以上に露出した装備の銀髪女戦士……その他もろもろ。

それは壁面をキャンパスにした“痛プレハブ”ともいべきものであった。

「うん」

「なんだよあれ！ あんなもんに入る勇氣ねえよ！ てか混じりつけない違法建築じゃねえか！」

正道はプレハブを指さして真美に抗議する。

正道の父は建築士である。しかしそんな家庭環境でなくとも目の前の建物は誰が見ても異常でたとえ違法ではなくても違法の臭いがぶんぶん漂う代物だった。

真美は瞳を潤ましながら、おずおずと衝撃的なことを口にする。

「あれ建てたのおじさんだよ？」

「は？」

おじさん？ 真美の伯父さんのことだろうか。それとも叔父さん？ そんな親戚の話聞いたことないし……真美がおじさんと呼ぶ人間……超知ってる。てか肉親。

「親父かよっ！」

叫んだ。柵で傍観していたカラスが飛び立つ。

「うん」

「ああ、ついに違法建築に手を出してしまったのか」

頭を押さえこみその場にしゃがみこむ正道に真美が優しく声をかける。

「大丈夫だよ。許可取ってるっていった」

「マジ？」

「うん。コネがあるから大丈夫だって」

「だまされてないか」

「多分……今は気にせずに」

真美は極彩色で萌え萌えなプレハブの前に立つと学園の鞆から携帯電話を取り出し耳に当てた。やがて通話が始まる。

「もしもしパパ？」

（パパって……なかにいるんじゃないのか？）

電話の相手は真美の父らしかった。てっきり事務所のなかにいると思っていたが違うらしい。携帯の向こうから下卑た甲高い笑い声が漏れている。ああ、“パパ”だ。

「うん。了解」

真美が携帯をたたむ。会話は一分もしないうちに終了した。

「もう終り？　今のおっちゃんでしょ？」

「え？　うつん、ち、違う」

真美があたふたと手を振る。ごまかそうところと表情を変える真美は分かりやすい。嘘が顔と言動に出る。怪しい。嫌な予感がある。

「なんか企んでんだろ」

「たた、企んでなんかないでござるよ」

「語尾がバグってるぞ」

さっきの電話は真美の父が『事務所についたら電話しろ』とでも真美にいつてあったんだろう。おそらく真美の父はなかにいて、正道が入ってくるのを狙っている。それに関する注意事項をさっきの電話で伝えたのだろう。と、正道は推理する。

「悪癖だ」

真美の父の趣味の一つに『イタズラ』がある。今回もその一つのはず。しかも久しぶりの再会で盛大に“魔力”を注いでくる可能性が大。

極彩色のプレハブはもはや巨大なビックリ箱と化した。正道はな

に飛び出すか分からない扉の前に立つ。真美はすでに正道から離れている……分かりやすい。

その扉には今にも関とぎの声をあげ、飛び出してきそうな褐色アマソの女戦士ネスが無骨な槍を構えこちらを睨んでいる。

正道は顔をこわばらせながらドアノブを回す。幸いドアノブには細工はなかった（過去に電流や高温だったことアリ）。そのことにとりあえずホッとして正道は勢い良くドアを開ける。その景色に正道は既視感を覚えた――

さっきまで見ていた褐色の女戦士が同じポーズで立っていた。

「いつ!?!」

「——!」

女戦士は声にならない声を上げ正道に槍を突き出す。刃は正道の首元をかすめヘッドホンを吹き飛ばす。

「あぶねえッ!」

槍をかわし、後ろへ飛び退く。女戦士は槍を構えたまま歩を進める。女戦士は茶色の水着に腰みののような格好だけと露出の多い格好をしている。が、“揺れるべきところ”が揺れていない。瞳にも生気がなく、全体的に褐色というより土くれ色である。

——これは真美の父が造った人形。プレハブの窓から感じる視線は製作者のものだろう。しかし精巧にできている。これほど「地」の属性を操れる魔導士も少ない。

「楽しみやがって、あのオタクめ……やるな」

「——!」

「くおっ!」

女戦士の槍による足払い。意識を窓の視線に向けていたため反応が遅れ、正道は仰向けで倒れた。鞆代わりのギターケースが投げ出され真美の悲鳴が上がる。

「まさちゃん! あぶないッ!」

「ッ! 土壁!」
つちかべ

槍が降り下ろされるのとその叫びはほぼ同時。鈍い衝突音が響く。仰向けになった身体の上を土の膜のようなものが展開し、正道を槍の刃から守っていた。

正道の特化属性は「火」。しかしそれは得意、強力な属性がそれというだけであって他の三属性「風」「地」「水」も使えないわけ

ではない。それらは「基本属性」と呼ばれ、魔導士は特化属性と基本属性を使い分けることができる。

「あぶねえのはお前の親父だぞ。だせえ発導しちゃったじゃねえか……土壁って」

正道は壁が崩れる前に隙間から抜け出て立ちあがった。得意ではない属性は効果を保てる時間が短い。

窓からの視線が嬉々としているのが伝わる。というか興奮したのかブラインド（これも萌えなデザインつき）の隙間から眼鏡が飛び出している。その眼鏡の奥には魔導士の証、黄金色の光が一つ。

「パパ！ もうやめよう！ あぶないよ！ こんな聞いてないよ……」

真美が泣きだしそんな顔で叫ぶ。父のイタズラについて真美は聞かされてなかったらしい。いや、おそらく別のイタズラと聞いているのだらう。そうでなければ真美は父を止める。

娘の懇願にブラインドの眼鏡が揺れる。真美の父は真美を溺愛で真美にはめっぽう弱い。あと一言いえばプレハブを飛び出してくるだらう。そして今立ちつくしている女戦士を崩して真美に抱きつくのだ。

そんな情景が正道には見えだが、正道は真美の言葉を遮るように告げる。

「大丈夫だよ真美。おっちゃんは俺を殺す気とかないから。久しぶりに俺と会って遊びたいんだ」

「ほんとに……？」

ブラインドの眼鏡が縦に揺れる。

「ほらな。だから大丈夫」

心配げな真美にギターケースとヘッドホンを預け、真美の頭をぽ

んと叩く。

「う、うん」

恥ずかしそうな真美に二カつと笑って踵を返す。ブラインドにびつと指をさして、

「実をいうと……俺も遊びたくなってきたんだよなあ。成長ぶりを見せてやるよ、おっちゃん！ こいつ！」

眼鏡の奥の目が愉悅に歪み、女戦士が躍動する。突き出された槍が空気を切り裂き正道の制服の肩をかすめる。

ヴァイントステップ
『俊足の風！』

槍を回避したタイミングで発導。正道の両足を風が纏い高速移動を可能にする。正道は風の力を借りた跳躍で後方に跳び、女戦士と距離をとる。魔導が使えるからといって武器への対応にはそれ相應の鍛錬が必要である。正道は魔導が使えるだけでただの高校生なのだ。

「ヴァイント」とはドイツ語で風のことである。属性鍵語がドイツ語になったのはマリオの影響なのは明らかで、正道は体育後の休憩時間や帰りのホームルームの時間に検索して基本的なことは叩きこんだ。興味があることの覚えは速い。

「——！」

女戦士が口を咆哮するように開け、突進してくる。

「おっちゃん、人形なら壊していいよなあ」

ブラインドの向こうからは返事はない。ただ、あきらめたのか、ブラインドの向こうから諦念の雰囲気が漂う。人として“殺さず”の精神を持っている正道であるが人形は例外である。

「じゃあ遠慮なく。爆音でよろしく」

正道が腰を落とし、両手に魔力を流す。思考を支配するはたぎる炎。——発火。両手が炎に包まれ熱気に正道の髪が逆立つ。

「イメージばっちりっ、フランクグレイス『炎巨神の祈り！』」

両手を突き出した正道の手から巨大な炎の手が飛び出す。その手に挟まれた女戦士が足を止めたのは、操っている真美の父が驚いたからだろ。その手は正道の動きと同調して祈りをささげるかの如くその両の手を閉じた。

腹に響くような低音と熱風が巻き起こり屋上が揺れる。炎の手はまるで女戦士を天に運ぶかのように空に消えた。入れ替わりに冷たい風が二人の髪を揺らし、屋上の熱気をさらっていく。

「なむだぶ」

後に残ったのは経を妙に略して合掌する正道と、髪を乱し啞然としている真美の姿だけ。

「……まさちゃん、すごい」

真美が正道の発導を見るのはこれで二回目だった。初めて見たのは十年前、正道初めての発導——真美にとってそれは初恋の記憶。

「パパっ！」

「ご、ごめんよ真美たん……」

そこは事務所というより趣味の部屋もしくはアニメグッズ専門店といった様相を呈していた。壁面のデザインを生かしてそのまま開店できそうである。

事務机が三つと応接スペース的なソファーが二脚とその間にテーブル。その基本的事務所空間を囲むのは多種多様、大少長短揃ったフィギュアにポスター、コミック、小説……。それらが整然とディスプレイされている。真美の父は几帳面な性格なのである。

三つの事務机のうちの一つ。他の二つとは離れた位置にあり、モニター二つのパソコンと『室長 来栖 真』とプレートが置かれた壁際の席に真美の父——真が座っていた。今は真美に怒られている。真美が真剣に怒っているので正道はどうすることもできず、応接スペースのピンク色のソファーに座った。

「ましゃ」とは久しぶりだからさあ……」

「あんなにあぶないとは聞いてないっ！ 私は『ドアを開けたら巨大な手が飛んでくる』としか聞いてない！」

それでも十分にあぶないと思いつつも正道は真の方へ向き直る。

不意に座っているはずの真がそのまま“スライド”した。真の全身がちよこんと机の横に現れる。

えっ！ あそこまで小さかったっけ？？ ああ、俺がでかくなつたのか——真は座っていたのではなく立っていたのであった。正道は自らの成長を感じながら真を見る。

七対三の比率でびつちりと分けられたポマードヘア。頬の肉に乗っているようなメガネは今のデザインのデザインではなく無駄に大きい。でっぷりとした風船のような腹を白いカッターシャツで覆い、短い足には黒のスラックス、そこからサスペンダーが延びる。一番上にはなぜか白衣をはおっている。

丸い顔に乗っているのは目尻の下がった細い目、団子鼻、分厚い唇。それにくつつくまるで二頭身のような体躯。どこを見ても真美の父とはにわかに信じにくい。

「ましゃ！ 僕を助けて！」

真がぼてぼてと腹を揺らして駆けてくる。そして正道の後ろに回り込んでふーふーいつている。額には汗まで浮かべている。

「この距離で汗かくな！ それにその呼び方やめろ、その見た目と歳で“僕”もヤバイ」

「あひー！ ましゃまで怒るの？」

「そら怒るだろ。てか、まず俺に謝れ。いきなりあれはねえよおっちゃん」

「いやあ、ついつい。つよちゃんからも色々聞いてたからねえ」

つよちゃんとは真の親友でもある正道の父、剛のことである。

「親父がなんて？」

「んー、あいつは魔導の使い方が巧いつてさ」

正道は少し驚いて、どこか嬉しそうに頬笑む。父がほめることなど滅多になかった。

「へえ……いつもはそんなこといわないのに」

「いうとあいつは調子に乗るってさ」

「！ あのクソ親父」

いつて正道は表情を変え、近くにあった真の首を抱える。

「うげげげ、絞まつてる絞まつてる！ 助けて！ 真美たん！

マミタス！ マミリーヌ！」

「知りません。それにパパ、遊んでる場合なの？　せっかくまさちやん連れてきたのに。お仕事しないんだったらまさちゃんの契約書破るからね！」

手を伸ばす父を切り捨て、真美は学園の指定鞆からあの怪しい契約書を出して破かんばかりに構える。それを見た真は慌てて左手を正道の顔の前で広げた。そして叫ぶ。

『クレイドール　土人形・壱式　土妖精ちゃん！』

真の左手が黄金色に発光、光のなかから茶色い妖精が生み出される。

「発導！？」

驚き、退いた正道の顔の前を手のひらサイズの妖精が舞う。

布一枚だけまいたような衣装の妖精は背に生えた四枚の羽を巧みに操り正道を翻弄する。手に携えられたつまようじ大のステッキが怪しい。

しばらくその妖精が右へ左へと舞うのに合わせて正道も身体を動かしたが……ただそれだけだった。

「おいで、土妖精ちゃん」

「あつ」

いつの間にか真は自分の席に座り、落ち着いている。その横で立つ真美は真の秘書のように契約書を机に置いた。どうやら土妖精はただの時間稼ぎだったようである。

「なんだよ、いきなり発導するからビビった……」

「まだまだだなあ、ましゃも。さて、本題に入ろうか」

真は土妖精を手のなかに手品のように消して、手のひらを組み合わせせた。今までの騒がしい空気は一変して張り詰めたものへと変わる。真の顔も真剣で、働く男の顔つきになっている。眼鏡の奥から鋭い眼光が正道に送られているが真は口を開かない。

それほど真剣な仕事なのか。ふざけた雰囲気なのはその仕事の緊張を和らげるため？ おっちゃんならそんなことをするのもかも——正道は張り詰めた空気のなか勘ぐる。

物音一つしない静謐な空気に息を呑むのもためらわれる。その空気を揺らしたのはけたたましいピピピという電子音だった。

「……ジャスト三分だ。いいラーメンはできたのかよ？」

真はなぜか決めゼリフのように言い放った。正道は状況が呑み込めないで目をぱちくりさせている。

「ら？ ラーメン？」

頷く真。正道の死角になっていたパソコンモニタの陰からカップラーメンと小さな四角い時計を持ったチャイナ服のキラクターフイギョアがでてきた。その背中には大きな鉄鍋が背負われている。机に手をついて立っていただけの正道は思わずっこけた。

「それ待つてただけかよッ！！」

「そうそう。腹が減ってたのでね、君たちが入る前にタイマーかけておいたんだ。あ、それと、驚くべき真実を一つ……」

真は割り箸を振りかざして真剣な表情に戻る。そして真実を告げる——

「三分といったが……これは、五分待つタイプだ！」

「プレハブごと吹き飛ばすぞ……ぐ」

正道の腹が鳴った。

「魔力を行使するとお腹が減るのは僕だけかな？」

「まさちゃんの分もあるよ？」

真美がカップラーメンを掲げて見せる。正道はバツが悪そうに、

「食う」

と、返事をした。腹の音を聞かれたからにはしょうがなかった。

「食いながら気軽に話そう」

二個目のカップラーメンにお湯を注ぎながら真は笑った。前歯にネギが付いている。そのことにも、二個目を食べることにあえて突っ込まず正道は自分のラーメンをすすった。

真美は真の隣に座ってお茶を飲んでいる。改めて二人の顔を見比べると血縁が謎になる。真美の母はよほどの美人だったのだろう。そうとしか考えられないが、なぜそんな美人がこんな……。

「なに？　なんかついてる？」

視線に気づいた真が正道と真美の顔を交互に見る。

「パパ、前歯にネギついてる」

「たはー！　ほんとだ、いつてよ！　ましゃたん」

前歯を触ってネギを取った真は指についたネギを正道に投げた。

瑞々しい緑色の欠片が正道の顔の横をすり抜ける。

「なぜ投げる！　注意しなかった当てつけかっ！」

真はやれやれと嘆息して悲しげに、

「人は傷つけ合う生き物なんだよ、正道君」

「じゃあ、傷つけてやるうか」

「断る」

真顔でぴしゃりと断った真はその表情のまま続ける。

「しかしそれは真実。傷つけられたら傷つけ返す。それが人間だ。戦争という大きなものから隣の人の肩がぶつかったとかいう瑣末なことまで、耳を傾けるとこの世界は怨嗟の声で満ち溢れてる。そん

な世界でなにもしくともこの世界にただで怨嗟の声をあげられる存在がいる……そう、僕たち魔導士という存在だ」

真は今度こそ真剣に話し出したらしい。真美と正道の手も止まり真剣に耳を傾けている。

「魔導士というだけで悪者扱い。魔導士がいるから秩序が乱れるとかさ。実際は魔導士の犯罪は普通の人間より少ない。まあ法律も厳しいけどね。魔導士が絡んだ事件は派手だから印象深いだけなんだと思うんだ。僕はそんな魔導士の価値を高めたいと思ってる」

「価値？」

「そう。美泉はブラッドやそれを模倣した集団のせいで魔導事件の件数が他の都市よりずば抜けて多い。おかげで魔導士に対する風当たりも強い。僕を見てブラッドだ！ って叫ばれたこともある。ありえないだろう？ しかし、だからといって別に僕はブラッドを壊滅させようとかそういうことは考えていない。危険だからね」

真は話疲れたのか、ふーっと息を吐いて真美に「真美たんお茶」と手を伸ばした。口をお茶で湿らせてさらに続ける。

「そこで、この僕を室長とする“魔導便利屋”だ」

真は自らの名前のプレートを持って胸を張った。

「魔導便利屋……」

「いえす。この美泉の住人から依頼を受け、様々な仕事を魔導を使って完了する！ その結果！ 美泉の人々は魔導士への偏見をなくし、魔導というものが人のためにあるということが分かっていただけるのだ！ そしてその噂は伝播し、やがて人間と魔導士が本当の意味で共存できる世界が出来上がることだろう！ 我らが目指すべきは世界の安寧！ 魔導士に定められた宿命の相手、『魔物』、つまり世界の危機が訪れた時、魔導士と人間が手を取り合い脅威に立ち向かえる世界を創造することが我々の最終目標である！」

急に熱が入った真は机をたたいて立ち上がり、拳を握って熱弁をふるった。鼻息が荒く、広めの額に汗が浮かぶ。ただ、明後日の方を向いている目は真剣そのものである。黄金色の色眼も蘭蘭と輝いている。

「テーマでかすぎだろ」

「まあ冒頭以外は願望だよ。しかし夢はでっかく！ 魔導士の未来は明るい！ ぶひやはははは」

真は不気味に笑うとスイッチが切れたようにイスに沈みこんだ。ふーふーいいながら汗を拭く真の姿を見て“室長”は戦力にはならないと判断した。体力がなさすぎる。

「それで俺か」

真は従業員として魔導士を探していたようである。

「そうそう。知り合いで若い自由の効く魔導士っていうとまじゃくらしいか居なかったからねえ。ほら、僕シャイじゃない？」

「俺が断つてたらどうしたんだ……」

——まあ、美泉ワークに募集出したところで、まともな魔導士は来ないと思うが……。

「その時は自称天才魔導士、『マスターオブパペット』の二つ名を持つ僕が！」

「その人形大好きシャイ親父が生身の見知らぬ人間とお仕事の話ができるのか」

「はうあつ！ ……」クレイドル「土人形・壱、伍式 まことちゃん」

ショックを受けた様子であったが、まだふざけるらしい。ぼそつと発導した真の左手には真をデフォルメして縮小したような腹話術人形が口をパクパクさせていた。

発導の際壱式や、壱、伍式といっているのはどうやら人形の大きさのことのである。今顕現している人形は土妖精より二回りほど大きい。入口で正道を襲ったのは“伍式”といったところだろうか。

「オシゴトハボクガウケルヨ！ アハハハ」

空を食んでいた人形の口から甲高い声が出る。真の口は全く動いておらず、腹話術としては完成されていた。

「巧いな……」

「でしょ？ 若い頃は魔導芸をやってたこともあるんだ。それで二つ名がついたんだけどね。これなら恥ずかしくない！」

「でも、だれがそんな怪しいやつに仕事頼むんだ。“腹話術探偵”みたいな目指してんのか。依頼に来てそんなんができたら余計に偏見が深まる」

「……」

「……」

真とまことちゃんはうなだれて完全に沈黙した。

「なにいつてるのパパ。私がいるじゃない。というか事務とか依頼主の対応は私って聞いているんですけど？ パパ自分でいつてたじゃない、「僕は物静かな室長で、いざという時にだけ活躍するこの便利屋の救世主的ポジションでいたい」って」

沈黙を破った真美の言葉に真とまことは顔を上げる。動きが同調していて少し気持ち悪い。

「そうだった！」

「ソウダッタ！」

「動く気ねえじゃねえか」

「ぶふふふ、僕は情報収集とかが専門だよ。どんな依頼がくるか分からないからねえ」

「ハッキング！ ハッキング！」

「こらこら、まことちゃん！」

真は自分で危ないことをいって自分で突っ込んでいる。人は見た

目で判断してはいけませんが、真の風貌ではハッキングくらい簡単にしそつである。しかし、

「おっちゃん、ハッキングとか……そんなやばそうなのも受けるのか？」

魔導便利屋という怪しい職業。魔導士を利用して悪さをしようとする依頼もあるかもしれない。もしそういう悪事に加担するような依頼も受けるのなら、「正義」を掲げる正道としては断固として断らねばならない。

「ご安心！ 価値と一緒に悪名まで高める気はないよ。うちの依頼を受理する判断基準は人のためになるかそつでないか。そして、悪か正義か」

「セイギノミカタ！」

真ちゃんが至近距離でパクパクと叫ぶ。

「正義の……」

「そ！ ここはさながらヒーローの秘密基地つてとこかな？ ましやがレッド。真美たんがピンクで僕が司令塔。ブルーとかイエローも時期に増えてくれたらいいなあ……魔導戦隊だなあ……かつこいいなあ……魔導戦隊ウィザードとかどう？」

自分で言つた例えが気に入つたようつで、真は目を輝かせて同意を求めてくる。

「どつつて……」

「はいはい、パパ。まさちゃんを困らせないの」

応えに窮していると真美が割つて入つた。再び娘に叱られている真の姿を見ながら正道は真が問うたことを考える。

——正直、かつこいいと思つた。魔導戦隊というのは無理だろうが、そういう存在がいれば本当に魔導士の印象は変わるのかもしれない。美泉にはホワイトナイトがいるが如何せん知名度が低すぎる。しかしそつという存在がいればホワイトナイトも一緒に活動できるん

じゃないか。美泉を守る正義の魔導士たち……。

「で、どうなの？」

「え？ 魔導戦た」

「じゃなくて、働いてくれる気になった？ どうせずっと怪しいとか思ってたんでしょ」

いいながらもまことちゃんの口に契約書を挟んで提示する。ピンクの紙に描かれた魔法少女が真を模した人形に食べられる構図になっていささか不気味である。

「確かにそれは怪しい……でも、もう契約しちゃったし（真美の弁当つきで）。それに、人のために魔導を使えるんだったら悪くねえ。最初はなにやらされるか不安だったけど、てか今も不安だけど、魔導の正しさを広められるなら働くよ」

正道は、どうも自分は「正義」という言葉に弱いところがあるなと思いながらもここで働くという最終判断を下した。

それにここなら自分の信念も曲げることなく働けそうである。少しでも魔導で人のためになるなら。自分の正義が広められるなら。たとえそれが自己満足だとしても。

「おっほっほー！ ありがとう！ やったね真美たん！」

「うん！」

真と真美の親子は手を取り合って喜んでいる。真は純粋に仕事が始められることに喜び、真美は正道と過ごす時間が増えたことに喜んでいた。

（まさちゃんとお昼もバイトも一緒……ふふ。ふふふふふ）

真美は心のなかで笑う。それは音に出せば真の笑い方と似るところがある。しかもその笑いは心を飛び越え顔に出てしまっていた。なぜか急に緩み出した真美の表情を見て正道はやっぱりこの二人

は親子だなど確信した。

「しかし、さすがつよちゃんの息子。正義の遺伝子引き継いでるねえ」

いいながら、真は左手のまことちゃんを消し去って正道に握手を求める。左利きというところも真の異質な部分を引き立たせる。

汗で光沢を放つ真の額を見下ろしながら正道は湿った綿のような手を握った。真は満足そうに手を上下させる。

「親父が正義ねえ」

確かに正道の信念は父、剛がいなければ形成されてはいない。だが今となつては正道にとって父はただのスパルタ親父だけである。しかも高校進学を機に諸々解放されそのスパルタ精神もあまり見ることもなくなつた。今はどちらかというと……。

「どっちかというとおふくろじゃね？」

「ああ、ありや強い」

正道と真は手を握ったまま同時にうなずいた。

「で、仕事は？」

「は？」

真は正道を見上げたまま表情を消した。その顔は腹話術人形のまことちゃんと類似して見える。

「なぜとぼける。は？　じゃねえよ。仕事だよ仕事。仕事しねえと給料もらえねえだろ」

「なにいつてるの、仕事はこれから。依頼なんてゼロだし。そもそも宣伝もまだだからね！」

「……てことは、どうということだ」

正道はいやな予感に真の手を握る力を強めていく。真の指先が真

っ赤に染まる。

「依頼が来なけりや給料はなしってことか！」

「物分かりがいいね！ てか痛いんだけど！」

さらに強める。真が暴れ出したのもう片方の手も掴んで交差させて上に引く。真の肩が狭まりもともなかった首がさらになくなつた。

「いでででで！ そして苦しい！ 離して！ 離して！ 真美たー
ーん！」

真美は目と鼻の先にいるのに真はありつたけの力で叫んだ。よっぽど苦しいらしい。

しかし真美は手を差し伸べることはせずに悲壮な顔をする真の隣に並んだ。この制裁は妥当だと思っているのかもしれない。

「ごめんね、まさちゃん。騙してたわけじゃないんだけど……お給料はこれからの依頼によるの。これから頑張ればお給料出るから……一緒に頑張ろう？ ね？」

「うつ……お、おう」

真美のチワワのごとき潤んだ瞳に見つめられ正道はゆっくりと真の手を離れた。どうもあの目で訴えられると胸がざわつく。

しばらくの空白、正道は真美と見つめあった。それは特に理由もない視線の合致だったのだが、不思議と目が離せなかった。

「うちの娘に手を出すと、たとえつよちゃんの息子といえど容赦せんぞ」

不意に真の顔が視界に割って入り、そういった。真は目を見開き、射抜くように正道の目を見ている。気圧されるような迫力に正道は視線を泳がした。

「そ、そんなんじゃないよ」

「ふん。ならいいんだけどおおおおおおお！？」

いつもの調子に戻って両肩を回しながら机に戻った真が会話の流れのまま叫んだ。

「な、なんだ！」

「パパ！」

「タイマーかけるの忘れてたああああッ！ 麵^{めん}麻^まちゃああんっ！」
わなわなと震えるその手には再び鉄鍋を背負ったチャイナ服姿のキャラクターフィギュア。名前もあるらしい。

そのフィギュアに持たれている時計は00:00のまま点滅を繰り返している。よく見るとそのキャラクターの足元に『鉄鍋魔導士メンマ！』と書かれたプレートがあった。どうやらそういうアニメの関連商品のようだ。

魔導士を主人公にしたアニメやマンガは意外と人気があるらしい。正義の味方として描かれることも多いが、敵役としての登場も多く、子供たちに夢を与える存在にはいささか遠い。そもそも基本は深夜アニメか大人向けのコミック雑誌だ。子供の手には届きにくい。

「パパ……」

「はあ……もう勝手にやってる」

正道はギターケースを担いで帰り仕度をはじめた。もう時刻は十九時を回っている。仕事もないのにこんなところにいても仕方がない。ラーメン至上主義の変態の相手も疲れる。

「ふあら？ 帰ふの？」

真は延びた麵を咀嚼（結局すぐに食べ始めた）しながら湯気で曇る眼鏡のレンズを拭いた。

「帰るよ。仕事ねえんだろ？」

「まあね。今日はないね」

「じゃあ明日はあんのかよ？」

「明日はビラを貼りにいってもらおうかなと。ビラは今鋭意製作中」
いって真はスープを啜る。

「また原始的な……」

「千里の道も一歩から。ローマは一日にしてならずですよ正道君。フフン」

真はカップラーメンをワイングラスのように回して理知的に笑った。その様子は滑稽としかいいようがない。

「はいはい。じゃあ帰るぞ。真美も気をつけて帰れよ」

「うん。また明日ね。ばいばい」

ドアの前に立つ正道に真美は小さく手を振って花が咲いたような笑顔を向けた。思わず正道の顔も緩む。

「あ、ましゃ。一ついい忘れてた」

ドアノブにイタズラがないかとちょんちょんと触っていた正道は呼びとめられて振り返る。

「この名前」

「決まったの？ パパ」

「決まっただけだったのかよ」

そつえば契約書にも書いてなかったし、真美の口からもこの名前は聞いていなかった。自分がこれから働くバイト先、しかも魔導便利屋という特殊な仕事。普通は名前など先に決まっているものだが、今から発表ということにいやがおうにも興味がわく。

「これから僕たちが働くこの名前。この美泉を守る正義の集団の名前。それは――」

真は立ち上がって短い腕を振り上げた。そして宣言する。

「……『魔導便利屋 エムズ』だ！」

「エムズ……なんだ、意外とまともじゃねえか」

正道は真のことだからおかしな名前をつけてくるんじゃないかと危惧していたが結構まともに考えていたらしい。

「そうだ。エムズの“M”には色々な意味を持たせた。まず、M a g i c の M。そして正義感などを示す M o r a l s e n c e の M。ほかにも M a k e や M e e t の M という意味も含めた」

「おお」

真は鼻を鳴らして自慢げに目を光らせる。正道は正直感心した。そこまで考えていたとは……。

「そして一番大事な“M”がある」

会社の名前というものはその会社の信念や想いを乗せたものである。この『魔導便利屋エムズ』という会社の核となる信念。一番大事な“M”。真の短く丸い体躯がぐっと伸びる。振り上げていた腕を再び振り上げて指を突き出した。

「それは——『真』のMと『真美』のMだッ！」

「パパ……」

なぜか照れた真美を見て正道は嘆息した。

「はいはい。仲がよろしいこつて。あとそこに M a d（狂気）の意味も足しとけ。……まあ悪くはないよ。じゃあな」

正道はドアノブをひねって外に出る。外は夜の闇に包まれて少し肌寒い。ビルに入っているスナックなどがもう営業しているのか、屋上の室外機が回っている。

室外機からのぬるい風とビルの谷間を駆け廻ってきた風を頬に受けて正道はビルを降りていった。

「俺も“M”だよな……」
そんなことを思いながら。

ビルを降りると警察がいた。

ビルの前にパトランプを点灯したままのミニパトカーが一台停まっている。そこから降りた警官が二人、ビルのなかに入ってこようとしていた。

ビルのテナントでなにかあったのか？ と正道は思ったがどうやら違うらしい。警官の一人が無線で「屋上で……」だ「魔導……」だと通信していたからだ。

正道は肝を冷やした。心当たりがとももある。気がついたら正道はその警官に声をかけていた。というか階段の前に立ち尽くす正道と警官が対峙する形になったので自然と声が出た。

「あ、あの？」

「なんだ君は。高校生がこんなところでなにしてる？」

二人の警官のうち年配の方が怪訝そうに正道を上から下まで見る。夜は深くないとはいえ、ここは普通の高校生が入るようなビルではない。

「あ、いや、なんかあったんすか？」

「うん？ ああこのビルの屋上で炎が立ち昇るのを見たって通報があつてな。どうやら魔導らしいんだが……君、魔導士だな」

年配の警官は正道の色眼を見て明らかに警戒を強めた。その後ろで若い方の警官が「魔導士の高校生……」と無線に向かって喋っている。

ヤバイ。捕まる――

「ちょっと、話聞かせてもらえるかな？」

「いや、俺はなにも……」

いいながらじりじりと横移動。若いほうの警官が警棒を抜こうと腰に手を当てる。それは抵抗もしていない高校生に対して過剰反応ともいえる反応だったが。正道は普通の高校生ではない。魔導士と分かっている以上その反応はマニュアル通りともいえた。先に牽制をしておかないと発導されてからでは遅い。

「そ、それ以上動くな！」

若いほうの警官が叫ぶ。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ――頭のなかでガンガンと警鐘が鳴り響く。なにごとかとスナックからママさんらしき人が顔を覗かせる。

美泉の条例で路上での発導は禁止されている。違反者には十万円以下の罰金、または一年以下の懲役と路上喫煙禁止条例など非にならないくらい厳しい。ただその条例は“自己防衛の場合は除かれる”。なので朝のブラッドに対する発導などは条例の対象にはならない。

しかし屋上での発導は違う。完全なる無意味な発導。“熱くなつた二人がやりすぎた”、その天罰。

これに関してはおっちゃんも悪いが、あんなに派手にやった自分も悪い。バカだ、熱くなつて油断してた。

「……すいません、いきます」

正道は覚悟を決めてパトカーの方に歩き始めた。おっちゃんを巻き込むのも悪い。と正道は観念したのだった。

停学……退学？ 少年院？ 魔導刑務所？ 死刑？

一歩進むごとに考えが飛躍していく。――正義の味方ここに死す！

やじうまも集まりだしたなか若い警官が後部座席のドアを開ける。するとその後ろに黒の覆面パトカーが嘶いいて停まった。やじうまも飛び退くほどの速度だった。

白煙とタイヤの焦げる臭いのなか運転席から鋭い眼光の大男が出てくる。警官の二人が焦って敬礼をした。

短く刈り込んだ黒髪、前を開けたダークグレーのスーツ。口に啞えた煙草から紫煙をくゆらし、悠然と歩く。まるで超人ハルクを肌色にしたような風貌の男は正道の前でその足を止めた。

「げ、巖ちゃん」

滂沱ぼったの涙を流す準備を始めた瞳がその人物を捉える。

正道はその人物を知っていた。

「おう、正道」

蔵ちゃんと呼ばれた巨躯の男は屈託のない笑みを浮かべて手を上げた。そして正道の横で背筋を伸ばしている警官二人に、

「いつまで敬礼してる、もういけいけ。ボリスボックス P B に百円届けに来たガキが行列作るぞ」

いつてガハハと自分で笑った。

警官二人は戸惑いながらもおとなしく去っていく。やじうまもつまらなさそうに散り散りになり、警官二人の乗ったミニパトカーはテールランプの尾を引いて角を曲がった。

たはたけんぞう

田畑蔵造——美泉警察署刑事課強行犯係係長。役職は警部。歳は三十五歳。その事件に対する嗅覚と行動力から“狼”の異名をとる。無骨な骨格に揺るぎない眼光、頬に刻まれているいくつもの傷は今までの凶悪犯との格闘の証だと蔵造はいう。

顔立ちは精悍そのもので、体格もかなりがっちりしている。女性警官からの人気もあるらしいが、恋愛には疎いらしく、結婚もしていなければ彼女もいない。

田畑家は警察一家で十も歳の離れた兄の田畑 でん 伝は美泉警察署署長を務めている。

その兄の伝は正道の父や真と同級生であった。昔は三人でよくつるんでいたらしい。田畑兄弟は昔からよく家を訪れては正道と遊んでくれた。特に蔵造と遊んだ記憶が濃い。歳の離れた兄の友だちになかなか馴染めずに蔵造は正道や真美の相手をよくしていた。

そんな仲だから連行されようとしていた俺を助けてくれたのか？

正道は判然としないまま啞然とネオンに照らされた厳造の三白眼を見る。

「厳ちゃんがなんで……？」

「派手な行動はいけないなあー正道い」

厳造が正道の肩を抱く。丸太のような腕がぐいぐいと正道の肩を寄せる。昔はアメフトで日本代表までなったらしい厳造はその隆々たる身体を維持したまま歳を重ねている。

「いやあ俺もな、さつき兄貴から聞いてよ。下のもんにもで連絡いつてなかったみてえだ。そりやそうだよな俺も聞いてねえんだから、ガッハツハ！」

いつてることがよく分からないが耳元で豪快に笑うのだけはやめてほしい。音の弾丸みたいだ。

「ど、どういうこと？」

「はあ？ 聞いてねえのか真さんから」

正道が首を傾げたと同時に厳造の覆面パトカーから無線の音が響いた。

「警察が協力ってどういう“コネ”だよ」

疲れた顔のサラリーマンが吐き出されてくる美泉の駅を横目に正道は家路についていた。

あのあと「詳しいことはゼロパトで説明してやる」ということで正道は厳造の覆面パトカーに乗った。厳造は一般人に対しても警察の隠語のようなものを使う。

厳造はどこか事件現場に向かう様子だった。詳しいことは教えてもらえなかったが、正道は厳造が凶悪事件を担当しているのを知っていたのでなにかそういう事件なんだと曖昧に思った。

厳造は「吸血鬼か」や「これで二人目か……」などと苦々しくつぶやいていた。それは今、美泉の街で起きている不可解な事件についてだったのだが――世間の出来事には疎い正道には分からなかった。

サイレンを鳴らす覆面パトカーがモーセのように車の海を割って進む。そのなかで正道は自分が解放された理由を聞いた。

「いやあよう。兄貴と真さんは昔からのダチだろ？　でよ、やつぱりダチはなんでも協力するもんだろ？」

「うん。で？」

「いや、だからな、そんなに突っ込んで聞けなかったがあのビルの屋上には違法建築があんだろ？」　正道は微妙に頷く。「そこでなんだか活動するんだろ？　魔導で」

「うん。するみたい」

「なんでも、正義のためと聞いたぞ？　そんな真さんたちの活動を俺達美泉警察は協力するってさ。違法建築も魔導の発導も容認してやる」

「ええ！？　友だちならなんでもアリなのかよ！」

「バカか、ものには限度つてもがある。そりゃ悪いことすりゃ誰であれとつちめてやるよ。兄貴は魔導士と人間の平和的な共存を望んでる。真さんの活動がいいように働いてくれると思ったんだろ？　よ……それに警察は真さんにお世話になってたしな」

「“真さんが警察のお世話に”の間違いじゃ……いいでっ」

厳造のグローブのような手が正道の頭をはたく。

「バカにするな、真さんは警察に大きく貢献してくれたんだぞ」

「はあ？」

おっちゃんの前職の話？　警察に貢献って、いったいなんの仕事してたんだ？　考えながら頭をさすっていると厳造がブレーキを踏

んだ。

「ほれ、こつからだと家近いだろ、俺は今からお仕事だ」

歩道に覆面パトカーが寄せられドアが開く、さすがにパトランプを回したままの車は目立つ。正道は歩行者の視線を浴びながら車を
出た。

「ご苦労様です」

正道はむつと口を引き結んで敬礼をしてみせた。

「うむ。まあ、お前も正義のために頑張るんだな、でもむやみやたらに発導すんじゃないぞ？ M D Aを着た俺はこえーぞ？ ガツハツハッハ！」

蔵造は爆発するように笑って覆面パトカーを急発進させた。急発進、急停車。この人の車の運転はどうかと思う。
そして今に至る。

「なんでそんな大事なこといわねえんだおっちゃん」

おかげで死刑になりかけたと正道はげえつと舌を出す。

真美は“コネ”とだけしかいってなかったし警察が協力してることは知らないんだろう。それにしても――

「疲れた」

思わず声に出た。今日は色々ありすぎたのだ。普段は駅前のC D ショップやいきつけの楽器屋を冷やかして帰るのだが正道の若干ふらついた足取りは真っ直ぐに自宅へと向かっていた。

事件と現場

「——うっ」

なんだ、ここ。

暗いな。それに、なんだこの臭い。錆？

口は塞がれて苦しいし、変な浮遊感に身体が上手く動かない。足音がする。あれ？ 誰か来たけど足しか見えない。

俺、吊るされてる？

「お目覚めかな？ えーっと、美泉大学一回生の戸田恵介君」

あ、俺の学生書。見上げてるのに見下ろしてる形になって目が攣りそう。

誰だこいつ……軍人みたいな格好して。てか、血が下りてきて頭いてえ……。

これどういう状況？

初めていった合コンが思いのほか盛り上がってそのまま美泉坂のチルドにいった。

正直チルドも初めてでビビってたけど酒の力も借りて人生で一番つてくらいはしゃいだ。大学デビュー万歳！ って感じで。俺は変わったんだ。反抗期だって親にも悪態ついたこともなかった神童のこの俺が。

で……そうだ、飲みすぎたから夜風に当たってくるとかいつて、

目が痛かったからトイレでコンタクト外して裏口から外に出たんだ。そしたら、なんか黒い人がいて……そっから記憶がない。俺、さらわれた？

「へえ、法学部？ 将来は弁護士か。賢いんだねえ」

「——ッ！」

「おいおい、ここは静かな別荘地だ。騒ぐと自然の音色が聞こえないじゃないか」

盛大に深呼吸した男の息が俺の顔にかかる。

そんな音色なんてどうでもいいよ！ この状況明らかにヤバイ！さらわれて吊るされるってなんだよ！ 俺なにかしたか！？

「ん？ そんなに恐がらなくていい。君はこれから死ぬが、大丈夫だ。輪廻のサイクルの前に私のなかで生きることになるはずだからね」

「——ッ！」

なにいつてる、こいつ！

そうだ、俺は魔導士だ……こういうときに使った！ 魔導を！ 魔導、魔導、魔導……あれ、どうやるんだっけ、発導って——

「発導するか？ 地の魔導士よ。別に私は構わないが、私の“なかのやつ”がダメだというんでね。……なんでも無垢な魔力が欲しいらしいんだ」

男の腰から大ぶりのナイフが抜き放たれた。そいつはどこから差し込む月光に照らされて死の輝きを放ちながら俺の首筋へ——

「……その気も、ないようだね」

憐れむような目しやがって……ああ……くそつたれ。

「では、さようなら——」

「被害者は戸田恵介、十九歳。美泉大学に通う大学生です」

ここは美泉市郊外の廃ビル。田畑厳造は新人の部下から被害者の情報を聞きながら件の戸田恵介のもとへと歩を進めた。

「おい、あんこ。害者はやっぱり観音様か？」

「あ、あん？ 観音？」

「かーっ！ 観音様は裸かってことで、あんこはお前のことだよ！ 新入り！」

新人の刑事は「へえ」と目を丸くして『観音』裸』『あんこ』新入り』と警察用語を手帳に書き込んでいった。

「あ、はい。害者は裸でした」

「じゃあこれで一連の事件の害者は三人目か」

「はい」

「“何色”だ？」

「黄色です」

「赤青、黄……まるで信号だな」

厳造は部下を引き連れ階段を昇る。色とは魔導士の色眼のことである。そのため警察では魔導士はイロツキという隠語で呼ばれることもある。

二人目の被害者が発見されてから約一週間が経過、この殺人事件の被害者はこれで三人目となる。一人目は火の魔導士、二人目は水の魔導士、そして三人目は地の魔導士の戸田恵介だった。どの被害

者も若く、魔導士という点で共通している。

この事件の被害者はいずれも全裸にされていた。そしてこの事件を象徴する特徴が他に二つ。

監識がうつつくフロアに辿りついた二人はずんずんと被害者へ近づいていく。窓際に横たえられた全裸の被害者は色を失っていた。外傷は首筋に赤い糸のようについた傷口だけ。そこから流れるものはない。

蔵造は合掌してしゃがみ込む。被害者の横の地面には被害者の血で文字が書かれていた。これまでの事件でも同様である。それがこの事件一つ目の象徴的特徴。

「『魔導士に復讐を』ね。ホシさんは他に気の効いたこと書けないもんかね……」

「死亡推定時刻は昨日の深夜三時から早朝五時の間とみられています。そして害者は他の二人と同様、現場とは違うところで殺され、ここへ運ばれたようです」

このフロアには不法侵入者によるゴミや落書きなどはあるものの、血痕らしきものは見受けられない。

「害者の友人の話によると、害者は昨夜美泉坂のクラブ『チルドレンオブナイト』で飲んでいたそうです。そしてトイレに立って、いなくなっただと」

「チルドねえ……売人にヤーさんにブラッド……でもこんなことするか？ 客のなかに猟奇的な野郎が紛れてたか……」

ブラッドは最近おとなしいが殺しなんかする集団じゃない。ヤーさんだってこんなことはしない。害者は人畜無害なやつばかりだ。

トラブルを抱えてるようなやつじゃねえ……犯人はなにもんだ、畜生め。

この連続殺人事件は厳造が関わってきた事件のなかで最も不可解かつ不気味だった。目撃情報も確かなものはなく、証拠らしきものもほとんどない。突拍子もなく死体が現れる。その被害者たちに繋がりはなく、通り魔的。

犯行の特徴としては、狙われるのは若い魔導士というのと現場に残される魔導士に対しての復讐心。そして――

「やっぱり犯人は“吸血鬼”だな」
それはこの事件の犯人についた通り名。その名はこの事件のもう一つの特徴を示す。

この事件の被害者の身体からは“大量の血液が抜かれていた”。
猟奇的な犯行を際立たせるための行為だという見方が強いが、本当の目的は分からない。

「……また、抜かれてるんですかね」

「突っ込めよ」

「え？」

「お前、信じたのか。吸血鬼なんてこの世にいるわけないだろうが、いるのは人間か魔導士イロッキかだ」

厳造は煙草に火をつけて踵を返す。

「吸血鬼なんていてたまるか」

「そ、そうっすね」

「ほれ、地取りいくぞ、あんこ」

厳造はもと来た道を歩いていく。新人の刑事は再び登場した警察用語に首をひねった。

「じ、地鳥？ め、飯すか？」

「聞き込みのことだ、バカ」

「な、なるほど……」

廃ビルを出た厳造は迷うことなく自分の覆面パトカーへと突き進む。自然に部下もついてきて助手席に乗った。

「マジで電波だなこのヤマは」

「僕、電波じゃないっす！」

「あ？ また勘違いか、電波はわけの分からん事件ってことだよ、この事件みたいにな。書いとけ！」

「なるほど……」

ため息をつく厳造とうんうんと頷く新人刑事を乗せた覆面パトカーが唸りを上げる。そして急発進。

「ぐえ！」

油断していた新人刑事はシートに叩きつけられた。手帳とペンが舞う。

「ガッハッハッハ！」

厳造の操る覆面パトカーは笑い声と砂煙を巻き上げて夜が始まったばかりの美泉坂に向けて走り去った。

「じゃあな、ミケ助！」

ギターケースを揺らし走り去る正道を見てミケ助が鳴いた。

学園の巨大で豪華な門扉の上。金色の鷹の彫刻の上がミケ助の定位置となっている。

正道に助けてもらったミケ助は保健室で治療を受けた後、獣医にも連れていかれた。骨に異常はなく、次の日には歩き出した。今では路地裏に帰ることなく学園でのほほんと愛されている。

エムズに所属してから一週間、ブラッドからの復讐なんてのもなく、正道の日常は充実していた。

エムスにはビラの効果もあつてか依頼が舞い込み始めていた。料金体系は一時間千円と分かりやすいのも頼みやすいらしい。ただ、“魔導”便利屋なので魔導を確実に使わないような依頼は断っている。「トイレを交換してくれ」なんていわれても専門技術を持たない正道にはできない。

依頼のほとんどが力仕事で、なかには「そのゴミを燃やしてくれ」など魔導士をバカにしにきているような仕事もあった。そこに正義の流布というものは感じられなかった。

しかし何事も一歩から。正道は文句をいうことなく汗を流した。ただ、従業員は正道一人なので、無駄に忙しい。「この書類を〇〇まで届けてくれ」と依頼を受ければ風の発導で街を駆け、「引越を手伝ってくれ」と依頼を受ければ地の魔導で荷物を運んだ。

そのおかげで正道は基本属性の魔導の扱いが巧くなった。厳造のいった通り警察からの御咎めもなく、正道の両親も真から聞いていたみたいでなにもいわない。

真美は依頼が舞い込み始めてから自転車通学に変わった。正道より先にエムズへ向かい、一日の仕事の流れを確認する。真はその横で、ラーメンを啜り、フィギュアを愛でる——いや、二人が学校にいる間、いろいろまとめているようなので一応仕事はしているらしい。尚、室長がシャイボーイのためエムズには電話回線はない。仕事の依頼はすべてメールである。

「おは——ようッ!？」

快活にエムズのドアを開けた正道は突如繰り出された“攻撃”にのけぞった。

アマソネス
——女戦士再び。

「だあああつ！　こんなことやってる場合か！」

「リベンジだ！」

女戦士の後ろからにゅつと顔を出した真が正道を指差す。その動きに女戦士も同調した。

「稼ぎ頭を殺す気か！」

「そんなに怒るなよ稼頭^{かずお}央君」

「そりやどこの野球選手だ!？」

「さあ冗談いつてないで、着替えて着替えて」

女戦士を消した真は手をはたきながらプレハブへと入っていった。

「……俺が悪いのか？」

エムズでは正道のために制服が用意された。無地の白いポロシャツに黒いズボン。そして「M」と印字の入った帽子^{キャップ}。帽子に関しては「俺はマ○オカ」と突っ込んだが、なかなか清潔感があつていい。なにより制服を着ることで仕事をしているという気になった。

プレハブに更衣室なんてものはない。応接スペースではぱつと着替えた正道は目を背けている真美に「着替えたぞー」と声をかけた。真美が密かに正道の着替えを見ていたことは気づいていたが正道はなにもいわない。

真美が、

(うう、どきどきするなあ……写真撮りたい)

と思っっていることは真美しか知らない。

「相変わらずいい身体だねえ……」

「おい、なぜ顔が赤い」

フフンと意味深に笑った真の手から今日の仕事内容が手渡される。一日の仕事内容は住所なども含めて一枚の紙にプリントアウトされる。

「今日は引っ越し？　こんな時間に？」

今は十六時を回ったところ。引っ越しの作業は時間がかかる。こんな時間から引っ越しなど夜逃げのようである。それに基本的に引っ越しの依頼は学園が休みの日に受けると真はいつていたのだが――

「そう。なんだか早く出たいんだって」

「危なくねえの？」

「大丈夫だと思うよー、普通のカップル。怪しい仕事もしてないし、前科もなし！」

「そこまで調べるか、普通」

「暇だったもんで、てへっ」

「超絶可愛くねえ」

おっちゃんが一番危ない。という言葉は呑み込んだ。仕事はメールで聞いたとして、前科の有無は警察の協力を仰いだのだろう。いくら真と署長が友人だからとはいえそこまで開示する警察もどうかと思う。

真の前職も情報開示に一役買っているのかもしれないが、前職がなにか正道がいくら聞いてもはぐらかされるだけだった。真美も詳しくは知らないらしい。

「まあいいや、いつてくる」

「ああ、私もいく」

正道が住所を見ながらドアに向かうと真美が軍手とエプロンを持つて近づいてきた。

「手伝うよ。いつもまさちゃん一人だし。ね？」

「お、おう」

うるんだ瞳で見上げられてどきまぎしてると真の舌打ちが聞こえた。

見ると、真は鬼のような顔をしていた。

「寄り道せずに帰ってくるんだぞ……帰りに、美泉坂三丁目とかいくんじゃないぞ……」

「いかねえよっ！　そこホテル街じゃねえか！」

（ホ、ホテルっ！！！！）

心のなかで叫んだ真美の顔はのぼせたように赤くなった。

美泉海岸沿い。某高層マンション。

「ほえー、すげえマンションだな」

「うん……こんなところ引越すってなんなんだろう？」

正道と真美は二人して見るからに高そうなマンションを見上げていた。

美泉海岸沿いは高級マンションが立ち並ぶ区画となっている。塩害防止に植樹された木々が海の青とのコントラストを生み景観もよく、近くの港にはシヨッピングモールや水族館が併設しており日本最大級の観覧車まである。

美泉市民にとってこの区域に住めることは一種のステータスである。それを引越すとはよほどのことがあったのだらう。

エントランスの前にソファーなどが乗ったトラックが停まっていた。依頼主はもう作業を始めているらしいが開始の時間は十七時三十分にしているで焦る必要はない。正道は理由を推察しながらエレベーターのボタンを押した。

「引越す理由ねえ。家賃を維持できなくなったとか……幽霊とか！」

「きゃ！」

ふざけていった正道だが、真美は本気で驚いたらしく、反射的に正道の腕を掴んだ。胸が正道の腕に当たる。

「おっ、おい。脅かした本人に飛びつくってどういうことだよ」

「ご、ごめん。おばけとか苦手で……」

二人は顔を赤らめたまま離れる。正道は所在なくエレベーターの階数表示を見たり、無意味にボタンを連打したりした。

「べつ、別に謝らなくてもいい。気にすんな」

「まさちゃん……」

（気にしなくてもいい？　ってことは腕組んでもいいってこと？）

「……だったらいいのにな」

曲解しかけたがすぐに軌道修正。

「はっ？」

「な、なんでもない」

スーッと音もなくエレベーターが開いてテレビを持った男女が出てきた。首にタオルを巻いて重そうにしている。依頼者だ。

「あ、エムズの人？」

「あ、そうです」

「ちょうどいいや、これ運んでよ、重くて……」

それもそのはず。百インチはあろう大型の液晶テレビである。いたって普通のカップルに見えるがやはり住んでるところからいってハイエンドな暮らしをしているようであった。

「じゃあ、ちよつと置いて離れてもらえますか？」

カップルがゆっくりとテレビを下して距離を置く。それを確認した正道が発導した。

『ヴィントアーム
風の腕』

発導すると同時に正道の腕に薄緑色の腕が被膜のように重なる。地の魔導の方が臂力りょりきを出せるが、壊れ物を扱うときはこれだ。地属性の魔導では性質上硬質なので傷つけてしまう。

正道は一人で軽々とテレビを持ち上げて、エントランスを出ていく。

「じゃあ、あとできてね。十一階だからね」

男が正道の背に声をかけ、エレベーターへ戻っていった。その時にカップルの女が、

「あれで、殴るんでしょ？ 野蛮ね」

といっているのが聞こえた。

ついてきていた真美がぐつと唇を噛んだ。

カップルの引越しは順調に終わった。引越しの理由は隣に住んでいた大学生が死んだということだった。今日の昼にニュースを見て女の方が「こんなところ嫌だ」といい出したらしい。急な引越しだったため、たまたま知っていたエムズに依頼。それと、女の方が魔導士に興味があったらしい。

見世物にされた感じはあったが正道は文句をいうことなく仕事をこなした。料金を払う時に男の方が「魔導って便利なんだね」といったのがせめてもの救いだった。

「……」

「怒んなよ」

真美は口を尖らせてエレベーターホールの窓から暗闇に沈んだ海を眺めていた。十一階の高さから見る海はさぞかし絶景だろうが、ここから見える方向は海だけなのでただ黒い。依頼者のカップルは最後の荷物が運び終わるとそそくさとトラックを走らせていった。まったのでいない。なので、悪口もいえる。

「だって、まさちゃんのことバカにしてたよ、あの人」

「まあな。まああんなもんだよ。便利っていつてもらえただけマシだろ」

「そうなのかな……私も魔導が使えたら……もつと魔導はちゃんと

した人のためになる力だ、って広められるのに」

悔しいのか、真美の瞳が潤む。

「お前はお前でいいよ。真美は真美。どうせ魔物なんていねえんだから、自由に生きる人間。魔物が出たときは俺たち魔導士が守りいたします」

正道は帽子を取って英国紳士風の挨拶を試みせた。しばしの沈黙。

「なんつって……って泣いてる！」

顔を上げた正道はなぜか泣いてる真美を見ておろし始めた。大粒の涙が頬を伝い、端正な真美の輪郭をなぞるように流れ落ちていく。

「だって、だって……あのときの約束」、覚えてて、くれっ、た」
嗚咽混じりに真美はいう。しかし――

あ、あのときの約束？ どのときだ？

正道は記憶の引き出しを開けられるだけ開けまくったがそれらしきものは出てこなかった。

ここはごまかさなくてはっ！

「そ、そうだぞ、や、約そ……」

「ガッハッハ！」

正道がこの場を乗り切ろうとどぎまぎしていると不意に後方から爆発的な笑い声が割り込んできた。急な大音声に真美と正道は思わず飛び上がった。おかげで真美は泣きやんだ。

「げ、厳ちゃん」

「姫を泣かすとは騎士失格ナイトだなあ正道」

正道が振り返ると想像通りの人物がにやつきながら紫煙をくゆらせていた。その隣には部下らしきスーツ姿の若い刑事があたふたしている。

「田畑さん！ こ、ここは禁煙です！」

「ああ？ そうか。あんこのくせに固いこといいやがって。アニコは柔らかいもんだぞ？ ガッハッハ！」

大笑いしながら、煙草を手のひらで握りつぶして消火。指の隙間から白煙が上がる。

「ひいいつ、熱くないんですかつ」

「お前もこれくらいできるよになれば一人前の刑事だ^{デカ}」

葉のゴミと化した煙草を怪しい宗教よろしく、“神の砂”を出す教祖様のように手のひらから散らして厳造はしたり顔。

「がんばりまっす！」

「ガッハッハッハ！」

部下は感動したようで、目を輝かして両手を何回も開閉している。満足げな厳造の笑い声が波濤のようにエレベーターホールを呑み込んだ。

「……違つと、思つぞ」

「……うん」

二人が呆れていると、厳造はどすどすと真美の前にきて腰を曲げた。右手は胸に当てられている。紳士的な礼をしているらしいが、筋肉の鎧が邪魔してなんとも似合わない。美女と野獣のワンシーンかなにかのようだ。

「久しぶりだな、お嬢。魔物が出たときは私たち警察^{正義の味方}がお守りしますよ。魔導士は頼りないやつばかりだから」

厳造は頭を上げると、正道を見てにいつと笑う。

「見てたのか……」

厳造は正道の他人にいじられると一番恥ずかしいシーンから見ていたらしい。どぎまぎしていた正道に助け船を出したのかもしれないが、こんな威圧感の塊のような人間が後ろで聞き耳を立てていたことに気づけなかった自分が恥ずかしかった。

「見てたなあ。見てたよ。いいマンションはエレベーターも静かでお前は気づかなかったみたいだな。お前は仕事か？」

「そうだよ」

「うむ。若者は働くのがいい。働け働け！ ガツハツハ！」

「お久しぶりです、厳造さん。あの、ここだなにを？」

真美がおずおずと尋ねる。真美は厳造のことが苦手だ。悪い人間ではないのは分かっているのだが、その巨軀と突如として爆発する大きな笑い声にびくびくしてしまう。

「まさか、厳ちゃんここに住んでるとか？」

「んなバカな。そんな高給取りじゃねえよ。この人間がちよつとな……地取りだ地取り」

「地取りというのはですね」

部下の刑事が黒い手帳を開けて一歩進む。自慢げな表情だ。

「聞き込みでしょ？」

正道がそういうと部下の刑事は悲しそうな表情を浮かべて下がったが、その理由は正道には分からなかった。件の刑事は「僕より若い子が知ってた……」などとつぶやいている。

「もしかして、ここの大学生の？」

「む。知ってんのか。正道でもニュースを見るとは……お前も大人になったんだな、関心関心」

厳造はボウリング玉でも拭くように正道の頭をわしわしと撫でる。

「ちよつ、痛てえし、ちげーよ、今日の仕事の関係だよ」

ニュースを見ないことは否定しなかった正道は今日の依頼の経緯

を厳造に話した。

「——なるほどな。わがまま女がわめいて引つ越しね」

「女は恐いつす、田畑さん」

正道の話を二人は身も蓋もないことをいってまとめた。あながち間違っではないが。

「迷コンビめ……」

正道が二人を半眼で見ていると、真美が不安げな表情で厳造を見上げた。揺れる瞳に不安の色が浮かぶ。

「厳造さん。私ニユース見ましたけど、やっぱり……“吸血鬼”の事件なんですか？」

真美はその身長差から、髪が後ろに流れるほど大きく見上げている。厳造は真美の問いかけには応えず、しばし視線を交錯させた。

宝石のような輝きを放つ黒瞳とナイフのような輝きの鋭利な三白眼。その両極に存在するような視線の交錯は真美が首をかしげることで離れた。

「あ、あの？」

「綺麗になった」

「えっ？」

厳造は久しぶりに会った真美を見て素直にそう思った。

『女』というものに疎い厳造は感情のまま臆せずストレートにいう。綺麗なもの綺麗で醜いものは醜い。ただ、人生経験上醜いものを醜いというのはデメリットしかないので面と向かってそれはいいわないことにしている。婦警のビンはなかなか痛かったのだ。

一方、綺麗と鮮烈なほどに直球で褒められた真美は「えっ？」を繰り返しながらロボットのようにな後退していった。

「恥ずかしがり屋さんなんですなえ、可愛いなあ」

若い刑事がゆるんだ顔で真美に追い打ちをかける。真美は「ほうつ」つとよく分らない音を出して沈黙した。

「あれ、なんか悪いこといったか？……で、事件^{ヤマ}のことか。そうだな、まだ正式な公表はしていないがおそらく吸血鬼の仕業^{イロツキ}だろうな。お嬢は首突っ込まない方がいい。まあ、狙われてるのは魔導士^{イロツキ}だがな」

一応質問したのは自分なので、真美は下を向いたままこくこくと頷いた。

「お前が当たらなくてよかったな、正道」

蔵造が正道に話を振るが、正道は判然としない様子で帽子の上から頭をかいていた。

「さつきからなに？ 吸血鬼？ そんなの信じてんのかよ」

正道のとぼけた一言に一瞬時間が止まる。

「出たな“バ力道”。ニュースはやっぱり見てないようだな。ギタ―とアソコばかりいじってねえで世間に目を向ける」

「やめろ！ いろいろ聞き捨てならねえ！」

（あ、アソっ……まさちゃんのアソッ……！）

人知れず真美は突如沸いた刺激にふらふらしていた。さつきのダメージも大きい。

「携帯でも開いてニュース見てみるんだな、多分乗ってるぞ」

正道はいわれるがまま携帯を開き、契約時に登録させられたニュースサイトに飛んだ。それは「注目のニュース」というところに上げられていた。

「なにこれ……」

『美泉の魔導士連続殺人。被害者はこれで三人目』

その見出しで大学生、戸田圭介の死について書かれている。ニュース記事の終わりにはこの事件の関連リンクがいろいろと出てきた。『犯人は魔導士に恨みを持った人間？』や『魔導士への裁き？』などの見出しが躍る。

そして『抜かれた血液。犯人は吸血鬼？』という記事には血を抜かれた死体の状況や今までの被害者の特化属性が違うことなどが書かれていた。そして、現場に残される犯人からのメッセージ――『魔導士に復讐を』

いわれてみれば、学園でもこの事件の話をしている生徒もいた気がしたが、音楽漬けでテレビすらまともに見ない正道はこの事件についてなにも知らなかった。

「了解か？ 多分次に狙われるのは緑だ。風な、風。だから正道には関係ねえと思うが、一応気をつけろよ。お前は色丸出しなんだからな。ヤバいのがいるぞ、この街に」

厳造はいうと広い背中を見せて歩いていく。

「お友達に風の魔導士さんがいたら夜には出歩かないよう注意しておいてください。では」

若い刑事も敬礼をして厳造のあとを追った。

正道はその姿を見ることなく携帯を握りしめたまま視線を落としていた。その手は白くなり小刻みに震えている。

「まさちゃん？」

「魔導士ばつか狙いやがつて……許せねえ」

正道は怒りに震えていた。

正義の味方のはずの魔導士が恨まれて、狙われる。しかも被害者はおそらくその犯人とは関係のない人たちなのだ。若く、魔導もまともに発導したことないような、普通の暮らしを送っていた魔導士。

吸血鬼と呼ばれる犯人は魔導士という“存在”に向けて恨みを放っている。魔導士すべてを悪とみなす犯人を正道は許せなかった。

「……うん。でも、私たちにはどうすることもできないよ」

なにが正義だ——形容しがたい無力感が吐き気のようにせり上がってくる。

「……分かってるよ」

正道は怒気を孕んだ声でそういつてエレベーターのボタンを叩いた。静かな駆動音でエレベーターが昇ってくる。

大きな事件が自分たちの街で起きているからといって所詮は他人ごとなのだ。自分たちが関わるとは思えない。テレビや新聞でその報道を見ても、たとえそれが家の隣でも、所詮は他人。違う人生なのだ。その人生が自分の人生と交差する確率は低い。

——そう、思っていた。

時刻は午後九時を回っている。

美泉坂通りは猥雑な光に溢れ、本来の姿を見せる美泉坂は生き生きとしている。派手な車が爆音でクラブへと向かい、歩道を歩く人間は酒気を吐きだし、揺れる。高校生の正道から見ればここは掃き溜めのような気がした。酔客とは違う目をした怪しげな人間も多い。そんな掃き溜めのような景色を見ながら、正道と真美はエムズへ帰ろうとしていた。移転しろという正道の願いは届いてはおらず、エムズもしっかりと掃き溜めの一部である。

「つけられてる」

不意に正道が真美の耳元で囁いた。

真美は一瞬なにごとかと思ったが言葉の意味を理解して身を強張らせた。心音が跳ねて神経が張り詰める冷たい感覚。

「振り返るなよ」

「……うん」

前方にエムズの入っているビルは見えている。

後ろからの気配はここ最近ずつと感じていたものだった。それは正道一人のときにはなにも感じることはない気配。狙いは真美らしい。

真美も「視線を感じるときがある」とはいつていたがそれ以上その気配に動きはなかった。真美は正道や真と行動することが多い。それを警戒して見るだけに留まっているのかも知れない。

真が危ないからと違法改造したスタンロッド（しかも二本）を真美に携帯させようとしていたが、今はそっちの方が危険なので正道が止めた。

しかし、害はないとはいえ。それは今現在の話。これからエスカレートしていく可能性などいくらでも考えられた。

手の届く範囲にいる人間を守らないでなにが正義か——正道は行動を決意した。

「捕まえるか、“ストーカー”」

「えっ、あぶな……きゃっ」

正道が小さく震える真美の手を握った。もじもじと動く真美の手の震えが正道の手のなかでおさまっていく。落ち着くと真美がほうと息を吐いた。

「あつたかい……」

「なっ！　ば、バカっ、そんなんじゃないんだからなっ」

そんなんってどんなんだ？　っと自分に突っ込みを入れた正道は握り返してくる手の感触にドキドキとしながら前を向いた。

「——走るぞ」

「……うん」

正道と真美が同時に地面を蹴った。その瞬間、後ろの気配が慌てるのが分かる。往来のなかから抜け出した足音がこの計画の成功を伝える。

——かかった！

心のなかで快哉を叫んだ正道は真美を引っ張って路地を折れる。

その際に正道がなにごとかつぶやいて地面に触るのを真美は不思議に思った。

「さて……なにが出る」

正道は路地を進んだところで足を止め、真美をかばうように後ろにやった。路地は飲食店の裏口ばかりなので暗く、人の通りはない。すえた臭いが漂い、どこかのスナックから流れ出るカラオケの音声

が夜気に舞う。

真美は恐いのか正道のポロシャツを握り締める。正道はその手をぽんと触ってやった。

その直後、真美のストーカーの足音が響いた。

ストーカーは二人が路地を走り抜けたものだと思ったようで、スピードを緩めることなく路地に侵入してきた。暗いのと、フードを被っていることで顔が判然としないが、体格は男、痩せ形で、身長は正道より高く見える。一瞬正道の脳裏にハリオの姿が思い浮かんだが、パーカーの色はグレーで、ジーンズ姿。なにより雰囲気違った。その男からは殺気というものは感じ取れなかった。

「ひッ！」

男は待ち構えていた正道を見てすぐさま踵を返した。やはりいるものとは思わなかったらしい。

そのタイミングで正道が“発導”する。

ヴァイント・ザ・フェイス
『風の壁！』

風を巻き起こしながら、路地の入口に壁が出来る。ただ、壁とはいえ属性は風なので向こうの景色がぼやけて透過されていた。しかも夜陰に紛れて壁があることは分かりにくくなっている。酔客の目ではほとんど分からないといってもいい。

正道が路地に入る前に地面を触っていたのはこの発導の仕掛けだった。正道はそこに魔力を“置いていた”のだ。

それは、ハリオとマリオを捕えたときと同じで見ようと思えば見えるものだったが男はそんなことに気にもせず、

「ぶえぶっ！」

案の定、男は壁にぶつかって倒れた。そして鈍い音とともに大の字に仰臥^{ぎようが}。男はしたたかに頭を打ち付けたように完全に伸びた。正道は倒れたストーカーに歩み寄る。フードがめくれてヒビ割れた眼鏡をかけた男の顔が露わになっていた。

「あれ……お前」

「あつ……」

正道と真美はストーカーの思わぬ正体に顔を見合わせた。

五十島翔太——十六歳。鷹光学園1 - 2組。出席番号三番。朱川
いそじま しょうた
姉妹と同じクラスの同級生——

「——以上」

「それだけっ!？」

縄に縛られた翔太は泣きながら吠えた。

真美をつけていた気配の正体は鷹光学園に通う同級生だった。正
体を知った正道と真美は真に連絡をし、伸びている翔太をエムズへ
運んだ。

そこからが大変だった。

自分の娘のストーカーを前に真はその身に鬼を宿した——

「キエエエエツ!」

まず、プレハブのドアを開けると改造スタンロッド二本を最大放
電させながら真が奇声を上げて飛びかかってきた。青い燐光を放ち
ながら真は剣舞のように飛び跳ねる。ただ、その狙いは翔太だが翔
太を背負っているのは正道なので危険なのは正道だった。

自分の肉体の限界を超えているような動きを繰り返している真の
目は血走り、飛び散る汗が地面を打つ。

「落ち着けて! おっちゃん!」

「そいつを、降ろせ! 正道iiiiiiiッ!」

真は正気を失うと相手の呼称を変えるらしい。

「ぬんツ!」「うおッ」

青い燐光が正道をかすめる。真は普段の動きからは想像できない動きをしているが、気持ちだけが先走っているようでうまく動いてはいない。とはいえ、人間一人背負った正道にとって真の攻撃は回避するのが精一杯だった。しかも背中の中翔太は正道より大きいのだ。鬼神モードの真はストーカーを飛ばう正道を敵と見なしたようで、足をもつれさせながら両手に構えたスタンロッドを振り回してくる。屋上に運び上げる前にストーカーの正体を告げていたのだが真には関係ないらしい。

真はバチバチと放電するスタンロッドを打ち鳴らして構える。その姿と眼光は宮本武蔵を彷彿とさせた。

「魔導は使わねえのか」

「ハア……この手で、裁きを……ハア……下す」

真は息も絶え絶えにそういうと、地面を蹴った――

「パパ! やめて!」

「真美……」

正道は発導できるように、翔太を背中だけで支えて構えていた。真美の声に正道は発導の気配を孕んだ手を再び翔太の足に戻した。

「もう、いいから……」

結局のところ真を制御できるのは真美しかないようだった。

その悲痛な叫びに、真は足を止めて息を上げながら屋上に膝をついた。体力的にも限界がきていたらしい。

「娘は……真美は……渡さんぞ……」

いいながら真は気を失った。

「パパ!」

真美が泣きながら真の横に膝をついて揺さぶる。正道も心配して駆け寄ったが真の胸が上下していたので安心した。

「大丈夫、気失ってるだけだ」

真のこんな姿を見るのは初めてだった。気を失うまで真を動かしたのは娘への愛情。一種偏執的ともいえるが、正道はそこに『父親』というものを見た。

「大事にされてるな、真美」

真美は泣きながら頷いた。

——真は今、真美に見守られてソファーに寝ている。

翔太が目覚めたのはそれからすぐのことだった。

「ねえ、それだけなの、ぼぼ、僕って！ ねえ、正道君！」

「だって、知らねえもん。出席番号だって勘だ」

「か、勘だったの！？ 当たってるし！」

翔太は真が襲いかかってきたことなど露知らず、まくしたてるように甲高い声の早口で唾を飛ばす。そしてヒビの入った銀縁の眼鏡を鼻の蠕動^{ぜんどう}だけで器用に上げる。

「そんな焦って喋んなよ……はあ」

正道は声に出して嘆息した。

翔太は真と“同類”のようだった。

形はいいが常に人を窺うような目、神経質に動く鼻がすんすんと鳴く。必要以上に唇を湿らす癖があるようで、薄い唇からは蛇のようにちろちろと舌が飛び出している。少し影のある頬にはポツポツとニキビが浮かび、翔太が正道と同じ青春を生きていることを示していた。

「で、ここはなんなの？ こ、こ、このぱつ、天国は！」
パラダイス

翔太は興奮気味に後ろに束ねた長髪をぶんぶん揺らして辺りを見回す。

やはり同類だった。翔太もオタクなのだ。

翔太は整然と並んだフィギュアを目を見開いて「あ、あ、あれは百式魔華ひゃくしきまかのノア・リヴンダルの限定！」などと正道には理解不能な言語を吐いている。

しかしこの話し方はなんとかならないだろうか。正道は頭をかいで、翔太と視線を合わせた。

「天国見る前に現実見ろ」

「あ、リュアン・キンダーク……じゃなかった正道君」

「……俺を二次元に持っていくな」

調子狂う——正道は嘆息して、おもむろに翔太の眼鏡を剥ぎ取った。

口をぱくぱくとさせる翔太の素顔は意外と整っていた。

「ああッ！ ぼつ、僕の銀輪ぎんりんの魔導鏡まどうきようがッ！ それは世界と僕を繋ぐ魔導具なんだ！ きよつ、強制ログアウトは禁——」

「うるさい」

「ひっ！」

ぴしゃりといい放った正道に睨まれて、翔太はおとなしくなった。

「で、真美をストーキングしてた理由は」

「す、ストーキングとは失敬な！ ぼつ、僕はただ、来栖さんの“彼氏”である正道君がその若き欲望に任せて青少年にあるまじき行為を働かないように——ふがつ」

「まてまて」

正道は思わず早口で話す翔太の口を塞いだ。

「いろいろ曲解してる。ぐにやぐにやだ。お前の行為はストーキングだし。俺は真美の……その、か、彼氏なんかじゃねえ」

正道の手のひらのなかで翔太がにやりと笑ったのが伝わり、正道は手を離れた。

「心が揺れておりますぞ、脇坂氏。うじ拙せつには分かりまする」

「うつ……って、なにキャラだお前」

正道は翔太に眼鏡を戻してやって、あぐらをかく。フィギュアパライス人形天国を羽ばたいていた視線は落ち着き、今は少し顎を引いて正道を見上げるように見ている。

「とにかく。お前はストーカー。な？ ストーカー認定試験合格。

満点だ。で、俺は真美の彼氏じゃない。幼なじみだ。オーケー？」

正道は諭すようにゆつくりと指差し確認しながら告げていく。指差した先にいる真美は恥ずかしそうにうつむいていた。

「僕はストーカーじゃない……クリスマス姫（注 真美のこと）を守る騎士だ！」

「まず、一回その電波を切れ同級生。お前は俺と同じ高校生だ」

「むう、それは仮の姿で……」

「話にならん」

翔太は真より“イタい”らしい。

アニメや漫画や小説。そこから抽出した成分をもとに設定を築き上げ、想像のなかに新たな自分を生みだす。こういうのを中二病と呼ぶのだろうか。正道は思う。幻想に耽るのは別に悪いこととは思わないが、まともな会話できないのはつらい。真のように年季が入れば、分別もつくのかも知れないが、翔太のような幻想に浸りたての罹^り患者^{かん}には、厳しいようだ。なにしろ一年前まで本物の中学生だったのだ。

と、正道が“そういうことにして”なんとか納得しているとソフアーが軋^もむ音と衣擦れが聞こえた。見ると真が真美に支えられて半身を起していた。

宿っていた鬼神はなりを潜め、今は気の抜けたような穏やかな顔をしている。飛びかかってくるかと、正道は武器になりえそうなものに視線をやったが、その必要もないようである。

「話は聞いていた。翔太君、君は真美たんを守ろうとしてくれてたんだね？」

翔太は真たちのいる方に背を向けていたので、縛られたまま器用に方向転換した。

「なっ……」

「真美の親父さんだ」

真美に支えられている真を見て、翔太は空気を食みながら、わなわなと震え始めたが、正道の言葉で胸を撫で下ろしたようだった。そのリアクションには正道も少し納得した。制服姿の女子高生に支えられる典型的オヤジタイプな真。どう見ても父親とは“違う意味の”パパにしか見えない。しかも魔導士。

落ち着きを取り戻した翔太は、幻想世界にダイブして囚われの騎士が王に弁明をするように語りだした。

「王よ……私は、イーグルライト国（注 鷹光学園）の一兵士として国に忠誠を誓ってきました。この命はこの国の民の安寧のためにあると……その正義に愛は枷かせとなる。私は愛を捨て、戦場に身を投じました……しかし私は愛を捨て切れなかった！ 私はこの国の兵士としてあるまじき感情を抱いてしまいました……容姿端麗、明眸めいぼ皓齒こうし、可憐な花のように慎ましい、まさに『姫』！ ……クリス姫を、愛してしまったのです」

「要は、真美のことが好きなんだな？ お前は」
セリフ調に話す翔太の言葉を正道が簡潔に訳す。これは自分が理解するためでもある。

しかし、こうキャラに入ると話し方まで変わるもんなのか。正道は感心しながらも翔太の話を聞いた。

「しかし姫には名将、炎のリュアンことリュアン・キンダーク將軍という許嫁が」

「どつかで聞いたぞ……お、俺の、ことが……」

「確かにリュアン様は眉目秀麗、性格は快活でお優しく姫との仲も良好と見えます。剣技の方も群を抜き、リュアン様一人で一万の魔物が巢食っていたスプリング砦を制圧されたのは伝説。私の、いや兵士全員の憧れです……しかし！ しかし、まだ姫とリュアン様はお若い……」

「お前は何歳の設定だ」

翔太は「無粋なことを」という目で正道を一瞥して王様役の真に向き直った。

「まだお互いの貞操を破るには早い！ 私は！ ……せめて届かぬ愛ならば……お二方の純潔を守ろうと……私は……っ」

翔太はついに齒噛みして泣いた。正道は翔太のなんでもないグレ

ーのパーカーが鎧に見えてきて思わず目をこすった。迫真の演技だった。

「そういうことだったか……お前、名はなんという？」

真が胸を張って威厳のある声で問う。白衣を着た肥満体の中年男性に今、イーグルライト王という新たな人格が宿った。

「乗ってきた……」

正道は片眉をひくつかしてさぞ困っているだろう真美へ視線をやる。

真美はイーグルライト王の横に座って、静かに話を聞いていた。

両手は膝の上に重ねられ、その姿からは気品さえ漂う。

「はっ！ まさかお前まで……く、クリス姫なのか」

正道はそう思ったが、真美はリアクションも取れないので普通に話を聞いているだけだった。感化されているのは正道の方である。

「私は、ショティオ・イソジマ。クリス姫をお守りする者です」

「ふむ。イソジマ……珍しい名前だ。東方の者か」

翔太、もとい、囚われの騎士ショティオは王の言葉にうなずいた。

「東方……設定増えた……」

つぶやく正道はもはやこの世界に入り込んでいた。俯瞰的に見てはいるものの正道の見える世界はプレハブ事務所ではなく、赤い絨毯が敷き詰められた“王の間”であった。

豪奢な玉座にイーグルライト王が座り、その横にはクリス姫。道を作るかのように立ち並ぶ銀甲冑の兵士たち。その兵たちをまとめるのは、炎のリュアンことリュアン・キンダーク。

妙な胸の高鳴りを感じる。次、翔太が真がリュアンなどと呼ばれるものならこの世界の住人になれる気がしていた。

しかし、リュアンの名は呼ばれることなくこの話は終わる。

「では、シヨティオよ。これからは本当に姫の貞操を守る者とならないか？」

「——えっ？」

翔太の口から思わず“翔太の声”が漏れる。この時点でシヨティオ・イソジマは儚く雲散霧消した。

「どどど、どういうこと、とですか？ お父様」

「翔太君、君は魔導士だろ？」

「え？」

真が指をさす。正道が動揺している翔太の顔を覗くと眼鏡の奥の左目が青く輝いていた。先刻の“寸劇”で泣いたときに取れたのであろう、コンタクトレンズが一枚頬に張り付いていた。

正道がコンタクトを指で取って翔太に見せると「あっ」と短く声を上げた。隠していた色眼しきがんがバレる恐怖みたいなものは正道には分からないが、隠すということは見られないということ。翔太は見る見る表情をなくしていった。色眼が原因で過去になにかあったのかも知れない。

「そんなに、落ち込むことないじゃないか。翔太君、ここがなにか知っているかい？」

「ここまでは入ったことないので……知らないです」

翔太がうつむきながらぼそぼそと言葉を落とす。

正道はなんだかわいそうになつて縄を切った。翔太は自由になった腕をだらりと床にたらし、動こうとはしなかった。

「ここはね、魔導便利屋エムズ。魔導で人助けをする人の集まる場所」

「魔導、便利屋？ 人助け……」

「そう。と、いつでも働いてるのは俺一人だけだな」

正道は翔太の目の前で笑って見せた。

真はどうやら翔太を仲間に引き入れようとしているらしい。真美

のストーカーという認識はなくなったようだった。

「どう？ 翔太君も自分の力を正しい方向に使ってみないか？ こにいれば真美たんのこともまじやのことも見ていられる。僕も不安だからね……二人の貞操は」

「さつきから貞操、貞操うるせえよ。大丈夫だっつーの」

「う、うん。そもそも、付き合つて……ないもん」

真にジトつと見られて真美もささやかな抵抗をした。その顔はなんだか拗^すねたような表情をしていた。

「僕が、魔導で……」

「使ったことないか？ 魔導。それなら俺が」
「あるよ」

正道と同年代の魔導士で魔導を使ったことのある者は少ない。色眼を隠しているならなおさらだ。そう思って正道はいったのだが、翔太は正道の言葉を遮って、自嘲気味に笑った。翔太はその笑みが浮かんだ顔を両手で覆い隠して沈み込む。こもった震える声が指の間から洩れ聞こえた。

「僕は……イジメられてた」

翔太は膝を抱えて語り始める。うつろな瞳に輝く青はどこを見ているのか分らない。

「あれは、小学校の四年のときだったかな。僕は友達と些細なことで喧嘩をしたんだ。そのときにコンタクトが取れて僕が魔導士ってことがバレた。今思えばだけど、その学校は魔導士を忌避するような学校でね……ドン引きだよ。友達はいなくなつたし、バカにされた。先生も助けってくれないし……でも、なんとか通つたよ。両親も耐えてくれてたし。でも、限界だった。ある日僕は原因を作った元友達に向かつて……発導したんだ」

翔太の落ち込んだ原因がそこにあった。

翔太をそうまでさせる魔導士差別は許せないと思う。それと同時によくあることだ、とも思う。本当によくあることなのだ。翔太のように“キレイ”魔導士が暴れることなんてざらにある。

翔太はそのときの情景を思い出していたのか、少しの沈黙のあと続ける。

「でも、幸い当たらなかった。なんせ、初めてだったし、それでよかったと思った。えぐれた運動場を見て、泣き叫ぶ友達を見て「ああ、この力は使っちゃいけないんだ、人を傷つけるんだ」って……そのあと僕は美泉に引越した。ここは魔導士にも比較的優しいしね。おかげさまで中学ではなにもなかったよ、学校では平凡に人間として振る舞って、家では二次元へ飛び込んだ。だんだん今の僕という人格が形成されていったよ」

不意に翔太が立ち上がった。やはり正道より大きい。埃を払って翔太は照れたように笑う。

「好きな人もできた……友達はいないし、学園じゃ朱川凜にキモがられてたりするけど、なかなか楽しい」

「凜か……」

凜ならいいそうだ。とても。正道は凜を思い浮かべて苦い顔になる。今度そんなところを目撃したらとっちめてやろうと心に決めた。翔太はポケットから予備のコンタクトを出して左目にはめた。魔導士はこれで“やっと”人間になれる。

「だから——僕の生活に魔導はいらないんだ」

剥がれ落ちた設定、本音で話す本当の翔太。その言葉の響きに嘘偽りは微塵もなかった。

「魔導で人を助けるなんて、正道君はすごいと思うし、憧れもある。でも僕には多分できない。……恐くて、使えないんだ。だから、ごめんなさい」

翔太は真へ深々と頭を下げた。真は仕方なさそうにうんうんとうなずいている。そういう事情をもつ人間に無理強いはできない。

「……来栖さん。もうつきまとわないから、安心して。学園でも無視してくれていいから……今まで本当にごめんなさい……やっぱり、僕は誰とも、関われない……」

翔太はドアの前でもう一回深く頭を下げた。翔太の目からこぼれる涙滴が床を打つ。肩が震え、噛み殺すような嗚咽も漏れだした。

翔太は友達がいないのではない。自分から作らないのだ。たとえそれが同じ趣味をもつ者でも、たとえ魔導士であっても——傷つけてしまうのが恐いから、自分が傷つくのが恐いから。

真美はどう声をかけていいのか分からぬ様子で手をもじもじと組み合わせている。嗚咽だけが響くを空気を切り裂いたのは正道の明るい声だった。

「友達を無視する友達は、友達じゃねえよな？ な？ 真美」

ちよつと、「友達」が多かったかという後悔と自分の声だけがやけに響いて少し恥ずかしかった。ばつの悪そうな顔で真美に助けを求める。

「え？ ……うん。そうだよ、翔太君。私たちは今このときを持つて友情同盟を結ぶのです！」だよ？」

正道の意図を感じ取った真美が恥ずかしそうに、しかし高らかに。「な、なにそれ？」

友情同盟？ ——ニュアンスは伝わったが正道にはわけが分からない。要は友達になったということだろうが。

『魔法ヶ丘の鎮魂歌だ』^{レクイエム}

トーンは違うが翔太と真の声が重なった。顔を上げた翔太は真を見て気まずそうに笑う。ヒビ割れた眼鏡が涙で曇っていた。

「そ、それだけは知ってるの」

「だ、だからなにそれ？ 本？ アニメ？」

「ゆ、友情同盟は、一度契りを交わすと高校生活の間は切れないんだよ……そ、それでも……いや、僕に友達なんか……作っちゃ、いけない……ひっ！」

後ろ暗い発言をしているが、なんだか少し調子を戻してきた翔太の首に正道の腕が回される。

「おい、翔太君よ。とりあえずその友情同盟とやらを解説しろ。もしたらその同盟に入ってやる」

「チツチツチ、甘いな、これだから素人は」

頼んでもいないのに真が我が物顔で前進してきた。

「友情同盟は主人公である魔法少女、マホロバ・ロンドが唱える魔法であり「私たちは今このときを持って友情同盟を結ぶのです！」は詠唱である。その詠唱がなされた今、すでにましやは友情同盟のなかにいるわけだ！ 友情同盟の有効範囲は半径五メートル。つまりここにいる全員が真美さんの友達というわけだ。そして真美さんの友達は翔太君の友達でもある」

「なんだその強制的な魔法は」

「防ぐにはサタンの耳栓というアイテムが……」

「だあー！ うっせえ！」

騒がしいいつもの感じ。怒りながらも正道は楽しんでた。この輪のなかに翔太も入ればいい。というか入れてやる。

正道は翔太の前に仁王立ちして指をさす。

「とにかく！ お前は俺と真美とこの変態の友達だ！ 違うつていうんなら、盟約違反で友達にしてやる！ 友達を作っちゃいけないなんていうな！ 自分を否定すんな！ 魔導士だって人間だ！ いやつには自然と友達ができるんだよ！ お前はいいやつだ！ 俺たちはそれを知ったから、だから友達だ！」

「誰が変態だ！」

「パパ！ 今いいとこだからっ！」

「ちよつ、なんだよ！ 汗がっ、口に！」

正道に真が飛びかかりそれを真美がひき剥がす。

「ぶっ……」

三つ巴の正道たちを見て翔太が吹きだした。そのままくの字になって笑う。泣き顔は笑い声に吹き飛ばされて今は純粹な笑顔しかない。しかし上げた翔太の顔には新しい涙の筋ができていた。その涙は翔太の過去に起因して流れたものではなかった。

「笑うなよ！」

「う、ごめん。それと——ありがとう……」

正道と翔太は笑いあった。見ると真美と真も笑っていた。友情同盟で結ばれた四人の夜は更けていく——

「さあ契約だ！」

真が叫ぶ。

「ええっ！」

翔太も叫ぶ。

「大丈夫だ、俺がサポートしてやる」

正道が翔太の肩を抱き、真の机に連れていく。真美はただ呆然とその様子を見ていた。

「でも……」

「「でも」はなし！ お前ならできるって。本当に強いやつは臆病さを持つてゐるって誰かがいつてたぞ。憧れてんだろ？ 魔導で敵を倒すヒーロー」

「そ、それは、二次元の話であつて」

「それを三次元でできるのが俺たち魔導士なんだよ。力は正しいベクトルで放ったものが力と呼べる。それができるんだよ、俺たちには」

「ほんとに……？」

正道は自信満々に親指を立てた。

「いいこといった！ ましゃ！ 僕たちはブラッドなんかとは違う、正義の集団！ その名もエムズ！ さあ翔太君！」

『やらないか』

「ひっ！」

正道と真が頬をくつつけて一枚の契約書を突き出した。その声は寸分の狂いもなく重なった。

この後、契約するしないの攻防が少しあったのだが、結局翔太は契約書にサインした。——とある条件つきで。

「僕の、ノア・リヴンダグが……持ってきた」

誰もいなくなった事務所のなかで真は椅子の上に身体を丸めて呻く。

他の三人は揃って帰っていった。

真は椅子を回転させて、そこにあつたはずの限定フィギュアの名残を見て笑う。

「まあ……いいか」

グレンと浅間

浅間照樹——ブラッドのリーダーである魔導士。特化属性は地。

自らの色眼と合わせたような黄金色の短髪に耳を埋めつくさんばかりのピアス、特徴的なのは目で、まるで狂気から削りだしたような双眸そうぼうをしている。

冷酷で暴力的。怒りのままに力を振るう直情径行な性格はこれまで多くの人間を傷つけてきた。気づけば浅間はブラッドという粗暴な組織に入り、リーダーとなった。浅間の凶暴性や魔導の精度は他を圧倒していた。暴君のような浅間のやり方に逃げ出したメンバーもいたが、その強さがカリスマ性となり集まったメンバーも多い。

そんな浅間でさえ、手も足も出ない男がいる。——グレン・F・タカサキ。突如現れた素性も分からないその男はブラッドを買い取り、オーナーとなった。提示された金額は簡単に突っぱねられるものではなかった。それに、もしそこで拒絶していたら今頃ブラッドという組織は壊滅していただろう。もちろん、全員死亡という形でグレンはそんな予想を容易にさせてしまう存在だった。

グレンは自らを魔物と名乗った。浅間はグレンが本当に魔物ではないかと思うときがある。グレンが発導するところは見たことはないが、その巨軀からは常に魔力が流れ出ているような印象を受けるのだ。そして身体能力も異常だった。しかし、『魔物』などただの二つ名のようなものなのだ。そうでないならば、魔導士すべてが魔物ということになる。

巨額の金でブラッドを買い取ったグレンは指示を与えた。それは「魔導士を誘拐する」こと。

さらう対象の条件は魔導を使ったこともないような若く、普通の日常生活を送っているような魔導士。各属性一人ずつ。性別は問わない。対象には傷をつけないこと。さらった魔導士はグレンの家へ運ぶこと。そして——そこから先は一切関与しないこと。それが条件だった。

仕事は簡単で、高額な報酬も出る。金に浮かされたブラッドのメンバーたちはグレンの指示のもと動いていった。グレンが自分の家に連れ込んだ魔導士となにをしているかは知らないし、触れてはいけないことだった。だが、ある日美泉の街に『吸血鬼』が現れ、その被害者がハリオとマリオがさらった魔導士だったことが浅間の耳に届いた。——浅間の懸念していたことが現実味を帯びた瞬間だった。

やはり、グレンは魔導士を殺しているのだ。

浅間はその予感をもとより抱いていた。二人目までの被害者は女の魔導士で、グレンは異常な性癖の持ち主ということにブラッド内での噂でなっていたが、三人目の被害者の男が見つかり抱いていた疑念は確実なものとなった。

ブラッドには決まりとして殺人はタブーとされている。間接的だが殺人に関与している今の状況はブラッドの決まりに抵触する。今までにさらったのは三人。グレンがいう通りなら残るはあと一人。とはいえ、さらう対象が殺されることを知りながら協力はできない。ブラッドのメンバーたちにも動揺が広がっている。

浅間は今までさらった三人でグレンとの協力関係を終わりにしようとしてグレンの住む別荘地へと向かっていた。

——“人殺し”は俺だけで充分だ。

「おや？」

グレンは玄関から顔を覗かせると不思議そうな顔をした。外国のホームドラマにでも出てきそうなアメリカンスタイルの家にグレンの顔はマツチしすぎてここが日本だということを忘れそうになる。浅間はグレンの家を訪ねるのは初めてだった。

「テルキがくるなんて珍しい。なにかトラブルかい？」

「ちよつと話があつてな」

「じゃあ、入りなさい」

グレンは浅間を招き入れるとキッチンの方へ向かった。漂う香りからして珈琲を入れにいったようである。グレンはいつもの軍人のような格好ではなく、ベージュのチノパンに薄手のセーターと年相応の恰好だった。この辺りであるの恰好は目立つからやめているのかもしれない。

聞いたことはないが、家族らしき人間の気配はなかった。

浅間はリビングのソファに腰を下ろす。室内の家具や調度品は高価なアンティークだったが浅間には古そうなものという印象しか与えなかった。それに今はそんなものに構ってられない。

下手をすれば殺される話をしにきたのだ。

そう、殺される。美泉の街で誘拐してきた人間はこの家に運ばれたのだ。グレンはこの家のどこかで殺しているに違いなかった。そう考えるだけで喉が渇く。水でもがぶ飲みたい気分だが鼻をくすぐるのは気持ち悪くなるほど濃い珈琲の香り。

「今日はなにもないはずだろう、なのにそんな恰好して」

浅間が絨毯を覗みつけていると後ろから声がした。気配のない接

近に浅間が振り返ると、コーヒークップを二つ持ったグレンが笑っていた。

こいつ、いつの間に？ 自分でも視線が泳いでいるのが分かって浅間はソファアに座りなおした。できるだけ自然に質問に答える。

「……俺は黒が好きなんだよ」

浅間は黒のパーカーに黒のスウェットと黒づくめの格好をしている。特に理由はないのだが浅間は黒が好きだった。

「じゃあ、ブラックで正解だったかな？」

猫足のテーブルに置かれた珈琲は濃い黒を揺らして湯気を立てている。そこに映りこむ自分の顔が緊張を孕んでいて浅間は目を閉じた。

「どうしたんだい？ えらく緊張してる」

庭に面した窓際に置かれた肘掛椅子に腰を下ろしたグレンは窓の外を見ながら訊いた。窓の外は夜の闇に沈み、時折吹く風が木々を揺らす。不定期に乱れるノイズのようなその音は浅間の心のなかを表しているようだった。

浅間は鏡面のような珈琲を見ながら口を開く。

「おっさん、お前俺たちに人さらわせてなにしてやがる」

「……」

グレンは外を見つめたまま、沈黙で答える。

「俺は殺しはしねえっていったはずだ。それをお前は納得したはずだろうが」

『死』をつきつけられて有無をいわず買収されたブラッドだったが、グレンは名乗ったのち「ブラッドのルールは遵守する」と確かにいったのだった。

グレンは嘘をつかない男だった。

「誰かを殺したのか？ ブラッドは。私は魔導士を連れてくるよう頼んだだけだ」

それも、嘘ではない。しかし――

「殺してんのと一緒じゃねえかつ！ “吸血鬼”ッ！」

浅間の弾いたコーヒーカップが中身をぶちまける。テレビに衝突したコーヒーカップが音を上げて割れた。

絨毯に染みていく珈琲をグレンは氷のような眼光で見つめていた。その眼光は立ち上がった浅間の瞳に向けられる。相手の感情を恐怖で支配するような眼光に浅間は思わず後ずさった。

珈琲を一口啜ったグレンはおもむろに立ち上がり、浅間に歩みを進める。無言。不気味なほど無言。

不意にグレンの首が前にカクンと折れた。それは操り人形の糸が切れたように――

『吸血鬼……ネエ？ 俺はその呼び名は気に入ってネエ、俺は魔物だからナ！ ギャハハハハッ』

「ッ！？」

下卑た笑い声とともに起こされたグレンの顔は今までに見たことがない顔だった。

目は見開かれ、眼球はヒビ割れのように血走っている。限界まで吊り上がった口角は人間とは思えない。その口から発声される音は人間のものではない。グレンの声も聞きとることはできるが、ヘリウムガスでも吸ったような声が前面に出てきている。悪魔……いや、魔物が浅間の眼前に立っていた。

「……お、おっさん。……マジかよ」

『マジダ！ マジダ！ マジダ！ マジなんだヨオ？ 魔物はいる

んだゼエ？ 俺は嘘つかネエ！ ギャーッハッハ！ おーっと！
発導しようなんて考えるんじゃないやねえぜ？ マジで死ぬかろ。……お
前がナ！ ギャーッハッハッハ！」

グレンの皮を被った魔物はおどけた様子で部屋中を跳び回る。跳
躍し、壁を蹴って空中で回転。その着地地点は自分が飲んでいたコ
ーヒーカップのふちだった。

体重百キロはあろう大男が小さなコーヒーカップの上でバランス
を取っているありえない光景。浅間は言葉を失い再びソファーに沈
みこんだ。

「で、なにいいにきたわけ？ グレンに文句か？ オットット……」
ヤジロベエのようにバランスを取りながらグレンが自分の名前を
呼んだ。今声を出している魔物とやはグレンのなかにいるのだろ
う。

魔物は乗り移る幽霊みたいなもんか？ ——浅間はそんなことを
思いながらここへきた目的を告げる。声は震えていた。

「……あ、ああ。もう俺たちは協力できねえ」

「ハハッ、あと一人じゃねえ力！ それくらい我慢しろヨオ。あと
一人だから“俺たち”が動いてもいいんだけどヨオ、こんな大男が
人さらいにうるついてたら目立つダロ？ だからお前らみたいな
のが丁度使いやすいんだヨ。最後までやり遂げるのが仕事つてもんだ」
コーヒーカップから飛び降りた魔物はその勢いのまま浅間の横に
座って肩を抱いた。

「ナア？ テルキ君」

耳元で魔物が囁く。その声は首筋を舌が這うような感覚がした。
得体の知れない恐怖に浅間は慄然とする。

「好き勝手いいやがって、くそつたれ……お前はなにしようとして
やる」

「ンー？　それが見たいならあと一人ダ」

「……見たくねえ。好きにしろ。とにかく、もう協力はしねえ。金は返す」

浅間は肩に置かれた手を払いのけて立ち上がる。思いのほか普通に立ち上がることができて浅間は少し拍子抜けた。

魔物は正面を向いたまま下卑た声を上げる。

「金？　あんな紙切れいらねえヨ。あれはヤル。独り占めだぜ？

その代わり……お前らの命を貰ウ」

「ッ！」

「ナア二、安心し口。お前だけは生かしておいてやるヨ。お前らの汚エ血はいらねえかう、あの倉庫ヲ血のプールにしテ、二人で踊ろうぜ。お前は金を手にした喜びヲ、俺は“復活”のダンスでも踊るかナ！　ギャツハツハツハ！」

魔物の笑い声が残響のように頭のなか響く。

去来するのはハリオやマリオ、仲間の顔。言葉より先に、身体が動いていた――

浅間は両手を広げて魔物から距離を取った。瞬間、浅間の両手が黄金色の発光で満たされる。魔物は浅間を見もせず、笑い続けた。

「死ねよ、くそつたれ――」
『アース・オブ・メイテン 大地の拷問器具』！

浅間が咆哮して床を叩きつける。地響きとともに床板が砕け魔物の前と後ろにそれは顕現した。

魔物の眼前にあるのは虚無を内包した棺のような入れ物。屹立する棺の天頂には柔らかく笑う女性の顔。その表情は聖母マリアのような慈悲をたたえ魔物を見下ろしていた。しかしその後方には無数の鋭い槍のような突起を備えた壁が屹立している。

『鉄の処女力……趣味がいいネエ！ テルキ！』

魔物は愉悦に歪んだ顔を浅間に見せて立ち上がった。そこから動く気配はない。

『知ってる力？ テルキ。鉄の処女を作らせた女は自分の若返りのために血を集めてたんだぜエ……なんだ力、運命感じちまうナアッ！』

「黙れバケモノ」

浅間がいうとその拷問器具はなにもかもを巻き込んで、その棺に魔物を納めた。棺が閉まる寸前に浅間を見ていた魔物は変わることなく笑っていた。

『ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

耳障りな断末魔が耳朶を叩く。浅間は少しでもその音を遮断しようとフードを深く被った。

「なにが、魔物だ……ハツタリかましやがって」

これで終わった。浅間は断末魔の余韻を聞きながらふらつく足取りで玄関へと向かう。

『アアアアア……ッハッハッハア！』

断末魔が笑い声に転換した。

「なッ……」

轟音とともに拷問器具が四散する。なかから無傷の魔物が笑いながら出てきた。破れたクッションから出た羽が舞うなか魔物は手を広げる。その手のひらには仄かに黄色い燐光が残っていた。

グレンは火を特化属性とする魔導士。この魔物はその特化属性ではなく基本属性で浅間の発導に耐えたようだった。グレンと魔物を別のものとして扱うべきなのかもしれないが、力の差は歴然としていた。

『無駄ダヨ、テルキ。お前程度ジャ、俺は倒せねえぜ……まア、お前も“目覚めれば”話は違つかもだけどナア!』

浅間はその言葉を聞きながら崩れるように膝をついた。

魔導士は魔物に対抗するために存在すると聞いたことがある。しかし——こんなの、無理じゃねえか……。

『あと一人ダ。分かったナ?』

浅間は従うしかなかった。仲間の命が乗った天秤は片方になにが乗ろうとも動くことはないのだ。

これは翔太がエムズと契約した翌日のことである――

「翔太あー！」

「ひっ！ まっ、正道君」

終業のチャイムとほぼ同時に2組のドアが勢いよく開かれる。名前を叫ばれて跳び上がった翔太はなんだか謝りたくなったが、昨夜の友情同盟を思い出して心を落ち着けた。友だちという存在に名前を呼ばれる感覚が久しぶりすぎて逆に新鮮に感じる。そしてどこか気恥ずかしい。

そんな翔太を一瞥して同じクラスの凜が「キモッ」といつて正道のもとに駆けていった。もう慣れているので気にはしないが地味に傷つく。

赤い髪と胸を揺らして凜は正道に飛びついた。数人の男子生徒が揺れる胸を見てどよめき、女子生徒の舌打ちと重なる。

「正道いー！ ついに私と一緒に帰る気になったのね？」

「お前耳悪いのか？ 俺は翔太っていったぞ」

「はっ？ ……あのオタクになんの用？」

谷間を見せつける凜の目が細くなる。その目を見る正道の目も同様に細められる。密着したままの睨みあいになった。

「悪いが翔太は俺の友だちなんだ」

「嘘」

「嘘じゃねえ。凜、俺の友だちをまともに知りもしねえでオタク呼ばわりすんな」

「な、なによ！ あんなオタクと友だちですって！？ 初耳よ！
なにがあつたの正道！」

「うるせえなあ。俺が誰と友だちだろうが関係ないだろ！」

「私と付き合うなら友達も選んで欲しいのっ！」

凜はギヤーギヤーと手足を振り回してわめく。口から飛び出すのは罵詈雑言の数々。なにか落ち着かせる（または排除する）手立てはないかと考えていると激しく上下する胸の谷間に黒い下着がちらついた。

「あ、お前。黒い下着は校則違反だぞ」

「そんなのバレなきゃ大丈夫よ！」

「バレなきゃな」

「は？」

正道が廊下に顔を出す。視線の先には二階へと繋がる階段の踊り場。

その人物は丁度この時間に降りてくるはずだった。

そして正道の予想は的中する。踊り場にいた生徒たちが少しざわついた。“ファンクラブ”のメンバーなのか、なかには黄色い声を上げている生徒もいる。

「きたっ」

今日の“装備”は膝までを覆う銀のブーツに赤のビキニパンツ。

両腕には装飾の施された銀の籠手^{こて}。腹筋の割れた腹部は剥き出しで胸部はシルバーの胸当てで守られている。腰に携えられた細剣^{レイピア}が怪しく光る。

緩くウェーブのかかった金色の長髪、強さと妖艶さを兼ね備えた美貌。左目を隠すアイパッチは赤い十字の刻印——生徒指導部所属、情報処理担当。“美しき廃人”、天羽黎亜。その人である。

「げっ」

一緒に顔を出していた凜が天羽を見て逃げようとした。しかし正道に首根っこを掴まれる。

「天羽先生！ 校則違反です！」

「むっ」

校則違反という言葉に機敏に反応した天羽は威風堂々歩みを進める。そして酷薄な笑みを浮かべながら凜を睨めつける。

「ほう……また、貴様が、朱川凜。国賊の色、黒を身につけるとは大した度胸だ。いいだろう、私が指導してやる。蘭！ こいつを連行しろ」

「御意」

呼ばれた凜が忍者のように現れた。その瞳には天羽への忠誠の色が浮かんでいる。

「ま、正道いいい！」

踵を返す天羽の後ろを蘭が姉を引きずり去っていく。

急な蘭の登場に啞然としているとこちらを見ていた蘭が胸ポケットから一枚のカードを出した。

金色に輝くそのカードには『天羽黎亜公認ファンクラブ エンジンエルウィング』とあった。

「蘭……お前つてやつは」

正道はなぜか親指を立てた。

ことの成りゆきと凜の揺れる胸を見ていた野次馬たちは散り、放課後の平穏が訪れる。正道は翔太のもとへと向かった。

「すまんな翔太」

「い、いいよ。あ、謝るのは僕の方だよ。僕のせいで喧嘩みたいになっちゃったし……でも、あ、ありがとう」

「礼をいわれるようなこととしてねえよ。友情同盟の同志としてはあたりまえだ」

「そ、それ、花鳥院かちょういん百合丸ゆりまるのセリフ……」

「誰だ、その花のような名前のやつは……」ってそんなことどうでもいいんだよ。さっきおっちゃんから、あ、真美の親父さんな？　メルあったんだけど、今日の仕事はないんだと。引越しの依頼だけだったらしくて違う日に回ったらしい」

「う、うん」

「でな、今日は特訓しねえか？　俺ん家で」

「と、特訓？」

「そう、特訓」

三階建ての階層ごとに黒白黒と塗り分けられた外壁。丸みというものが皆無な外観。巨大な白黒の正方形の横にあるのはガレージだというこれまた白黒の正方形。正方形の兄弟のようなそれが正道の家だった。その存在は明らかに周りの家から浮いている。

「親父いわくこの白と黒は正義と悪を表してるらしいぞ。」「正義があるなら悪はある、それを忘れないためだ」だそうだ」

「け、建築士ってなんだかすごいんだね……」

ここに向かう途中で翔太は正道の父が建築士だということを聞かされていた。

「貧乏だがな。まあ入れよ」

庭を抜けて正道が扉を開けるとカレーの匂いが二人の鼻腔をくすぐる。自然と沸き出た唾を吞んで正道と翔太は靴を脱いだ。

「お、お邪魔し、します」

「そんな緊張すんなよ」

正道は笑うが、翔太は他人の家に上がる経験などほとんどない。しかもそれが友だちの家など夢のなかにしか存在しないものだった。

家の内装も白と黒で統一されていた。玄関から延びる黒い廊下の両端に白いドアが等間隔に並んでいる。

翔太がきよろきよろと忍び足で廊下を歩いていると、カレーの匂いの漂う先から足音が近づいてきた。家人の接近になにをいうべきかと翔太の心臓が早鐘を打つ。

廊下のつきあたりの部屋から顔を覗かせたのはエプロンを身に付けた中肉中背の魔導士。目尻の下がった優しそうな目に輝くのは正道と同じ赤。無精ひげを生やした口元も優しげな笑顔をたたえていた。

「親父だ」

その魔導士が正道の父、剛だった。寝ぐせのついた頭をかく手にはお玉が握られている。

「おう、帰ったか。お、友達か？ そのヒビ割れ眼鏡は」
「！」

翔太は面喰った。確かに昨日の今日で眼鏡を買い替えるまでに至ってなかったが。初対面の大人にいきなりそこを突かれるとは思っていなかった。優しげな印象は崩れる。

「親父、その変なあだ名つける癖やめろ。おふくろは？」

「母さんは今頃雲の上だ」

いつて剛はお玉を高く掲げて、もう片方の手で目を隠す。

「死んだみたいない方とその動きもやめろ。また旅行か」

正道の母親は健在である。そして旅行癖といっていいほど旅行へいく。今回は海外らしい。おかげで脇坂家の財政は圧迫されている。しかし剛はその姿が見えなくなるほど尻に敷かれているので抵抗しない。

「そうだ。旅立った……帰ってこなくても、いい」

剛は再び目を隠して小声でつぶやいた。

「おふくろにいいつけるぞ」

「燃やすぞ、正道」

「フン、やれるもんならやってみろ」

そんなやり取りを翔太はただ啞然と見ていた。見ている以外なかった。正道は剛を鼻で笑うと廊下の途中にあるドアを開け、手を伸ばしてその部屋の電気をつけた。

そのドアの向こうはなんなのだろうか。翔太からは窺い知ることができない。その部屋から出た冷たい風が廊下に流れた。

「ちよつと、“潜るぞ”」

「ほう。珍しい。真の仕事に支障でも出たか」

「ちげーよ。メインはこいつだよ」

正道は翔太の肩を叩く。翔太が申し訳なさそうに頭を下げた。

「ふむ、君は魔導士か。長髪木偶でくの坊君」

「！」

「やめるクソ親父。翔太の精神が死ぬ」

「翔太君か。名乗らないからついつい。ハッハッハ」

「す、すいません……」

「謝らなくてもいいぞ、翔太。いこう」

正道は小さく謝り続ける翔太の背中を押してその部屋へと向かう。

剛はお玉を振りながら廊下を戻っていった。

「でてきたら美味いカレーが待ってるぞあ」

その声を背に正道と翔太は部屋に入った。

ドアの先には階段が地下に向かって伸びていた。少し埃臭く、コンクリート打ちっぱなしの壁が冷気を放っていて少し寒い。

「も、潜るってこういうこと？」

「そう。親父特製の“魔導士用”トレーニングルーム」

「魔導士用……」

翔太は乾燥した唇を舐めて正道の背中を追う。正道は防音のためなのか重そうな二重扉を開けるとなかに入っていく。高い天井で蛍光灯が瞬いて部屋の闇が取り払われる。三十畳はあるだろうその部屋には——なにもなかった。灰色の四角い箱。その表現がふさわしい。

「無駄スペースだと思わね？」

正道の声が部屋のなか反響する。ドアを閉めると自分の鼓動が聞こえそうなほどの静謐に包まれた。

「特訓は高校までだったからもうでっかいマーシャルとかドラムセツトとか置いてスタジオかなんかにしてやろうと思ってたんだが、ストレス発散とかいって親父がたまに使うんでな」

正道がぺたぺたと叩く打ちっぱなしの壁にはところどころ焦げたような跡や修復したような跡が残っていた。それも一つや二つではない、所在なく視線を泳がす翔太がどこを見てもその跡はあった。

「こ、ここで発導するの？」

「そう。ここなら誰にも怒られないし、誰も傷つかない」

「誰も……」

「魔導を使いこなそうと思ったたらある程度の鍛錬が必要。魔導だけじゃない、それはどんな力だってそうだ。俺たちが箸を持てるのだっていつてみれば日々の鍛錬の賜物だろ？　それは『箸を持てる』という眠っていた力を開花させたということだ。箸を持てることで手も汚さず上手く飯を食べるようになった。それと一緒に魔導士も日々の鍛錬が必要なわけだ」

正道は箸を動かすジェスチャーを交えて語る。その分かるようにで分らない話に翔太は苦笑を浮かべた。

「説明下手なのは目をつぶってくれ。とにかく、魔導は眠らせておく力じゃないと俺は思ってる」

「で、でも魔導は……傷つけるための力……」

「お前のトラウマも分かるし、傷つけるためってのも本当だ。でも、その対象は悪だ。“俺たち”正義の魔導士はそのことを知ってる。

正しく使われる魔導は人を守る。最終的には魔物つてやつから世界を守るかもしれないねえんだぞ？　そんな力をぐーすか眠らせておくのは違うと思うんだよね。魔導士として生まれたからには意味があるんだって絶対！」

「生まれた意味……」

翔太を見つめる正道の色眼は宝玉のように透明で赤い。正道の熱をそのまま色として現わしているような瞳に翔太は正義を感じ取った。

自分もこんな目をしてみたい。正道君のようにここまでまっすぐな感情で動けたら……僕はヒーローになれるかもしれない――

翔太の手がおずおずと自分の左目に伸びる。そして眼鏡を外して、そっと眼球に触れる。

「な、なにを、すればいいの」

笑顔の正道を見つめるその瞳には強い決意の青が揺らめいていた。

「とにかくぶつ放せ」

それが正道の最初の指導だった。二次元に浸っていたおかげで翔太の頭のなかには魔導だけでなく様々な異能に対する豊富なイメージが詰まっている。自分が発導する姿がはっきりと映像化できた。

でも、恐い——口が渴く。小学校のときの友だちの泣き顔が浮かぶ。大人たちの冷たい瞳も。

でも、昨日僕は変わった。こうして支えてくれる友だちができたのだ。魔導を正しく使うことができれば、あの友だちの泣き顔は消えてくれるかもしれない。そしていつか笑顔にできる日がくるのかも知れない。

『——！』

翔太は意を決して叫んだ。

自分のなかのイメージは現実のものとなった。魔力の奔流は翔太が思い描いた通りに暴れ、妄想が現実になる感覚は翔太に快感のようなものをもたらした。

しかし指示通りに発導した翔太はなぜか怒られた。

「水浸しじゃねえかッ！」

「ぼぼ、僕悪くないッ！」

翔太が発導した後、部屋は数センチ浸水した。一応排水溝はあったが、床に置いていた正道と翔太の荷物はもれなく被害を受けた。

正道は翔太の特化属性を気にしていなかったようである。

「くう……お前水の魔導士だったな……ミスった」

正道の家族に水を得意とする魔導士はいない。母親は風を特化属性としていた。正道は濡れた教科書をつまんで苦笑する。

「でも、水の魔導つてちゃんと見たの初めてだけど。なかなかすげえな」

「すごいね……」

翔太は水を打ちつけられて色が変わった壁を見ながらつぶやいた。とても自分でやったこととは思えなかった。

「他人ごとかよ」

「だって……」

「まあいいよ。お前が発導できただけよしだ！ さ、今日はここまで」

「え？」

まだこの部屋に入って間もない。特訓という言葉が似合わない唐突な終わりに翔太は拍子抜けした。

「いきなりやりすぎるとぶっ倒れるぞ。それに」

正道の腹が獣のように唸る。

正道は腹をさすって屈託のない笑顔を見せる。

「腹減ったし」

「正道に正義を教えたのはなにを隠そうこの私です」

剛は食卓につくと、スプーンを持った手を挙げた。食卓には白い皿に盛られたカレーとポテトサラダとスープが芳香を立てている。翔太は遠慮したが、正道に押し切られる形で食卓についた。

「そ、そうですか」

翔太はぎこちなく返事を返す。正道は一心不乱にカレーをかきこんでいるし、剛は完全に翔太だけを見ていた。それに、黙っているとなにをいわれるか分かったもんじやない。

「形だけな」

正道はいいながらおかわりをしに席を立った。翔太はまだ半分も食べていない。カレーは本格的なものだったが、緊張していたため翔太の口に広がる味は曖昧だった。

剛は挙げているスプーンをくるくると回してから正道に向ける。行儀はあまりよくないようである。

「ふん。なんでも物事は一から始まるのだよ正道。一は全というだろう？ 私が形という一を与えたのなら、それは全てを与えたということと同義だよ」

「はいはい」

正道は席につき、スープを飲みながら剛をあしらうように返事をした。

剛はふんと息を抜いて挙げていたスプーンをカレーに滑り込ます。

「うむ。美味し。翔太君も早く食べなさい。食事中に会話をするの

はいかなものかと思うぞ、親の顔が見てみたいものだ」

「！」

「そのセリフの対象は親父だぞ」

剛は「私は自分を戒めている」などわけの分からないことをいつてカレーに集中した。翔太も焦って食べ始める。

食事が終わるとうさを模ったリンゴがデザートとして出てきた。それは耳だけをリンゴの皮で現わしたのではなく、デフォルメされたうさが皮に彫られているものだった。剛は非常に器用らしい。

「す、すごい」

「暇なんだな、親父」

「フルーツカーヴィングというのをテレビで見てな。やってみた。ボケ防止だ」

この人がボケると大変なことになるんじゃないかと考えながら、翔太はリンゴを一切れ口へ運ぶ。爽やかな香りとみずみずしい果肉が少し緊張を和らげる。

「私が正道に魔導を教えたしたのは正道が小学校に入る頃だったかな」

唐突に剛が口を開く。

「なに語り始める気だ」

正道が口を挟むも剛は止まらない。翔太は聞くしかなかった。

「丁度その頃、いや、真美ちゃんがいたから幼稚園の頃か……正道が初めて発導してね。それは悪いことに使ったんじゃないが、このままなんでも魔導で解決する子になるんじゃないかと危惧して私はあの部屋を作ったんだ。私の思うところもあったしね」

「暗い話するつもりか。翔太が困るだろ」

「い、いいよ、僕は」

問われて拒否できる状況ではない。剛は満足そうにうなずいて続

ける。

「これは私たち親子の正義の素となる話だ。私は中学生の頃、目の前で友人が魔導士に傷つけられたことがある。それはその頃流行っていた魔導士の通り魔だね。そいつは友人を魔導で傷つけた後、すぐに捕まったんだが……私はなにもできなかった。その友人からは恨まれたよ、「力があるくせになんで助けてくれなかったんだ」ってね。その友人は魔導士ではなかったし、守るのは私の役目だった……」

正道はこの話しを知っている。なのでつまらなさそうにリンゴを咀嚼しているが一応真剣に耳を傾けていた。

「いいわけではないが、その頃の私はまだ魔導というものを使ったことがなかった。でもあのときに魔導が使えていたら、と思うと悔しくてね。そこから私は魔導を訓練した。悪を許さず、魔導士としてこの手の、この目の届く範囲の人間を守るようにね。……たとえば聞こえはいいが本当は失った友人との関係を取り戻したかったんだ。……まあ、そのおかげで私の正義は築かれてゆき、私のなかに流れる正義の血潮はわが息子にも受け継がれたわけだ。ハッハッハ」

剛は快活に笑い終わると、うさぎが躍るリンゴを口に放り込んだ。剛の話は一段落したらしい。

「で、なにが良かったんだ」

「ん？ 剛、sジャステイスストーリー」

（失われた友人との関係……僕もそうなのかな……）

「帰るか、翔太」

「え？ え？」

正道はおもむろに立ち上がって玄関へと歩いていく。翔太は戸惑いながらもついていくしかなかった。

廊下へと繋がるドアの前で頭を下げる。

「お、お邪魔しました」

「うむ。翔太君も悪に溺れることなく、私のように立派な魔導士になりなさい。……まあ私の息子と友だちなら大丈夫だがね」

背を向けたまま話す剛の最後の一言はどこか照れたような雰囲気带着ていた。翔太は頬笑みながら静かにドアを閉じた。

「すまん。バカ親父で」

「うつん……楽しそうな人で、いいと思うよ」

「まあな」

送っていくという正道を制止して翔太は家路につく。

「これから、時間ができたら特訓な」

「うん」

「このリュアン・キンダーグがお前を鍛えてやる」

正道は腕を組んで胸を張った。

「キンダーグじゃなくてキンダー“ク”ね」

「うつ……」

自分から乗って滑った正道は恥ずかしそうに横を向いた。その様子を見て翔太は笑う。

「じゃあ、また明日」

「おう」

なんだかんだで、楽しかったな——初めての友だちの家から帰る

翔太の足取りは軽く。鼻歌でも歌いたくなるような高揚感に包まれていた。

翔太は翌日からエムズでは正道と行動を共にした。部活動など進んでおこなっていない翔太に放課後の時間の制約などない。

翔太が発導できるのは正道の家だけで、魔導を使わない翔太は雑用などをしながら正道の仕事を見ていた。

正道は必要以上に魔力を行使せず、淡々と仕事をこなす。翔太はここまで精確に魔導を操る正道を見て素直に感動していた。

正道いわく、「親父の特訓の成果だ。お前にもできるよ」だそうなのだが、簡単にできるものではないと思う。

それに、翔太の父は“あんな”父親ではない。

正道の魔導は誰も傷つけることはなかった。むしろいく先々で感謝されていた。正道のいつていたことは本当だった。発導の結果に生まれた笑顔を翔太は初めて見た。

正道や真は翔太に魔導の強要はせず、翔太の意思に任せるとのことだった。真美もそういつてくれていた。

最近ではそんな優しき“友だち”のために力になりたいと思っている。

でも、

——僕が魔導を正しく使うことなどできるのだろうか。

その想いは消えてくれなかった。

翔太が初めて人を守るため魔導を使っ
たのは満月が輝くある夜の
ことだった。

『GAME SHOP タートル』

美泉坂通り路地裏。煌々と輝く娯楽施設のネオンが路地裏の闇の輪郭をさらに濃くしている。その店舗はその闇に紛れるように存在していた。

自動ドアの向こうに見える店内は薄暗く、人を寄せ付けない雰囲気醸し出す。亀のキャラクターが描かれた看板の電灯は明滅を繰り返し、虫すらもその場に足をとどめない。

一見いかかわしいDVDかなにかの店のようにも見えるが、ここはゲームソフトやハードだけを売る列記としたゲームショップである。

店としてはこじんまりと怪しいがその品揃えは大型店舗並み、しかもこの店は新作ゲームが“フライングゲット”できる。無口で無愛想な店主のおかげで「薬の販売してる」や「武器の取り引きもおこなっている」などまことしやかな噂も立っているがゲーマー間では穴場として有名である。

翔太もタートルの常連だった。

タートルでは新作ゲームを発売日二日前の午前零時丁度に販売する。その時間帯は危うい空気が漂う美泉坂だが、誰よりも早く新作ゲームをプレイできる誘惑には勝てない。

翔太はこの日新作ゲームを手に入れるためタートルに訪れていた。翔太は代金を支払い、無言の店主から商品を受け取るとそそくさと店を出る。外は一瞬目を閉じてるのかと思ってしまうほど暗く、

翔太を不安にさせた。

この闇に乗じてブラッドが忍び寄っているかも知れない。翔太の携帯が示す時刻は午前一時。

翔太は午前零時丁度に辿り着こうとしていたが十一時頃に寝てしまいこんな時間になった。エムズでの仕事や正道の家での特訓に疲れているのだ。ただ、その疲れは充実感を伴っていたので翔太本人は疲れとは感じていないが。

「も、もうこんな時間……」

翔太は辺りを見渡してから自転車にまたがった。

翔太は暗い路地を縫うように走る。ブラッドなんかがいるかも知れないが徒歩ではない分、気は楽である。明るい大通りの方に出てもいいのだが、そこにはナンパ目的の路上駐車やタクシーが多く走りづらい。深夜だというのに往来も多く、人混みが苦手な翔太にとっては避けたいところだった。

しばらく走っていると地鳴りのような音楽に自分が近づいていつてるのが分かる。ここはクラブ『チルドレン・オブ・ナイト』の裏手にあたる道だった。

チルドは美泉市で最大のクラブだと聞いたことがある。だがそれだけ。翔太はチルドに対する認識はそれだけだった。漏れ聞こえる低音から店内の様子を想像してクラブという場所は自分のいくところじゃないな、とぼんやり思う。

「あっ」

翔太は過去、この場所で不良の喧嘩を目撃したことを思い出した。そんな場所に自ら向かうわけにはいかない。

翔太はこの道を避けようと人が多くて苦手な大通りの方に向かうとしたが、視界の隅に捉えた影に気を取られた。

（うわ…… なな、なに）

翔太は電柱に自転車を寄せて隠れる。

チルドの裏手には一台の車が止められており、そこに向かって三人の影が歩いていく。その影は男が二人に女が一人に見える。

会話は聞こえてこないがナンパかなにかのように見えた。

そんなところを見ていると仕方ない。翔太が帰ろうと視線をそらすと慌たらしい足音だけが響いた。

（えっ？）

見ると、一人の男の影が女の影を抱いて車に押し込めていた。

（ええええっ！？）

もう一人が運転席に駆け込み、車が走り出す。そのとき裏口が跳ねるように開き、大声で誰かの名前を叫ぶ女が飛び出してきた。長髪を揺らし車を追う、小柄なシルエット。

翔太はそのシルエットと声に覚えがあった。

「朱川……凜？」

翔太の見立て通り、その女は朱川凜だった。

車を追いかけている途中で転んだ凜は後ろからきた自転車に驚いていたが、それが翔太と分かって少しほっとしたようだった。

胸の開いたワンピース丈のTシャツ、等間隔に楕円形の穴があけられている黒のレギンスに赤のパンプス。凜は学園にいるときとは違い、派手な格好をしている。化粧も一段と濃く、年齢をいくつか引き上げている。二十歳といっても誰もが納得するだろう。

濃いアイシャドー、羽のようなつけまつげの下から睨む凜の左目は青く輝いていた。

（僕と同じ……）

普段は見せない格好と色眼に翔太は息を呑んだ。

翔太が凜を見つめていると、顔を歪めて凜が立ち上がった。その顔からは先刻見せた安堵の表情は消え去り、浮かんでいるのは焦燥と怒りのようなもの。凜は眉間にしわを刻んで叫ぶ。

「なんであんたがこんなところにいんのよ！ まさかストーカーなわけ！？」

「た、たまたまだよ！ そ、それより、どうしたの？」

「……そうよ、あんたと話してる暇なんかないわ」

凜は翔太を無視して再び走り出そうとするが、転んだ際に膝を打っていたように引きずるようにしている。穴の開いたレギンスからは赤い鮮血が一筋流れていた。

見かねた翔太が凜の腕を掴んだ。振り返る凜の瞳は涙で潤んでいた。翔太のなかで揺れていた決意というものが固まった気がする。

「なによ！」

「う、後ろ、乗って。追うんでしょ、さっきの車」

「えっ？」

「い、いいから、乗って！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453w/>

正しい魔導の使い方(仮)

2011年10月9日14時38分発行